
龍巫のクロニクル

PM8:00

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍巫のクロニクル

【Nコード】

N6865L

【作者名】

PM8:00

【あらすじ】

ある日、それは待った無しでやって来た。高校生竜那はふとしたことで日常が破壊された。そして日常の破壊者の魔の手が迫る中、突然、彼が舞い降りた。そんな彼、ラグナと名乗る三白眼の青年は竜那を護るために一時的に護衛にあたる。その時彼女は自分自身に思いもよらない異変が起きていることに気がつく。そして事が終え、彼女は『リユナ』と名を変え、彼に導かれて異世界へと踏み込んでいく。そこは剣と魔法と科学と軍の世界で彼女はその学園に転入するが、軍上層部の不穏な動きで、また危機が訪れて――

「ミニマムドラゴン」こと少女竜那と、謎の青年ラグナが出会った時、二人の運命の歯車が回り、物語は静かに幕を上げる。

∞話 始まりの刻

人生にセーブポイントはない。そう、リセットの効かないゲームのように。

ただし自分と関わった人々の頭の中には記録される。

だからもし自分が死んでも、その人の中で生き続けられるのだ。

しかし、そういった絆や認識を断ち切られたら、独りになったその人はどうなるのであろうか。

例えば生き続けても、何を言おうと何をしようとも、何もなかったことにされるのであろうか。

だから、敢えてあなたに問う。

本当の意味で死んでしまったら、あなたはそれに耐えることができるかを。

私はそうなってしまった。
でもそれと同時にあの人に会えたおかげで、私は此処にいる。

穏やかな陽気と光が窓から差し込んでいる部屋の中は明るく午前中だと推測できる。

その部屋のベットの一人で一人の少女は鞆から取り出したデジタルビデオを弄くり、そして何とか電源を入れて作動させると自分が映っているかどうかを確認する。

それから映像の画質が良好であることをチェックし、早速カメラ目線で自己紹介を始める。

『え〜と、どうもリュウナです。ん〜何話そうかなー？ 此処に来てから結構経つけど迷うな〜』

カメラのレンズの前で悩む表情になったリュウナは顎に手を添えて考えること一分。

まるで頭の頂点で電球が発光したような表情になるとスタッと座っていたベットから飛び降り、

「此処でグダグダあたしの話をしてムービーのクオリティは低い。よし、此処は実況をやってみますか！」

ようやく方針が決まったらしい。

リュウナは早速カメラは自分に向けたままで意気揚々と部屋のドアの方に向かって歩き出し、そしてそれらを映しながら開け、部屋の外へと出て行く。

それから此処は二階なのか右に階段があり、そして正面にはドアが一つ存在している。

リュウナはそれらを一通り映し、

『見よ！ この無駄にでかい家を！ あたしはとある複雑な理由でこの家主さんに部屋を貸してもらっています。でね、此処の家主さんも結構複雑な事情が絡んでいるお方でその点に関してはいろいろびっくりしたよ〜』

そう言いつつ階段へと向かい、一段一段降りながら実況を続ける。

『で、今回はこの家の住人達の姿を映像に収めようとただいま移動中でーす。彼らならやってくれる、面白い映像を。そしてカメラの位置が低いのは決して仕様ではなくむしろこれが限界なのだよ。いやーそういうのは昨日ホラゲーやってたら見ていた二人のリアクションが……ってあれれっ！？ 電池一個！？』

ブツンッ

「あっ……切れた」

階段を降りきった丁度のところで、長く漏電によって電池残量がほとんど無かった所為で、デジタルビデオの電源はすぐに落ちてしまった。

こうなった以上何度も電源を切ったり付けたりをしても無駄なにとぐらい分かっている。

リュウナはしげしげと恨めしそうにレンズを見下ろしていたが、やがて短くため息をつくと、

「衝撃のラストにもならんオチで終了ですかい。世の中しよっぱいね」

などと人生の苦みを噛み締める。

最初の悩んだ一分がなければと後悔するが過ぎてしまったことは仕方がない。

それからこの手に持っている複雑な構造をした物体と化したもの

を自室に戻って置いてこようと思った時、突然奥の部屋から声が掛かった。

「おおゝい”タツナ”、何かクッキー焼けたみたいだぞゝ？」

のんびりとした大人の男の声。

するとリュウナは即座に反応し、ふんふんと鼻を嗅いでみせると香ばしい匂いが伝わってきた。

できたてクッキー、ホットミルク、それらが頭の中で連想されるとすぐさま体が動く。

「おおっ！ 食べる食べる！ ってウチには甘党二人いるのは忘れてた！ 急がなきゃ！」

甘いモノを欲しいと思い、そしてクッキー消滅の危機を感じたりユウナはやや五月蠅く廊下を走っていった。

それからドアをボタンと開けて閉め、部屋の中を見ると早速そこで惨劇(?)を目にする。

「あー！ ちょっ、食べ過ぎ！」

「ふっふ、遅いわねリュウナ。さっきから呼んでんのに来ない方が悪いのよ。はーむっ」

「あっ……来たのかタツナ」

そこにはリュウナよりも背が高く、凛々しい端正な顔立ちの少女が意地悪そうにカリッと音を立てて最後の一枚を食し、その隣では二十代前半くらいの青年も最後に一枚を啜ってからリュウナの方に振り向いた。

皿の上には並べられていたと思われるクッキーの破片が散らばっており、そこには一枚も存在していなかった。

「ちよっ、ラグナも食べ過ぎでしょそれっ!？」

「いや呼んでもこねえからいらねーかと思ってトドメ刺したけど…それ何だ？」

ラグナと呼ばれた青年はクッキーをムシャムシャゴックンするとリュウナの手持たれているデジタルビデオを指をさして質問してくる。

「これはね、あたしの世界のテレビカメラなの。因みにあたしが来なかったのはこれ弄くり回していた所為なの! むうう、……ん? くんくん、良い匂いがする」

ふと奥の方からまた香ばしい匂いが漂っていることに気がつき、そちらに不思議顔を向ける。

『大丈夫だよりユウちゃん、第二弾があるからー』

すると部屋の奥のキッチンから舌足らずなのんびり声が聞こえ、そしてタイマーの切れる音がする。

その途端リュウナは感動に近い何かを体中で感じ、

「え? ま、マジですかい!? ナイス~~~~~!!」

まだ出来たてクッキーが残っていることに感激した彼女はキッチン目掛けて突進していった。

それから約三十秒後。

『あうー、ご、ごめんねリュウちゃん』

そんな声がすると、今度は何故か先程の勢いを無くしたかのようにトボトボと肩を落としたリュウナがキッチンから戻り、二人の視線が向けられる中、ガツクリと向かいの席まで移動して座ると頂垂れるようにテーブルの上で両手を投げ出す。

「……どうしたんだ？」

「えぐっ、あのね、ひぐっ、クッキー焦がしちゃったって……」

「……あら、珍しく失敗しちゃったのねあの子」

どうやら温度調整を間違えてしまったらしくクッキーは残らず癌の元になってしまったそうなの。

その話を聞いた二人のウチ、ラグナはこっそりと自分の皿をリュウナの前に差し出す。

「ん？」

「ほれ、夜喰おうかと思ってとつといた奴だ。喰えコノヤロー」

そこには、三枚ほどの焼きたてクッキーが鎮座しており、香ばしい匂いを醸し出していた。

リュウナはそれを見るやすぐさま体を起こし、そして思いっきり凝視をする。

「こ、これは……あ、ありがとラグナ」

そして彼に感謝しながらクッキーを一枚パクッ。

「うっ、甘い、甘い」

「あっ、リュウナ一枚ちょーだい」

「やだよーだ。体重増やしたいの？」

「！……うふふ、じゃあ運動に小さなあなたを他界^{たかいたかい} 他界してあげよーか？」

「あ、あのさりげなく何故か殺意が見え隠れしているのですが？」

「ま、クツキー一枚以前の問題で体重がぶばっ！？」

思わず頷いてしまった彼に隣の彼女は裏拳をかまし、悲鳴を上げさせる。

それからラグナは何か言おうとするが、またしても失言だったらしく彼女の右ストレートが顔面に入る。

リュウナはその光景を見慣れているらしく傍観しながらもそもそと残りのクツキーも食べる。

「ちよっおまつ、」

ボキンッ（凄く嫌な音）

「ぎゃあああああ！！ 関節がやばいやばいやばいっ！ このままだと謎のオブジェになっちまう！！」

「んー、そうねー、それは困るわねー。はー、血って取れにくいんだっけ？ 確か」

「何故そこでそっちの心配すんの！？ あーなるほどこれ運動ですよね！？ だからそんな危ないもんはつてぎゃあああああ——！！」

目の前にいる彼は、いつもこんな風に失言や表面的にはさりげなく嫌われ役になるような偽悪的な言動が多い。しかしそれは仮の姿であることをふと思い出す。

唐突だが、リュウナはこの世界の人間ではない。

それは、彼女の言うとおり複雑な事情が確かにあり、同時にこの家に住んでいる彼らも複雑な事情でこの場にいるのだ。

それはつい三ヶ月前のこと。

そして目の前の彼は、普通の青年ではない。

彼はひとたび平和を失った戦場を経つと、すぐさまその姿を変える。

それは、彼女が彼と最初に出会った時のこと。そして遭遇した自分の知らなかった世界。

その知らなかった世界に潜む、想像を絶する脅威。

そして自分に秘められた、大きな謎。

こうして普通に暮らしているが、正直この生活が続くかどうかは分からない。

でも、あのとき確かに彼が自分を救い出してくれたのだ。

赤の他人なのに、命を懸けて戦ってくれ、そして新たな選択肢をくれた彼。

彼女の本当の物語は、そこから始まったのだ――

∞話 始まりの刻（後書き）

ご愛読ありがとうございます！

これから頑張っていくしますので評価・感想、あと誤字脱字が多いのでその指摘と、温かい目で見守っていただければ幸いです！ 基本更新はできるだけ早めに致しますのでどうぞよろしくお願いいたします！

序話

そこは暗黒だった。

手足を振つても何も触れることはできず、大気もなく、時間によつて温度が大きく左右される死地の果て。

そこは物質・エネルギーを含む時空連続体のまとまりであり、同時に無数のそれが生成・消滅を繰り返しているとも考えられ、そして超真空、良好的視界、放射線が支配する場所でもある。

そう、場所は宇宙、生物が何も鎧わずに生存できる空間ではない。それは、確かに、ぼんやりと光るほぼ球形の物体の外側にあった。

しかしその惑星の大気圏から宇宙を見渡しても、ぼんやりと輝かせている恒星は見えず、それどころか無数にあるはずの星々も、衛星も、本来あるべき形が、見当たらない。

あるとすれば、闇に少し染まった純白の壁である。

ただそこにあるだけではない。
ぐるりと惑星全体を包み込むように純白の壁が立ち並んでいるのである。

しかもその壁には等間隔で、気の遠くなるような数で、しかも同

じ高さのこれまた純白の円柱が列をなして惑星に向かって延びている。

その光景は圧倒的で、まるで重厚たる要塞のような気迫を漂わせている。

その場所で今、何かが斬り飛ばされるような音がし、そして柱の一本に向かって何かが回転しながらぶつかり、何か液体のようなものが円面にこびり付き、それから力なく重力に引っ張られて柱の根本に向かって落ちる。

それは、腕であつた。

それも根本から鋭い刃物にでも切り捨てられたらしい。

そして地面に落ち、軽い音を立てて静かになると切り口からは体液が漏れ出て、捧げるかのように地面に染み渡っていく。

そしてその落ちた腕の少し離れたところで、二人の人物がいた。

一人は跪き、一人はその者に剣らしき武器を差し向けて立っている状態です。

何故生命のいないこの空間で此処にいるかは分からないが、先程から争っていたのか、周辺の状況が他の場所とは違っていた。

惑星に向かって延びる巨大な円柱はいくつも中程から斜めに切られて崩壊し、地上代わりに使ったのであろう壁もいくつも大穴が空いてまるで隕石が落下した後のようになっており、大凡人間の成せる技じゃないことが起きていたことを物語っていた。

そしてようやく、一人が口を開いた。

「くそつ、腕が……」

両膝を付いている方は黒衣を纏い、真つ黒塗りの黒鉄のような肌をしていて、手には体色と同じ黒刃を生やした武具を握っており、顔も骸骨に光を反射するほどの艶やかな黒の皮膚を纏わせたかのようである。

そして眼は相手を鋭く睨み付けるような釣り上がった目で、さらに全身には紅い入れ墨のようなものが刻まれており、時折怪しくうつすらと発光してみせる。

右腕は既に無く、左腕で傷口を押さえている。先程目の前にいた相手に斬り飛ばされたのであろう。

「諦めよ”夜の鏡”。既にお前達>アミクス<の陣営は崩れ、この大戦の流れは変えられぬ。最早お前一人だ。大人しく我らに従え」

その相手というのが、目線を鋭く尖らせた純白の仮面を付けた姿で剣を膝間付いた相手の喉元に向けて立っており、仮面を付けた頭からは艶やかな黒い長髪を垂らし、時折白原を思わせるかのような光を零す大きなマントに包まれているような格好であった。

「はっ……！ もう既に勝ち誇ったみてえな顔しやがって”方舟”が……！ めでたいこつた！」

「既に武器を失い、その武器を握る手も失ったお前は為す術がない。我の勝利だ」

この”方舟”と呼ばれる方が『創世』という新たな世界を作り上げる布告を推し進める陣営名>トルケ・ナワケ<の首領であり、”夜の鏡”と呼ばれた方がその『創世』に反抗した者の集結した陣営名>アミクス<の首領なのだ。

そして彼（彼女？）の言うとおり戦争の流れは目に見えていた。永き戦いで徐々に、慢性的な人員不足に悩まされるようになった反逆の陣営は、深刻な状況であった。

特につい二ヶ月前、広範に及ぶ双方の激しい噛み付き合いで互いの戦力を大幅に削る戦いがあったが、>アミクス<の首位の二人が重傷で抜け、さらに一人、また一人と現状から危機感を感じた者、二つの勢力のどちらにも加わらず静観を決め込んでいた者の多くが姿を眩ませた。

誰も彼もが、自分可愛さに姿をあっという間に消していき、自分を味方する者も背中を預ける者もいなく、彼ただ一人が残った。

残ったからこそ、この”方舟”との直接対決が叶ったのだ。万の軍勢だろうと巨大な怪物を止めるのは一苦労する。それと同じだ。

だから敢えて彼は大いに暴れ、この”方舟”を戦場に引っ張り出し、一対一に持ち込んだ。

だが、相手の強さは最早理解を超えており、自分が持つ全てをぶつけてみても一回も触れることができないほどの圧倒的な力を持ち、逆に腕を切り落とされ、いつ殺されてもおかしくない状況に立たされていた。

「もう一度言うぞ、我に従え。それしかお前の生きる選択は残って

はおらぬ」

「……嫌だと言ったら、どうする?」

「その時は我がお前の命を鎖し、この戦いに終止符を打つだけだ」
「なるほど、じゃ——」

そして少し息を吸ってから、

「まっぴらごめんだ」

「そうか」

返答を聞き終えた瞬間、”方舟”は白刃を掲げるように持ち上げ、一筋の光を反射させると一気に振り下ろした。そして”夜の鏡”がいた場所を派手に壊し、地震のような衝撃波を生み出すと辺り一面を白煙で包み込んだ。

白煙が辺り一面を覆っている中、方舟は振り下ろした剣に違和感を感じ、首を少し傾けて見る。

やがて白煙が晴れ、自分が感じていた違和感は嘘ではないとそこで確信した。

夜の鏡が、残った左手で方舟の振り下ろしを受け止めており、ドス黒い体液を流しながらも先程の一撃を耐え抜いていたのだ。しかも多数の傷を負い、腕を斬り飛ばされ、そして何も纏っていない左手で受け止めつつ彼は——笑っていたのだ。

「？ 何故、笑っていられるのだ？」

「は、はは、さ、さあな、でも、もう……」

「そのような状態でまだ何かをしでかす気か？ お前の能力や技量では我に永劫敵わぬ」

此処までの経緯を喋る方舟の言っていることは正しい。

だがそれを理解できないほどまた夜の鏡も馬鹿ではない。

だから最初から『最初で最後の一撃必殺』チェックメイトは用意してきた。

そして夜の鏡は弱々しく刃が左腕に食い込もうとも関係なく剣の柄を握っている方舟の手に僅かながら触れた。

その瞬間、

「もう、これで終わらせられるからよ」

「！？」

方舟は急いでその場を仰け反った。

そして急いで自身の腹を見下ろすようにすると何かが浮かび上がってきた。

それは、複雑な文字や演算式を編み込んだ円陣であった。

彼は最初からこれを体内で練り込み、相手に打ち込む機会をずっと窺っていたのだ。

身体が傷つき、腕を犠牲にしたことはおろか、その全てが時間稼ぎで、この一回切りの触れるという行為のため伏線にすぎなかった

のだ。

一方方舟は彼が何に対して笑っていたのかを理解すると言葉に明らかな焦燥が浮かぶ。

「ま、まさか、何故これを——」

「ははっ、ようやく顔色変えやがったな？　そうだよその通りだよ！」

すると円陣の文字や古代数字の配列が変わり始め、全身に限無くそれらが這い始める。

「こ、これを持っていたとは——些か、予想外であっ——」

「てめえ専用の破壊陣だ……みんなはただ逃げたワケじゃねえ。これを俺に託してくれたんだ。……喰らいな、これが俺達のとっておきだ」

身体を這っていた紋様が、やがて身体だけでは収まらず、周りの空間およそ半径五十メートルほどにゆっくりと展開していき、その中心に方舟が収まる形になる。

さながら、それは宇宙空間に咲く花のようであった。

そして、陣が完全に展開し終わると、円陣内の複数の陣が共鳴するかのように怪しく光り始め、陣の発動者に終了したことを伝える。

夜の鏡は動けなくなった方舟の真ん前まで歩き、そしてソッと、別れを告げるかのように仮面に触れると、

「——じゃあな、あばよ」

「ああ、ああああ、ああああああああ——ああ——」

「——あ——」

力を受けた陣は、その内にある複雑な構成式を稼働させ、新たな色が円と文字全てを塗り替えると途端、極度に内側に対する爆発的なエネルギーが注ぎ込まれる。

そして一瞬だけ静寂、否——無音の暴風。
周りにあった純白の壁は大崩落を起こし、柱も気がついたかのように一瞬で細くなる。

そして、その中心にいる人物は、複雑な声色という矛盾した声が断末魔の悲鳴を上げる。

そして、もう一人は全ての力が枯渇するくらいの勢いで、全てを注ぎ込む。

それから互いの声が段々小さくなっていく中、同時に白い布に包まれた身体は細かく細かく、そして見えない力によって運ばれ、もう視覚で認識できないほど細かくなると、文字通り——消滅した。

それから数分後。陣が発動したその場所は、何もない真っ平らな白い平原と化していた。

壁を構成していた物質の白煙がその場の支配を止め、段々と晴れ始め、そして完全に視界から消えて無くなると、中から片腕の黒い人型が姿を現した。

黒い顔に付いている白い釣り上がった眼は、ジッとその場を睨み続けていたが、ようやく自分が勝ったのを確信したのか、眼を細め、険しいままだった表情を少し崩す。

「や……ったか？　とうとう……」

目の前の真の闇に呼びかけるように言うが、当然返事は皆無。
そしてようやく、確信した。

この永きに渡る戦いに終止符を打てたことを、自分達の布告を貫き通せることを、今ここで果たされる。

奴が倒されたことを知れば、敵対していた連中もすぐ降伏してくれるだろう。

そうすれば、この戦いは終幕へと向かうはずだ。

戦いは、終わったのだ。

「俺達が、勝ったんだ……」

宇宙を見上げ、そう呟くように言う。

自分達の欲望嗜好利害打算、犠牲、全ての果てで、決した。

これからは、孤独だ。

だがどこかへ姿を眩ませた仲間達は、いずれ帰ってくるだろう。

たとえ何百、何千、何万、何億経とうと、待とう。

そして会えたとき、精一杯抱きしめられないが、それでも抱こう。
俺たちで、世界をありのままに、していこう。

もう、邪魔する元兇は、いないのだから、道標は、消えたのだから。

(さて、帰るか……)

そう思い、改めて顔を母なる星に向ける。

たとえ自分たちが何をしようと、何の文句も答えを返してくれない丸い物体だが、このときだけは確かに温かい感じがした。

まるで自分を待っていてくれるかのような、そんな感覚。

足は、動く。

一步、また一步、少し離れてしまったこの場所から帰りの路に足を踏み入れる。

だが――

ドスッ

「いつ！？ なっ――」

突然背中を穿つ嫌な音と衝撃、鋭い痛みが全身を奔る。
完全に油断していた夜の鏡は驚愕の表情で痛みで身体を仰け反らせる。

「やれやれ、やはりまだまだ甘すぎる。”夜の鏡”よ」

背後から高いとも低いとも、澄んでるようで寂れているような矛盾を重ねた声が響く。

その声を聞いた途端、背筋が凍ったかのような錯覚を覚え、振り向かせようとした頭が止まる。

「まさかこの方舟、いや、この”二面の環”を殺したと思ったのか？」

静かで感情の一切含まれていない声。

だがその言葉の奥底には、見えない怒りがちらちらと垣間見えているようだった。

しかし”夜の鏡”はとにかく驚いた。あれで生きているはずが、一撃必殺の、どんな物質でも、どんな存在でも、あれを受けてただで済むはずが、否生存しているはずがないのだ。

それに先程とは違う気配、これは、先程の方舟とは似て非なる存在。

「がつ——！　だ、誰だ、てめ、一体——！」
「それ以上言葉を紡ぐな」

その疑問に答えることなく、神は背中に突き刺した自身の腕を思いつき引き抜く。

すると先程の黒い体液とは真逆の、純白のオーラの火花が血のよう
に吹き出し、

「おおおおおおおおお——！！！」

まるで猛獣の断末魔を思わせるかのような絶叫。

夜の鏡は背中の中の傷口ではなく”胸”を左手で押さえてよろめく。
あれは、確かに、あの手応えで、奴は不死では無いはずなのに、
どうして生きている。

頭の中で様々な疑問が飛び交うが、それよりも、それよりも！

（こ、この、この野郎——　お、俺の、俺の——！）

「理解できないか？　単純だ。お前の考え、思考、常識と非常識は
私の前では無意味なのだ。言い返してやろう。その予想外がお前に
引導を渡す。お前はただ、私を”知らなすぎた”だけだ」

背後からまたあの声。

その声の方向に肩越しから顔だけを振り向かせてみせる。
そこには確かに、目線を鋭く尖らせた純白の仮面を付けた姿で立

ち、仮面を付けた頭からは艶やかな黒い長髪を垂らし、大きなマントに包まれているような格好の存在がそこにいた。

紛れもなく”方舟”と呼ばれる者の姿なのに、どこか、違って見えた。

明らかに感じた覚えのない気配を纏う”二面の環”は、右手に何かを掴んだ状態で立っており、その手から血が溢れるかのように純白の光が断片的に漏れている。

そしてごく自然な動きで、胸を押さえて前に倒れそうになっている”夜の鏡”の背中に、左手の人差し指を軽く押し当てる。

「……」

「お前は失敗だ。だから”創り直す”。さらばだ、永遠の刻を、他心痛あれ——」

そして身体の中で爆発的に何かが膨らむのを感じ、身体の奥底から強烈な閃光を——

先程”夜の鏡”が撃った光弾など無意味に感じさせるほどの放射状の光が指先から放たれ、周りに甚大な衝撃はを被らせ、そして全く対象の黒き肉体を一瞬でバラバラに四散させる。

叫びも、断末魔も、遺留の念も、感情も、何一つ許さないほどの速さで、あっさりと元の原型を無くしていった。

そして閃光は原型を無くした肉体を運んでいく。

その方向の延長線には、あの穏やかなる母なる星。

その母なる星にも光が届くが、被害がどうあろうとそんなことは気にしない。

「——さて、我々の望みはこれからだ」

光でバラバラになった肉体が、やがて大気圏に叩き落とされる。

「これから我々、いや、私を止めるものはいない」

そしてやがて、空気と摩擦して流星となり、地表へと落下していく。

「全てが今この瞬間、始まるのだ」

そしてさっきまで自分と対峙していた相手は存在感も、気配も、大気との摩擦で徐々に減っていき、そして最後まで鳴り響いていた命の鼓動も無くして——消えた。

「さあ、新しき夜の鏡よ、お前が今度は私の傍らに立つのだ」

そう言い、母なる惑星を見つめ続けていた。

全てがここから、始まるうとしていた。

希望も、絶望も、全て此処から——

それから最早、数え切れないほどの悠久の刻を経て——……………

ある日のことだ。

季節は初夏で晴天、桜吹雪を終え、緑の葉が舞う今日この頃。

そんな中を制服を纏い、黒髪で小柄な少女は今、本屋に立ち寄り、そして本棚の前を行ったり来たりしながら、そしてふとある本棚の前で立ち止まった。

「う~~~~む」

この日、竜那^{たつな}はごくごく当然のように自分の日常を過ごしていた。学校の新しい環境など一年前に終了し、しかしまだ受験が鬱陶しくなる時期でもないこの初夏日和。

一年も経ち、何の問題もなく過ごしてきたので友人も多くも少なくもなかった。

家庭はまあまあで、一戸建てで一人っ子。両親はご健在で仲がいい。

場所は学校から徒歩十二分、走れば少々寝ぼけても間に合うくらいの距離だ。

因みに学校での成績はあまり良い方ではないが悪い方でもなく何かと真ん中を貫いている。

でもこの前の一年の期末試験は結構危なかったりした。

彼は、いない。

どうやら見た目と毎年統計されている年齢別の身長平均値で10歳と11歳の間にいる所為か、男子とよく喋ることはあっても浮いた話は聞いたことはない。

ま、確かにあたしはマニア向けだよなぁ。

などと最もらしい理由で自己決定していたりするが、そもそも自分が彼氏が欲しいのかと聞かれると曖昧な返事しか返せないのも最もだったが。

そんなこんなで今、部活帰りで立ち寄った本屋で今、直面しているあまりにも大きな絶壁に、目の前の問題に再び思考を切り替える。

今見下ろしているのは今日同時発売されたライトノベルの新刊と漫画本。

一つは最近耳にして買い始めたシリーズ最新作もので、深夜アニメ化ももうじきである。

もう一つはここ二年、音沙汰無しかったシリーズノベルもので展開が気になる。

彼女はこのどちらかをとらなければならなかった。

自分の軍資金は、三千円ほど。

客観的に見れば、十分事足りるのだが実はこの二つを見つかるまで欲しいものをあれこれ見つけてしまい、『ポイント欲しさに予定

外の出費をさせる。それが奴らの手口。ふふつ、そんな孔明の罠に嵌るほど、私は愚かではな〜い』などと頭では分かっているもの。の
ついつい手を出し、見事、策に嵌って両手に華状態でこの二冊を見
つけたのだ。

（ぬ、むむつ、これは……究極の選択だ）

どっちも欲しい、だが金はない。

このどちらかを、選ぶしかないのだ。

それは、どこさんの敵に『家族か、友か、どちらかを選ぶ』と
命の天秤を測られているかのような切羽詰まった心境であった。

因みに彼女には両手に持っているものの内、一冊を棚に返すとい
う発想は生まれていない。

それほどまでに今の状況は困窮し思考を鈍らせているのだ（単に
思いついていないとも言つ）。

そして彼女は選択の末、二年間会えなかった戦友の方を選び取っ
た。

彼女の心は、ともに勝ち抜いた時間（？）を過ごしてきた戦友と
の再会に心を躍らせ、そしてこの地にたどり着くまでに行方不明（
手に取らず、棚に鎮座している漫画本）となった戦友に『友よ、い
つかそなたを拾い上げる軍資金おこづかいが揃ったとき、また垣間見えようぞ』
と心の中で敬礼をしながらその場を去り、お会計という名の到着離
脱地点へ向かう。

ピッ、ピッ、ピッ

「お会計は二千八百七十円です。ポイントカードはお持ちですか？」
「あ、はい。どうぞ」

慣れ親しんだバーコードを読み取る電子音の中、財布からプラスチック製のカードを取り出す。

おつと慌ててはいけない、獲物の前で舌舐めずりなど三流のすることだ。

だがこれを終えたとき、次で欲しい懸賞が届くほどまで貯まるのだ。

それについて顔を綻ばせそうになるが、捕らぬ狸の何とやらで、どうにか生唾を飲み込む程度に抑える。

そんなこんなで中身が見えないビニール袋にカバーを付けていない本を入れられ、手渡され、カードも返され、財布にしまわずそのまま出入り口の方に向かっていき、自動ドアをくぐる。

任務は、完了した。次に会うときは戦友よ、共に笑うときだ、うわっはっは！

など思いながら自分の中ではカッコいい姿（どうでもよすぎる姿）で店を立ち去っていった。

立ち去ってから、自動ドアの前で再度買った戦利品を確認し、それからポイントカードの方を目にしてからほくほくとした気持ちで、

「ポイントうーまうまっ」

そう嬉しそうに呟き、財布にしまうと何だか片手にぶら下げているビニール袋の重さが無くなったかのように軽い。

当たり前だ。自分の楽しみがもう少しで目標に到達するのだから。そして少々下手くそな鼻歌を歌いながら、その場をスキップするかのようにその場を立ち去る。

また何時か此処に舞い戻り、新刊と懸賞を両手に抱えて胸を張って此処から出る。

そんな未来に心躍らせながら、自宅へと足を進めていった。

そして、その日、その時、その瞬間まで、彼女の日常は永遠に続くと思っていた。

無根拠で、無自覚で、でもそのことが普通だという当然の中に身を置いていた。

その瞬間まで、続くと思っていた。

しかしその弱気なる根拠は、引き剥がされ、その目は新たな現実を映す。

自分の日常が、呆気なく崩れ落ちていったのだ。

彼女の許へやってきた、本当の死と、あの”青年”に会ったときに――

01話：舞い降りた影

「うゝむ、もうヤヴァイ気しかない……でも、逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ！」

□のボタンとスティックに親指を置き、ヘッドホンを装着した竜那は画面を凝視しながら呟いた。

今やっているゲームはネット上の評価では神ゲーと呼ばれる分類にあたるモノで試しに買ってプレイしてみたが様々なゲームに精通している彼女でも手こずるような難易度のものであった。

そして今はボス戦。

これが中々防御が固く、しかもガンガン攻撃してくるため中々HPを減らすことができない。

「むっ、こによっ、何のっ、悪いけどこれ戦争なのよね！」

と呟きつつもコントローラーを駆使し、長年の経験と勘が冴え、ようやく撃破することができた。

敵が爆四散し、主人公が勝利の決めポーズを決める。

「ふつ、日本の大地はお前の血でとつくに真っ赤に染まってるぜ」

いい汗掻いたーと言いたげなすっきりした表情でようやく次のステージに進めた彼女は、画面セレクトにボタンを押して進め、ふとセーブをしている間に壁に掛けられている時計を見る。

既に一時二十九分。よい子は寝ている時間である。

「あ……」

あまりの熱中ぶりで思わず時間を忘れて遊びまくった彼女はポカソとした表情でそのまま固まり、そしてセーブが完了しましたの終了音が聞こえた途端ゲームの電源を落とし、コントローラーを置き、リモコンを慣れた手付きで取るとチャンネルボタンをワンプッシュ。すると深夜アニメのオープニング丁度始まり、アニメソングがヘッドホンに流れる。

「ふゝ間に合ったゝ、やっぱりアニメは中継よね」

ご生憎彼女はよい子ではなかった。

そうして彼女は家族が寝静まった二階の自室で、のびのびと深夜の時間を過ごしていた。

今から三日前、どことも知れない暗闇の中、それは待機していた。見下ろせば運河の如く町灯りが眼下に広がっており、耳を澄ませば、車のエンジン音、人々の蠢く音、音と音が犇めき合って生まれる騒音、そして無音の静寂が届いてくる。

それらを一通り見て、聞いた後に、それは軽く溜め息をついてから呟いた。

「……いねえ」

今は午後十一時半のため、姿は確認できないが、声色からして若い男の声。

「そのような、だが必ず奴はこの周辺にいる。気を抜くな」

そして姿の見えない誰かが言う。

こちらは静かな湖に起こった波紋のような、凜々しい女性の声。

「気を抜くなつてお前……今回は俺、本当は非番なのに」

「文句を垂れるな。これは報告と上層部の判断の下での任務だ。ワタシ達の索敵能力ならば、早急に完遂できると考えた正しい判断だ」

「へいへい、たくつ、いろいろやることあったのにお偉いさん方は容赦無いですか」

そう言つて頭をボリボリと掻き、そして徐に胸ポケットから細い棒状の何かを取り出し、口に運ぶとボリボリと噛み、それから残つ

た部分を口に咥え、レロレロと動かして遊ぶ。

「容赦があつては何事も上手く進むはずがない。特に、お前に対してはな」

「うおーい、俺追い詰められると真価を発揮するタイプだっけか？
その前に寝不足で死にそうだコノヤロー」

「まあ、ともかく相手を待つとしよう。他の連絡もあるかもしれない。それに今は上が対策と作戦を練っているところだ。とりあえず今は待つしか方法はない」

「……了解、ティト」

「その名は止めると言っているだろう」

ティトと呼ばれた女性の声を聞き終えてから、もう一度眼下の町並みを覗く。

何も変わらない日常の光景、流れ、繰り返し。此処に住んでいる人たちにとってはそう見えるだろうが、彼から見たらそれは既に異変なのだ。

こうして、姿無き声の持ち主と共に姿無き相手の出現を待つて、
今を過ぎし始めた。

暁の空が終焉を迎え、地平線から日の光が町中へと送り届けられ

る。

そして窓から差し込む光が、瞼の上をくすぐる。

「う……うん……？」

もう朝なの？　と言いたげな、不満を交えた呻き声を上げ、ベットの上で寝返りを打ち、被っている布団を身体の動きだけでモゾモゾと器用に頭を包んでしまう。

毎度この朝というのは、学生にとって最も大きな敵ではないだろうか。

昨夜どんだけ遊ぼうと、昨夜深夜のテンションでどれだけハイになろうと、必ず来る。

しかも防御不可能だし。

そう寝ぼけ頭で考えながら、二度寝を決め込もうともう一度意識を沈めていき――

「竜那ー！　起きなさい！　朝食冷めちゃうわよー！　それとアス力ちゃん来ちゃうわよー？」

「……………」

ムックリ

（うゝむ…… 此处にも防御不可能が存在してた）

一階からこちらに向けて放たれた声に竜那は渋々と身体を起こし、ふわぁと小さな欠伸をしてみせる。

それから首を軽く振ってみせると、少し乱れていた黒髪は見事に癖のない艶やかな髪に戻り、それを背中に垂らすとベットから下り、

両腕を天井に向かって突き出し、背伸びをして意識を取り戻す。

「うう、だるい」

そう言いながらもこの二階の自室を見渡し、トボトボとドアに向かって歩き、今日初めての食事を摂るために向かい始めた。

階段を下り終えた時には既に意識は完全に覚醒し、食卓へ向かうと既に顔は揃っていた。

朝、食卓の四角テーブルで新聞を広げて読んでいる父親とその背後でせつせと片付けをしている母親、の二人だけなのだ。

そう、竜那はこの家では一人っ子なのである。

それはさておき、竜那は父親と向かい合う席に座り、既に用意されている朝食を確認する。

油を敷かれたフライパンでカリカリに焼かれたベーコンとフォークで刺せば黄身がとろりの半熟目玉焼き。

そしてマーガリンを塗られてから焼かれたため、表面を光らせているトースト。

酸っぱめのドレッシングを上から掛けたしゃきしゃきレタスと六分の一ずつに切られたトマトのサラダ。

そして骨、お腹の調子、イライラ予防に効果的なカルシウム満載のグラス一杯の牛乳。

「……出た」

まるで決闘の相手を眼で確認した戦士のような、頬を膨らませて牛乳を睨み付ける。

別に彼女は牛乳が苦手でも何でもない、むしろ毎日必ず飲んでいくくらいだ。

だから彼女はこの牛から分泌されたタンパク質、カルシウム、脂肪、必須アミノ酸などの栄養成分が豊富に含まれるこの液体に対し、別の恨みがあつた。

「いつまで私をロリにしておく気なんだろう……この液体は……むう」

そう、彼女は身長143cm、という背が低いのが何よりのコンプレックスであつた。

父と母の遺伝、というわけではなく生まれつきこうなのだ。

だから背を伸ばすために牛乳を毎日飲んできたわけだが、とうとう昨年から一センチも伸びなくなってしまったのだ。

「まあ、そんなにたくさん飲んでも成長はしないよ竜那」

そんな彼女にようやく読み終えた父親は新聞紙を畳んで自分の朝食の横に置く。

黒縁眼鏡を掛け、スーツ姿でネクタイもきちんと締め、いつでも出勤可能な姿の見た目が若い三十代後半の男性、というのがふさわしい容貌である。

「でもまあ、いきなり伸びるということもあるから諦めずにな」

「もうお父さんだったら、そんな甘い言い分ではためになりませんよ」

そう言いつつ後ろにいた母親は父親にコーヒークップを脇から差し出し、『どうも』と返事を貰ってから、隣の席に移動し、同じく食卓に着く。

容貌は長い髪を一つに纏めて背中から垂らし、エプロン姿が似合う朗らかな女性、と呼ぶのがふさわしい母親である。

そんな母親は少し不機嫌そうな顔で竜那に向かって指摘をする。

「まったく、また夜更かししたのね竜那。だから成長ホルモン出なくて背が伸びないのよ」

「うっ……まったく反論できません」

「ほら、遅れるから早く食べなさい、あなたも」

「ほい分かった」

こうして一家族の朝は、どこでもあるような食卓風景から始まるのだった。

二日前、どことも知れない暗闇の中、男は状況整理をしていた。場所は昨夜と違い、住宅街が立ち並ぶ地域にあり、民家の屋根の上に立っていた。

「……厄介だな。作戦は進んで目標の数は減ってるが、肝心の相手

の出現時間が短い上に、捕捉も途切れがちになるな」

「そうだな。だが早急に手を打たなければ、相手がこちらに気がついて対策を練られ、より犠牲者は増えるだろうな」

若い男と姿無き女性は会話をし、それから男の方は額に軽く掌を当てる。

「ああ、もうっ、こんな事ならアイ6を呼びてえな、テイル5でもウィング7でもいいんだけどな。そして全員でやれば早く終わると思うのに」

「それは人選に問題がある。しかもわざわざコールサインで呼ばなくても良からう」

「いいんだよ、本名は普通任務中では隠して行動するもんだ。だから此処ではこの呼び方でいい」

「そういうものか？ もう一度言うが、これ以上人数を増やすと任務に支障をきたす可能性があり、三人とも今回の任務には不向きで不要であるし、第一、この前戦闘に参加したばかりだ。休ませてやれ」

「ちえ、ま、いいんだけどな」

そう文句を垂れつつも、民家の屋根から静かに飛び降り、裏の空き地に着地し、それからスツと息を吸う。

「……さて、今回の連中の狙い、何か考えついたか？」

「いや、今回は自身の欲望に忠実なケースかもしれない。だが、どちらにせよ、奴を引きずり出し、捕捉するのが先だ」

「……こういうタイプの任務って苦手なんだよな。たくっ……じゃ、やるぞ？」

「ああ」

互いの了承を得てから、男は地面にぶつけるかのように片掌を押し当てる。

するとその腕が一瞬、蒼く発光すると瞬間、押し当てられた掌から血管が伸びるかのように放射状に蒼光がバツと広がっていき、それが地面を覆い尽くすとそれを合図にスッと両目を閉じ、瞑想をする。

頭の中のイメージは、波も立たない静寂の湖。

静かに、保て。

静かに、集中しろ。

静かに、静寂となれ。

静かに、その時を待て。

静かに、音を聞き分ける。

そして十分後——湖に、一つの大きな波紋が生まれ、それが広がって、消えた。

「……ぶつはあつ！ 目標捕捉！ 遠いなっ」

「すぐに仲間と連絡し、最も近い位置で待機している者に動くよう命じる」

「了解。ああ、疲れるっ」

そう言い、徐にヘッドセットを着け、通信機のキーを叩くと——

『はい』

別の男の声がスピーカーから聞こえ、それに間入れず言う。

「クロー2か？　こちらケイル4。目標を捕捉した。今から言う場所に急行して欲しい」

『了解、どうぞ』

「場所はポイント三の……—」

何も知らない夜の町で、誰も知らない出来事が、そこで行われていた。

「♪熊の子見ていた隠れんぼ、お尻を出した子一等賞♪……」

……変態コンテスト！」

「うおーい、いきなり何だよそれっ」

「んう、眠いから何か強烈なインパクトを会話にね」

晴れ渡った青空の下、竜那はぼそりと呟いたのに対して隣を歩いている女子がツッコむ。

なにしろ昨日、深夜アニメが二つ続けて放送されたものだから中継で見られるときは見ておく派の彼女はついつい見入ってしまい、気がつけば夜更かしという風になっていたのだ。

「たくっ！そんなんじゃ一週間後の試合に支障が出るわよ？」

「フッ、深夜アニメはクオリティがゴールデンタイムに比べて高い

のだよ。だからアニメは深夜に限る。これズバリだね」

「とか言いつつもゴールデンの方もすっかり録画してるじゃない。

普通逆でしょ。まったく、その根性を試合に回せばあんた間違いない最強になれるのに」

「お褒めの言葉どうもー」

「褒めてない。だからあんたはいつまで経っても『ミニマムドラゴン』なのよ」

「むう」

そんな彼女の隣を歩いているのは中学からなじみの竜那母から『アスカちゃん』と呼ばれている髪を肩でそろえた気の強そうな外見の少女で、本名を工藤明日香と言う。竜那のクラスメートであり、当然と言えば当然だが彼女の方が竜那よりは背が高い。

因みに竜那は彼女のあだ名が某人型決戦兵器の出てくるアニメの登場人物と同じなので結構気に入っている。

そして『ミニマムドラゴン』というあだ名は高校生にしてあるまじき幼女体型と名前に竜が入っているからという実に単純な理由で付けられており、クラスメートから時々親しみを持ってそう呼ばれている。（彼女にとってはあまり気の良いものではない）

なお、普段は単純に『たちちゃん』と呼ばれていることの方が多い。

そして試合というのは二人が所属する高校の剣道部のことで、二人は今朝練のために学校に向かっているのだ。

「いやいや、でもゴールデンの方にもいいのがあるわけよ。それを逃してたら人生損だよ？」

そんな力説をする彼女は剣道を中学から続けており、剣道二段取

得している。

実力は上の下くらいで何度も個人戦で賞を取ったことがある。

因みにアニメ好きな彼女が何故剣道部に入ったかというところ、その理由は好きな漫画、例えばブーチの月牙天衝や、る。うに剣心の紅蓮腕に憧れたからであつたりする。(そのことについて部員から爆笑や呆れの表情が出るが、実力は本物なので結果的に良しとしている)

そして今夏、合格率約四十%の、称号と言う名の剣道三段を取得する予定である。(因みにもし、高校のうちに取得することができたらすごいことらしい)

「はあ、アニメアニメって、あんたはそれ相応の女の子らしさがないの？ そんなんじゃあんたの白馬の王子様は迎えに来ないわよ？」

「現代にそんな格好した人が迎えに来たらドン引きだよ」
「うう」

そんな的確な反論に思わず口を濁す明日香。
続けて竜那は言う。

「だってそうでしょ、アスカだって部長さんにそんな格好で迫られたらどうよ？」

「え？ あ、うん……って、此处で先輩を出すな」

「うつつふつつ、何照れちゃってるの未来の副部長さん」

ずずいつ、と身を寄せて悪戯笑みを浮かべる竜那は肩で意地悪に小突く。

一方工藤明日香の方は照れたように頬を朱に染めて誤魔化すようにブイブイと手を振る。

「はいはいこの話は無し無しっ！」

「そうだね。白馬の王子はおいといて……」

そう言つて徐に鞆から小さな箱のようなものを取り出して、それを明日香の方に差し出す。

「お菓子いる？」

「え？ お菓子？ いいの貰つて？」

「おばあちゃんが送ってきてくれた奴で、どうしても余っちゃうからみんなに配ろうと思つて」

「おお、サンキュ」

そう礼を言いつつ嬉しそうに受け取ると何なのかを確認し、飴やチョコだと分かるとさらに表情が融ける。

「ほんとアスカつてお菓子好きだよね」

「だって美味しいし幸せな気分になるじゃない？ ほんとお菓子を作つた人は偉大だわ」

「そうだね。でなければお菓子の家の魔女さん、ただのホームレスになるもんね」

「気になるとこそそこかよっ！」

そんな会話をしつつ、二人は学校へと足を進めていった。

昨夜、どことも知れない暗闇の中、男は調査していた。

場所は道路の十字路の真ん中であり、既に深夜なので車も人も灯りも、そこには存在していなかった。

いや、その道路にはある意味存在しているモノがあった。

男は片膝をつき、それを軽く指で触って感触を確かめる。

「……まだ全然乾いてねえな。……これで何人目だよ」

「把握している正確な数は我々が来てから四だ。それ以前は痕跡から加えて六。だが、今回は思ったよりは進行は序の口のあたりのようだな」

「ああ、昼頃に見た”アレ”にはめっちゃくちや驚いたけどな。それにしてもどんな手品使って融け込んでんだ？ 思わず真つ昼間に騒ぎ起こすところだった」

そう言いつつ指に着いたべつとりとする液体を指同士で擦って落とし、スクツとその場で立ち上がる。

「とりあえず、連中の行動範囲と活動時間帯は分かってきた。それにこの行動範囲内を搜索すれば、必ずあるだろうな。お前は思うう？」

「肯定。だが、それには”元凶”を塞ぐ前に”原因”を何とかしなければいけない」

「ああ、これ以上犠牲者が出るのは止めたい。しかしコソコソとしゃがんで。明日こそ、何とか仕留められればな」

そう呟いて、ふと空を見上げてみる。

そこには澄んだ空気のおかげか、幾億もの星々が輝いており、幻想的な光景を生み出していた。

見上げていると自分が吸い込まれてしまいそうな、そんな空を数

秒眺めた後、顔を下げ、

「明日こそ、そんな希望的観測ではなく確実に仕留めるんだ」

「ああ、言われなくてもそのつもりだ」

短い対話をした後、男はグツと両足に力を入れると爆発的な跳躍を見せ、民家の屋根を兎のように跳ねて闇の奥へと消えていった。まいった。

朝九時から行われ、合計三十分の休憩を挟みながらも戦いの20分（一時間目から四時間目とも言う）を経た昼休み、竜那はいつも通り、鞆から弁当箱を取り出し、それを机の上に置く。すると周りから机を寄せたり椅子を運んできたりする女子が集まってきて、見事に一つの大きな集団を作り上げる。

竜那の席は教室のほぼ真ん中なのでこうした方が効率がよいのだ。

「やっと四時間目終わったね」

「まだまだ、これが終わったら五時間目と六時間目があるのよ」

「でも寝てればそんなのあつという間だよ」

友人の一人が寄せた机に座り、弁当箱の風呂敷を広げてそこに載せ、

工藤明日香が取り出した弁当と買っておいたパンを机の上に置き、同じく弁当箱を開き、

竜那がボソツと呟いて、誰よりも早く出汁巻き卵をパクリと一口で食べる。

「またそんな、期末でどれだけ危なかったか自覚してるの？ あんた危うく補習で部活潰れるところだったじゃないの」

「ああ、あったねそんなことたっちゃんにー」

「たっちゃんって妙に運がいいよねー」

「うん、私は回避できたのだよ。まさに神回避。いや、ネ申回避と言うべきか……」

「何変なこと言ってるのよ。そんな下らないことに神様を頼るなつ。今度のテストほんと頼むよ？」

「ふっふっふ、私の『レッドエスケープ』にかかれば、大丈夫だよー」

胸を反らして偉ぶる彼女は、昔から普段の学習に比べて補習を受けたことがないのでこのことを『レッドエスケープ赤点逃れ』と呼んでいる。

妙に運と要領だけは良い、とは工藤明日香の評である。

「そういうところは神様に救われているのに、体型は中学から変わらないのよねー」

「むう、人の気にしているとこ責めるの反対」

プクツと頬を膨らませて怒る竜那に別の友人が頭をイイ子イイ子しながら苦笑する。

「さて、とりあえず今度の日曜、遊びに出かけるって昨日決めただとどこで待ち合わせする？」

「それは映画館でいいんじゃない？ ほらマスコットがいつもいる

ところの」

「でも人が多かつたら中々見つからないよぉ」

「そのときはアスカが私を肩車してピョンピョン跳ねればいいんだよ」

「そんな恥ずかしいことができるかいっ！」

ツッコむ工藤明日香に竜那は羨らしい態度で、隣で座っている女子に耳打ちをする。

「あら怖い奥様どうしましょー」

「まー怖い怖いこと。雷が降ってきますわ」

隣の女子はノリよく竜那と同じ羨らしい態度でうるうるとした瞳で、竜那と二人して明日香を見ると、

「暇を持てあました奥様ごっこを展開するんじゃないっ！」

「あ、雷キター」

再びツッコみが入って一同がドツと笑う。

いつもの光景、いつもの日常、いつもの、他愛もない談笑。

竜那は、なはーとした笑みを向けると明日香も怒り笑いで返す。

こんな日常が、いつまでも続けばいいな。

ふと、竜那はそう思ってみたが、言ったら笑われそうなので、敢えて発言はしなかった。

さて、あと五時間目と六時間目だけだ。

そのあとの部活もホイサッサとやって家に戻り、録画したアニメを見るぞ！

そんな計画を立てながら、昼休みの間に、持ってきたお菓子をみんなに配って感謝され、

昼休みの過ぎた五時間目でウトウトしてしまって先生にコツンと教科書で頭を小突かれたり、

部活の剣道で背が低いため、面打ちをモロに食らって『ぐへえつ』と変な声を出してしまつて笑われたり、

帰り道に工藤明日香と一緒に帰って家の前で別れ、

荷物を置いて着替え、リビングで録画したアニメを見て、

そのあと夕食（鶏の唐揚げとわかめサラダと味噌汁）を摂り、お風呂に入り、

好きな番組をやっていたので冷凍庫に入っていたアイスを舐めながらそれを全部見て、

——午後十時、漫画に読みふけていた時、彼女はふと何かを思い出したように本を閉じた。

「あ、今週のあの月刊買ってないや」

昨日使った軍資金の余りで買おうと思っていた月刊誌を買い忘れていたことに気がついた竜那はスクツと立ち上がると財布をポッケに忍ばせた。

それから一階に下りて母親に近くのコンビニに行きたいと告げると、

母親は物騒だからやめといたらと忠告してきたが、そこを何とかということで承認してもらい、

サンダルを履いていざ三百メートル先のコンビニへ！と家を発った。

竜那は、命を鎖されようとしていた。

それは、自宅から僅か150メートルの距離。

槻汐^{つきしお}竜那^{たつな}は、異変に遭遇していた。

それはコンビニで目当てのものを買い、意気揚々と暗い帰り道を曲がった時だった。

丁路地の、丁度カーブミラーがある地点で、それは確かに起きていた。

黒い何かが電柱の灯りの下、ごそごそと団子になって群れていた。

それは、およそ十体くらいで、我が先と言わんばかりに必死で何かを漁って顎を動かしている。

それを最初に見たとき、竜那は、

「え……？」

としか言えなかった。

そうとしか、口から声を捻り出すことができなかった。

不意に背筋が凍り付いたかのような寒気に襲われ、驚き戸惑う中、竜那はただその場で立ち尽くすしかなかった。

「……何、これ……」

今現在、遠巻きに見ている光景の中、竜那はその黒団子から目を離せなかった。

黒団子、一体一体は黒い毛むくじやらの狼に似ているような容貌をしているが、そんな生き物がこの世に存在しないことくらい、彼女でもすぐに分かるくらい、異様な容貌だった。

そして、何故団子になっているかという理由は——黒い群れの中、動くことのない手、足がはみ出ているから、つまり、忙しなく口を動かして食べている黒い巨体の下に——ピクリとも動かない人体がある。

「——人を、食べてる……！」

持っていたビニール袋を落とし、反射的に口を押さえる。胃の腑から吐き気がジャンプするように込み上げたのが分かった。よくよく見れば、この獣たちのいる付近は生々しい赤が滴っている。

それに気がついて、一層血の気が引くのを感じると一般人がとるような現実逃避だと思いこんで頭を振り、落としたビニールに目もくれず別の道から帰ろうと決め、いざ後ろを振り返って走っていいうとした時だった。

「どこ行くの？ お嬢さん」

「!?!」

振り返った矢先、目の前に顔立ちの良い美男子が微笑んで立っていた。

竜那は気配もなく現れた目の前の男に驚いて二歩後ずさりして、その姿を視界に入れる。

黒スーツにネクタイ、髪は少し長めで肩で切りそろえられた、優雅な男性、というのがふさわしく、先程見ていた光景とはまったく反対の雰囲気がある。そこにあった。

そして男は、女性のような唇から声を紡いで竜那に向かって言った。

「あれを見ていたのかい、いや、あれが”見えている”のかい？
可愛いもんだろ？」

「……え？ あ、あなた誰？」

立て続けに起こる出来事でほぼ放心状態の竜那が精一杯出した質問に対し、男は聞いてなかったように竜那の肩にソツと触れながらすぐ横を通り過ぎ、振り向く。

「それにしてもまさか同じ場所で立て続けに来るなんて、運がいいな」

「え？ 運？ な、何がどう……」

「こつちへおいで」

何の説明も無しに、そう自然な手付きで男は竜那をエスコートするかのよう、先程の黒い集団の方に向かって歩き出し、

「え……え……？」

抵抗して逃げだそうとしても、自分の身に起こっていることに整理がつかない。

身体が石のように固まってしまっている竜那はそのまま抵抗虚しく一緒に向かってしまい、気がつけば目の前に集団はいた。

黒い集団は既に事を済ませてしまったようで骨も残さず紅く染まった地面だけがそこにある。

そして口を真つ赤にした状態でまるで男を主人と認めているかのような羨望の眼差しを向け、その姿はさながら『待て』と言われている

いる飼犬同然だった。

「ほおらみんな、ごめんね待たせちゃって。今からちゃんと”食べられる”ようにするからさ」

「……………！」

その言葉の意味を、竜那は数秒の間理解できなかったが、さっきこの怪物達の餌食になっていた人を思い出し、今度は自分がそうなるかと理解した瞬間、その衝撃がようやく切っ掛けになって全身が恐怖で震え上がった。

「最近この子達の数が妙に減っちゃってね、だから栄養がすぐいるんだよ。さて、じゃあまず——」

竜那は男に頭を乱暴に掴まれた。

それから、グツと力が込められ、何かを抜き取るように手を持ち上げると、

——何か光の衣のような薄ぼんやりとしたものが手に掴まれており、竜那がそれが何なのか理解できないまま、男はそれを口元に寄せると、まるで深呼吸でもするかのように、その光の衣を吸ってしまった。

「さて、あとは——」

吸い終わってから上唇をペロツと舐め、今度は竜那の両肩に手を置き、それから接吻でもするかのように顔をゆっくり近づける。

竜那は呆然と、その近づいてくる端正な顔立ちを眺めるようにして見る。

見もしない絶世の美男子からの突然の接吻という、ドキドキ感はそのにはまったくなかった。

そして互いの顔が近づき、いよいよ唇が重なる刹那——男の口が人の頭を包めるほど大きく広がる。

「——いただきます」

「え……——」

もう、何をしてでも無駄だった。

絶叫も悲鳴も上げられず、こんな暗い道の中、自分は喰われる流れとなった。

目を見開いて、自分の頭をすっぽりと包み込んでしまいそうな、常識外れの口を見つめながら、冷や汗をびっしりとかいて、ただただ、喰われようとしている運命が迫り、自分の日常が破壊された、瞬間であった。

どうして、軽い気持ちで出かけたのに、こんなワケの分からないまま終わるの？

誰か、ねえ誰か、教えてよ、私は……私は、ここでお終いなのか？

神様でも……白馬の王子でもいいから……誰か……

そう思い、現実から逃れようと、瞼を閉じようとしたときだった。

竜那の肩に置いていた男の手が、突然宙を舞った。

「ぐぎつ、……え!？」

男は先程までの優美な笑みから表情を崩し、大きな口を閉じると何が起こったのか理解できないと言いたげに目を見開き、それから思い出したかのように吹き飛んだ左手の傷口を右手で押さえると、

突如――

「あああああああああ――!!」

周囲にこれ以上ないほどの絶叫を上げ、蹈鞴を踏みながら後ろに下がる。

吹き飛んだ手の切り口からは、赤い血ではなく光を放つ液体が波々と地面に注がれており、男は痛みに打ち震えるように身を強ばらせる。

吹き飛んだ手が数メートル後ろの道路に落下した。

周囲を取り巻いている怪物達も、主人の突然の負傷に驚き、どうすればいいか分からず狼狽えようとした瞬間、一体の眉間に赤い光点が定まりパスン、と気の抜けた音と共に撃ち抜かれ、その場でドサツと倒れて死体へと変わった。

「……………え？」

竜那はあまりの現場の急変ぶりにただただ啞然とし、そのままペタンとその場に座り込んでしまう。

一体、何がどうなっているのか。

その答えを知ろうとして——それは真上から降ってきた。

「——ようやく、目標確認」

不意に別の男の声。

竜那はその声に釣られて顔を上げようとする前に、それは目の前に落下してきた。

そして見事な着地を決め、ゆっくりと立ち上がったその姿は、まるで黒いボディースーツに無骨な付属品やロックボルトなどを付けたような、さながら近未来の操縦服のようだった。

「ようやく見付けたぞコノヤロー。散々コソコソしやがって」

声色からして若い男、そして長身で竜那と三十センチ以上くらい差があり、両手にはこの国には似合わない、銃口に何かを取り付け、

レーザーポインタも装着した大型の拳銃が二丁、握られている。
圧倒的な存在感が、目の前の男にはあった。

（誰……………？）

自分と男と怪物達の間割り込んだ、謎の男の背中を見てそう思う。

この男の介入で、竜那は自分の置かれた状況や立場を忘れ、ただ見つめた。

すると視線に気がついたのか、男はソツと肩越しから、こちらを見た。

端正な顔立ちで、目つきが悪く背の高い黒髪の青年、と呼ぶのがふさわしい容貌だった。

それから顔を前に戻し、向いたままで竜那に向かって言った。

「説明は後だ。そして現時点を持って、お前の守護にあたる。よろしくー！」

そう言って、両手の銃口を目の前にいる目標にぴたりと向けた。

それは、神様と言うには現実味があり、白馬の王子にしては、あまりにも荒々しい姿だった。

02話：剥落

突然、色んな出来事が起きすぎて処理しきれなかった状況を、少しだけ落ち着かせた竜那はようやく目の前にいる青年の背中に向かって声を掛けることができた。

「あ、あなた誰……？」

すると青年は顔と照準を前方の男と化け物に向けたままながらも反応したかのように頭を左右に少しだけ揺らし、再び視線を前に向けたまま返事が返ってくる。

「その質問は今は無しだ。それより俺が合図したら、すぐさま身を伏せろ」

「え？ え、あ、は、はい」

とりあえず今はこの人の言うことはだけは聞いておこう、竜那はそう考えていつでも身体を動かせるよう、身構えた。

すると突如――

「うわああああ！！　よくも、よくも僕の手を、手を、手をををおお！」

何故自分の手が無くなったのか、何故こんなに痛いのが理解できないように、男の絶叫が、耳を劈くように響き渡る。手首の切り口からは既に光る液体の漏洩は治まっているようである。その主人の叫び声で、周辺にいた黒い狼のような化け物は、大型拳銃を持った青年に殺意の眼差しを一斉に向ける。

「どうだ？　見た目から判断すると――」

「“^{シント}神人”ではない、“^{シント}使徒”だ」

「でねえと困るけどな。さて」

一体誰と話してるんだろ、と竜那は思ったが口には出さなかった。青年は、今度は銃を持ったままの手でマイクの付いたヘッドセットを持ち、スイッチを入れて口元に寄せると、ちゃんと聞こえる声の音量で、マイクに向かって喋った。

『“こちらケイル4。生存者一名発見。至急援護要請。これより応戦に入る”』

それからヘッドセットを持った手を投げ捨てるように真横に投げる体勢に取ると、手を切られた男が呪い殺すかのような形相で化物達に命令を下そうと青年に向かって指をさす。

そして、青年が投げ捨てるのと、化け物達が一斉に襲いかかってきたのはほぼ同時であった。

「伏せろ！」

「！」

青年から合図が送られると竜那はすぐさま伏せ、そして小柄な身体をさらに縮める。

すると青年は前を見据え、そのままバックステップで下がり、丁度竜那を跨ぐような体勢に入ると、二つの銃口を化け物達に向ける。

「戦闘開始だ」

そう呟いて、両手にあるトリガーを引き絞った。

「……おお」

手を頭の上に載せ、その様子を見ていた竜那は、思わず声を漏らした。

青年は襲いかかってくる化け物達に対し、その場から一步も動かず、まるで精密機械のような正確な照準で流れ弾を作らないようにして、近くの目標から素早く射撃していった。

竜那からはまるで映画の凄腕兵士を見ているかのような感じであったが、間近で見るとその凄さは何倍も違った。

彼の戦いは、危なっかしさも何もない、リラックスでもしてるかのように見えた。

そして彼の周りでは、胸や額などの急所を撃ち抜かれた化け物達が、血を流して地面に倒れていた。

「援護おせー、あいつら何やってんだ？」

「戦闘所要時間十二秒で駆けつけるのは無理があるぞ」

「だからさ、人数増やせばいいんだってこついうときはよー」

そう、簡単な言葉を交わし、そして前方に顔を向ける。

前方にいる男、は切られた手首から先を指で拾い上げ、大事そうに胸に抱えながら、まるで幼い子供が泥だらけになったオモチャを愛しそうに撫でる仕草をした後、今度はそれだけで人を殺せそうな視線を青年に突きつける。

「お前は、何者だ？ よくも僕の手を……最近数が減っていたのは、お前の所為か？」

「正体を明かす必要も教える必要もあんのかコノヤロー？ ってか、俺達のこと知らねーみてえだなこいつ」

「どうやらまだ若いようだ。なるほど、道理でこの世界の”歪み”の進行が小規模なわけか」

すると男は聞こえない声に明らかに反応し、驚いた表情に切り替わる。

「！ その声、まさか”契神者”コントラクターなのか？」

「おっ、知ってた」

意外そうな声で青年は反応し、それから自然な動作で両手の銃を男に向ける。

男はそれに反応し、身構える。

「さーで、それとお前、何でこのガキを殺そうとしたんだ？」

青年の唐突な質問に竜那は目を見開く。

「それをわざわざ教える必要があるのか？ もう少し考えた質問を
しなよ」

「ん、ああそうだな。わざわざ聞くまでもねえよな」

そう言っただけで青年はトリガーを引き絞って終わらせようとして――
側で胸を撃ち抜かれて倒れていた化け物の一体が突然起き上がり、
竜那に襲いかかってきた。

「え――」

「なっ！」

（こいつ、まだ生きて――！）

青年は呆気にとられ、片方の照準を向けようとするが、間に合わない。

竜那は伏せた状態で化け物がこちらに向かってきたという認識をし、視線をそちらに向ける。

狼のような、人を食う、本能の奥底から恐怖を引きずり出すこの存在が視界に入ろうか入らまいかというところで、まるで化け物は何かに激しくぶつかったかのように、すぐ側でバラバラになってその場で崩れ落ちてしまった。

「……え？」

見ると、いつの間にか自分と青年の周りに、薄青色の透明な防壁

がドーム状に展開しており、二人を護るように包んでいた。その光景は戦場という場において場違いなほど綺麗で、ときおり波打ってみせては違う色の光を醸し出していた。

(……水?)

見た目の質感と透明感から、竜那はそう思った。

やがて、その水の防壁はそのまま消えるようになり、元の空間に戻る。

そして前を見ても、男はもうどこにもいなかった。

さっきの化け物の奇襲の僅かな隙で逃亡したのである。

「くそっ！ 追跡はできるか？」

ネガティブ
ロストコンタクト

「否定。敵消失」

「……お前の索敵から逃れるなんて……ちくしょ」

残念そうにガックリと肩を落とす青年は、洪々大型拳銃を腰のホルスターに戻し、それから投げ捨てたヘッドセットを回収し、集の安全を確認してからさらに化け物達の死体の側に行き、両手を祈るような形で握る。

「——救い無きものに手を、光無き闇に光を、一人、夜の底に行く我らを、王よ、いざないたまえ——」

すると化け物達の死体を包むよう、地面から透明な膜が吹き出すとそのまま全てを包み込み、そしてそのまま萎むよう、死体と共に地面へと吸い込まれていった。

それから数秒後に、ようやく青年は驚いている竜那の方に振り向いた。

まだ路面に座り込んでいた竜那はそこでやっと青年をマジマジと観察することができた。

端正な顔立ちで、少し長めの黒髪で目つきが悪くて背は高い。

そして無骨な付属品のついた戦闘服を着ているその姿は、戦闘が終わった今では少々異質な服装であった。そして何より気になるのが、この国では禁止されているはずの大型拳銃が二丁、×状に組み込まれた後ろ腰のホルスターに収まっていることである。

しかしそれを言う前に、まず先に言うことがある。

「あ……あの、ありがとうございます」

失礼ではない、ごくごく当たり前の礼。

その言葉を受け取った青年は、頬を指で軽くポリポリと掻き、それから歩み寄って腰を落とすと竜那の頭をポンポンと叩いた。

「すまね、怖かったろ？ でもな、お前みたいなガキがこんな真夜中に彷徨くんじゃねえぞ。家送るからどこか案内しな」

「え、はい、あれです」

ゆっくりと持ち上げた指で既に見える家を指をさす。

それを確認した青年は立ち上がり、周りの状況を確認してから、改めて竜那を見る。

「思ったより近かった。じゃあさて、今夜起きたことは忘れな
「え——？」

そう言つて青年は掌を竜那の顔に翳すようにする。すると、

（え？ なに これ……）

竜那の視界がだんだんぼやけていき、身体力が抜けて意識が混濁していくと、目の前が真っ暗になり、その場で眠るように地面に項垂れて動かなくなってしまった。

掌を翳していた青年は、それを確認すると竜那の身体を簡単にヒョイツと持ち上げ、肩に載せるようにすると指が差された家に向かって歩き始めた。

歩き始めてから少し後、青年は肩を少し落とし、

「……悪い、逃しちまつて」

「案ずるな」

せっかく捕捉した相手だというのに、少女を護るために警戒しすぎて逃してしまうなど、任務遂行動中では許されない失敗である。

「確かに敵に我々の存在がバレてしまったが、人一人は救えた。それに——」

「それに？」

姿無き声はどうやら何かに気がついたようで、それを青年に伝える。

「奴は執拗にその少女をつけ狙っていた。先程の下僕もお前ではなく”そいつ”に向かって襲いかかってきていた。普通ならば手を切ったお前に対してだと思うが、それ相応の惹き付ける”何か”がそいつにはあるということだ。どうやら思ったより収穫は大きいようだ」

「となると？」

「再び襲われる可能性がある、ということ」

「……………そうか」

肩に担いだ小柄な少女を見て、青年はポツリと呟く。

「他の連中にもこのことを報告する必要があるな。だがまだ他に襲われる奴がいるかもしれないから配置考えないとな」

「そうだな。しかしどちらにせよ、手負いの獣はあとが面倒だ」

「同感。さて、早くしねえとな、それに――」

青年は着いた家を見上げてから、こう言った。

「まださよなら、ってわけじゃなさそうだな」

翌日、鬱陶しいほどに明るい朝日が部屋に差し込み、竜那は目を覚ました。

身体を起こし、寝ぼけ眼で現状を見渡してみる。

昨日出かけたままの服装であつた。

「……あれ？ という夢をみたんだ、なオチ？」

いまいち昨日の朧気な記憶の整理が着かず、竜那は首を傾げながらも昨夜のことを思い出す。

確か自分はコンビニで月刊買いに行つて、あ、月刊どっかに置いて来ちゃつた。

を始めとしてその後の記憶も引つ張つてみると、怖い顔のお兄さんがイケメン野郎と怪物達から護つてくれた後、何かされた、というふうにしかり思い出せなかつた（何かされたというのは深く考えないようにする）。

それほど昨日起きたことが非現実すぎた、いや、現実味がどこにあるから頭がハッキリと認めたくないのかも知れない。

ともかく、竜那は自分のお腹がぐーと鳴つたのを聞くと腹をさすり、

「うー、とりあえずお腹減つたから食べに行こー」

朝食を食べにとりあえずベットから起きて一階へと向かつた。

一階に降りてみると、いつもの光景がそこにあった。
相変わらず食卓で新聞を読んで朝食を待つ父親。

その後ろでコトコトと味噌汁の入った鍋を掻き回すエプロン姿の母親。

まさかこの二人が昨日、娘が二人の男に取り合いをされたなどという出来事は知らないであろう。

と、誤解されそうな説明を頭に浮かんでみたりする。

ともかく竜那はまだ朝食が用意されていないのでとりあえず席に座り、軽く鼻歌などを唄ってみて待つこと数分、ようやく母親が皿を持ってこつちにやってきた。

——母親と父親の分だけを。

「れ？」

ポカンとした表情で竜那は目の前で並べられる両親の朝食を見つめ、それから台所の方を見るが自分の分など作られてはいなかった。竜那はそれらを交互に何度も見て、それから右斜めに座っている母親に恐る恐る声を掛けてみる。

「あ、あのお母さん……？」

「あなた、できたわよ。さつさと食べなさいな」

「おっ、じゃあ頂くか」

竜那の言葉を見無視し、両親は二人揃っていたいただきますをし、それ

からゆつくりと食べ始める。

「あれ、え、もしかして昨日のこと怒ってるの？ そりゃあんな遅くにいったあたしも悪いけどさ」

「ん、今日も美味しいよお前」

「つてお父さん私発言中だつてえの！ いきなり何そのKY発言！」

「あら嬉しいわ。あなた、お仕事頑張ってくださいね」

「何これ？ 盛大なシカト祭りが行われてるの？」

竜那のそんなツッコみも聞かず、二人はさつさと朝食を済ませてしまつと母親は皿洗いに徹し、父親は仕事鞆を持って玄関へと向かつていつてしまった。

一人食卓にポツンと残された竜那は昼食の弁当も用意されていないと気がつくと、何だか悲しいような、悔しいような複雑な心境で座っていたが、やがて一つ決断して皿洗いをしている母親の元まで行き、後ろから声を掛ける。

「お母さん、ごめんなさい。もう二度としないしネットゲーもほとんどにしておくから許してください」

「ふんふんふんふん」

「ねえ鼻歌歌わないでよ、ねえ」

竜那は話も聞いてくれない母親のエプロンの裾を掴んでグイグイとやると、ようやく気がついてオロオロと周りを見渡し始める。

「な、何？ 急に揺れが……？」

「……楽しいですかお母さん」

さすがにここまで聞いてもらえないとは、母親の怒りはよほどの

ようだ。

そう判断した竜那は母親のことはひとまず置いておき、渋々洗面所にいって洗顔と歯磨きをし、それから自室に行って制服に着替えると家の外へと向かった。

家を出て約五分。

朝食と昼食は売店のパンでも食べて飢えを凌ごうと考えていると十字路で見知った顔が見えた。

肩で切りそろえ、気の強そうな外見の制服を着た少女、クラスメートの工藤明日香である。

その姿を見た竜那は早速手を振って近づく。

「おっ、アスカ〜」

「……………」

見事なスルー。

竜那はそのスルースキルぶりに思わずズッコけそうになるが何とか体勢を立て直す。

「ちよっ、アスカってばあ、アスカも私の親と同じようにしないでよ〜」

「さーで、今日は一番乗りで武道場に着くかもね〜、そしたら部長と二人つきりで……フツッ」

竜那の声を無視し、何やら妙な妄想に走っている明日香は頬を赤らめて妄想から力を得たのか、急に歩く速度が加速する。

「えっ、ってちよっ！？ アスカ！ ねえ止まっててば！ お菓子あるよお菓子ほら！」

慌てて呼び止めを試みるが、彼女の速度は変わらずどんどん距離が離される。

「ねえ！ んもっ、この体重が○○Kgだった女子！」

その言葉に反応したのか、明日香は突然歩くのを止め、睨み付けた表情でバツと後ろに振り向く。

その姿、鬼以外に言葉で表現できるものなどないほどの迫力であった。

さすがの竜那もこの禁句を言ってしまったのは失敗だったと後悔し、脂汗をびっしりと掻き、カタコトで謝る。

「す、スミマセンデシタ。チョーシノリマシタ」

「……今何か、とんでもないようなこと言われた気配がしたけど……気のせいかな」

そう言っただけ歩くのを再開し、竜那のことなどまるで見えていないのか、そのまま立ち去っていつてしまった。

竜那は何だか危機的状況を回避できたことにホッと一息つくが、明日香のこちらに対する妙な姿に不審感を抱かずにはおれず、

(……エイプリルフルはもう過ぎているよね?)

首を傾げながらも明日香の向かった道へ足を運んでいった。

それから奇妙な出来事が続いた。

まず最初は部活の朝練からだが、自分が道場に入っても誰も視線を向けず、挨拶もせず、こちらの存在など気にも留めない様子で朝練が進んでいった。

次に教室ではまたしても引き戸を開けて入ってみても、誰も気がつかず、互いに最初の授業前の談笑に浸っていた。その中で友人達を見付けては声を掛けてみるが、やはり誰も声を無視し、揺さぶってみても何か揺れが起こったとしか認識されなかった。

(おかしい、絶対おかしいよこれ。何? 何が起こってるの?)

竜那はそう思いながらも四時間目の授業はきっちり受け、それから腹が減ったので売店でパンを買おうとしたが、おばちゃんにいくらパンを頼んでも会計を済ませようとしても反応してくれず、仕方がないので手の届く距離にあったパンを取り、罪悪感はあるが取った分のお金を会計に置いて立ち去り、それから誰も話してくれないので渋谷屋上へと向かった。

「うゝ、何でもみんな私のこと無視するんだろー」

昼休み、屋上でフェンスの外を見ながらそう呟き、買ったばかりのビニールに入っていないパンを洪々と見つめる。

「しかもよりによってこれだし……」

手に持っているのはコッペパン。自分の力でとれたのはこれだけである。

バターやジャムがあればいい食事にはなったかも知れないがご生憎そういうものを持ち歩く習慣がないのでただの味気ないパンとなってしまうた。

誰がいつ コッペパンを要求する！と叫んだのか、などとぶつぶつ文句を言いながら仕方なくモフモフとパンに齧り付く。

「うっ、牛乳欲しい」

乾き物のパンが口の中の水分を奪い、今更買いに行っても時間がないのでしょうがなく全部食べようと口を忙しなく動かした。

一方、その様子を遠くから見つめる影あり。

そこはマンションの屋上で人数は四人ほどであり、いずれも黒いボディースーツの戦闘服でうつぶせの姿勢のまま双眼鏡を覗き込んでいる。

その姿は竜那に言わせれば高校を覗くいわゆる変態コスプレ集団にしか見えなかった。

そしてその中の一人が双眼鏡から目を離し、隣にいる人に声を掛ける。

「あれが昨日ケイル4が保護したという少女ですか、何とも幼いですね」

「しー、作戦行動中だぞ。自重しろホーン3」

「しかしよく生き残りましたな。偶然と言うべきか、運が良いと言うべきか」

「お、おい、ここから三時方向に十メートル、そこから六時方向五メートル見てみるよ。天国が始まっているぞ」

一人が何かを見付け、他の三人もそれに倣って見てみると、丁度次の時間が体育なのか、女子高生達が更衣室にしてある教室で一斉に着替え始めていた。

脱いだTシャツからまろび出る純白の下着、そしてまたあんな大きくなくてんじゃないの〜と友人同士でじゃれついている姿は、思わず唸りたくなる光景であった。

「「「「「おお〜」」」」」

本当に変態コスプレ集団になってしまった。
っと、その時、

『ごほんっ、クロー2、ホーン3、ファング8、レッグ9。何見て
んですかコノヤロー』

「「「「うおおっ!?!」「」」」」

突然横に置いていた通信機から声が入り、四人は慌てて双眼鏡か
ら目を離す。

『こつちからは変態四人組が丸見えだぞー。ちゃんと見張ってくれ
よなー』

「も、もうしわけない。何しろもう五日も此処にいるからつい」

『気持ちは分からなくないけど、今から接触するからあんた達も聞
いててくれ。ほんとマジ頼みますよー』

「了解」

そう言って通信が切れ、四人は名残惜しさを感じながらも渋々と
屋上を再び覗き込んだ。

そこには丁度コッペパンを食べ終え、水々と唸っている少女のあ
られもない姿が映っていた。

「うゝ、お水欲しいゝ、もう降りて水道から飲もう」

「ほれ水」

「あ、どうも」

コッペパンの吸湿性能に悩まされ、喉がカラカラになっていた竜那は不意に差し出された水の入ったペットボトルを受け取るとフタを開け、ゴキユゴキユと気持ちの良い音を立てて半分ほど飲み干す。

「ぷはあゝゝ生き返るゝ、どうもあざーす……え？」

高らかに叫び、それからようやく何故自分が水を飲んでいるのかに気がつくと振り返ってみる。

そしてそこに、発見した。

「あ———！」

昨夜は夢ではなかったと言っことを。
自分を助け出してくれた彼を。

「よう、また会ったな」

端正な顔立ちで三白眼の背の高い青年が、男子生徒の冬服を着てまでも、昨日銃二丁だけで化け物達を倒したあの青年が、そこで立っていた。

「え？ あ、あれ？ 夢じゃなかったんだあれ」

「ああ、そしてちよいとお前に聞きたいことがあるからこうして来たんだが……動きづらそうな格好だなこれ」

そう言つて自分の身体を見渡してみると、その制服が一瞬、雑音を交えて映像が乱れるかのようになる。

竜那はそれに少し驚いて目を見開く。

「！」

「ん？ ああこれは擬態だ。本当に着ているわけじゃねえよ。格好は昨日見たときと一緒だ」

そう言つて徐に何も付いていない腰から昨日見た大型拳銃を取り出して見せ、それをまたしまふ。

どうやら疑似映像のようなものが彼の身体を覆っているようだ。しかしそんな高レベルな科学技術は今の竜那にとってそれは重要ではなかった。

重要なのは――

「さてと。じゃあ、いくつか聞きたいことがあるから……ん？」
「……………」

青年は目の前にいる胸の高さにも届かない少女が顔を俯かせていることに気がつき、不思議顔で顔を覗き込もうとすると、途端、ガシッと胸ぐらを両手で掴まれる。

「なっ！？」

「う、う、う、う――」

青年が驚愕の表情でいるなか、竜那はぶわっと顔を上げると滝の

如く両眼から涙をこぼし、

「嬉しい〜！！ や、やっとともに話せる人がいた〜！ 嬉しい〜！！」

ようやく今日初めての会話が成立し、その喜びを目の前の青年に一心にぶつけていた。

「おわちよっちょ何だ！？ ま、まあとりあえず落ち着け、な？」
「よかった〜ほんとよかった〜あたし、名前は竜那っていいます！覚えててください〜！」

「タツナ？ タツナか……俺は……」

えぐえぐ泣く少女に対し、青年は少しの間考えてから、自分の名を告げた。

「俺は、ラグナだ。よろしくなタツナ」

「今朝、親も友人も何を言っても聞いてくれないだつて？」

「うん、何だかまるで私が見えてないよーな。そんな感じ」

「俺はこうしてちゃんと会話ができてるけどな」

竜那は、日本人の名前ではない彼の名前について疑問を持ったが、一応助けてくれたということで細かいことは気にせず今日起こった出来事を話してみた。

それに関してラグナと名乗った青年はうーんと唸ってから、まるで第三者がそこにいるかのように訊ねてみる。

「なあ、どう思う？」

「奴が何かしらその少女に仕組んだのであろう。襲われた際の状況を詳しく聞け」

「それもそうだな」

「？ さっきから誰と話してるの？」

昨日から時折この人はこの場にはいない誰かと会話をしていることが気になっていた竜那は、そう訊ねてみると、ラグナは何やら教えようかどうか悩んだような表情になるがやがて自分の胸に指さすと、

「信じるも信じないも勝手だが、俺と契約を交わした」オリソンテ創世人”の”ティシュトリヤ”とだ。俺は長いからティトって呼んでる」

「その呼び方は止めるラグナ。それといきなり教えていいのか？」

「別に教えなくても大丈夫だろう。敵じゃねえんだし。それにお前の声聞こえねーみてえだし」

「オリソンテ……？ ティシュトリヤ？ 何々それっ！？ 紅世の

王なの！？ サーヴァントなの！？ 使い魔なの！？」

「……とりあえず落ち着け」

いきなりの幻想的なカタカナ言葉に竜那は目を輝かせてずっと青年の方に寄せる。

青年はそんな夢いっぱいの子供のような目をした竜那に若干驚きながらも、どれも違うと言ってとりあえず離れるよう言う。

それから改めて本題に入る。

「えっとまあ、とりあえず言い辛いかもしれないが、昨日襲われたとき何かされたか？　もしかしたらお前の身に起こっていることに何か繋がるかも知れねえからさ」

「昨日……」

昨夜、そう自分は殺されかけたのだ。

帰り道にまさか化け物が人を喰らう光景を目にし、さらには謎のイケメンに何かを剥がされ、頭から自分が食べられようとしたのだから身を震わさずにはられない。

ん？　何かを剥がされた？

昨日のやりとりを思い出しながら、竜那はふと、自分がされた中で一番奇妙なことを思い出し、それを話してみる。

「……そういえば、昨日会ったイケメンに頭をガシッて掴まれて、何かこう……光のもやもや、つとしたものを私から奪って、それを吸い込んだじゃった」

「……光のもやもや？　……うん」

竜那の話で首を傾げたラグナは、頭の中でその情報を元に整理してみせる。

この町で起こっている奴らの襲撃。

しかし無作為に襲っているわけではなく、どこかに網を張って待ち伏せている、と考えると連中は何かしらの理由でそうしている可能性がある。

そして、この町で立て続けに人が殺されているのに公表されていない状況。

仮に、もし奴がこの少女と同じような一連の作業を行ってから化け物達に喰わせたとしたら、

「ひょっとして……」

「どうやら、その嫌なものは的中しているぞ。それと教えてやった方が都合は良くなる」

「え？ 何か分かったの？」

ラグナは言おうか言わないか迷った表情で困っていたが、頭に女性が促し、目の前の少女がジーツとこちらを見ているのでそれに耐えかね、とうとう口を割った。

「……タツナ、これはあくまで仮説だがお前はどうかやら、誰からもお前の存在を認識できないようにされた可能性がある」

「え……？」

「つまり、襲って喰われても大丈夫のように、お前は这个世界で存在していないことにされてるってことだ」

その言葉は、どこまでも残酷に耳の奥に響いた。

03話：来襲

世界は、変わらず動いている。

そんな世界を見下ろす存在が、とある高いビルの屋上から町並みを眺めていた。

「まさか、こんなに早く奴らが来るなんて……僕も少し遊びすぎたかな……」

そう言っただけで切られたはずの手で前髪を払い、ビル風に吹かれる中、視線だけを流すと穏やかな表情から急に獰猛な笑みへ変わって含み笑いをすると、

「ふふ、でも今夜であの娘を消して、それから手を切ってくれたあの男にも報復しないとな。どうせあの子は保護されてるだろうし、いつ攻めても変わりはない」

どうやら相当あの二人に関して執着が強いのか、凭りかかっていた鉄製の手すりをギョツと握りしめるとそれだけで握った部分が凹み、そこだけがへの字型に折れ曲がる。それからスツとまた穏やかな表情になると苦しそうに胸を抱き、

「ああ、ごめんねみんな。でも今だけは我慢して欲しい。今を乗り切れば、世界は僕たちのものだからね？」

そう言つて見せ、背後の空間が突然黒くなるとそこから幾重にも重なったこの世の物とは思えない絶叫、吠え声が響き渡り、何かが蠢き始めた。

それを背に、男は今日見るべき屍を思い浮かべながら、狩りの準備を始めた。

「はいはい！ ストップ！ 何？ あたしは昨日のイケメン野郎にそうされたって？」

「……まあそう言っただつてもりだが、どうした？ 怖じ気づいたのか？」

どうやら彼女は昨夜出会した男に『存在の認識』なるものを剥がされて喰われてしまったため今日のように誰も彼女の存在、言動、行動などが認識できず、事実上彼女はひとりぼっちとなっている。それは敵が施した防衛線で、彼女が消されても誰にも気づかれないようにするためだということを話したところであつた。

ラグナは何か言いたげな竜那に対し、まあ普通怖じ気づくか信じないかのどっちかな、と思いながら待っている、

「うゝむ、まさかこんなファンタジーなことに巻き込まれるなんて……あたしの人生もまだまだ捨てたもんじゃないね」

「……え？」

顎に手を添え、何やら考え込む彼女の姿にラグナは思わず啞然となる。

「お、おい……普通は信じないと言って馬鹿にするか、泣きじゃくるところじゃないか？」

「うゝん、たぶんまだ自覚できていないだけだと思うけど、此处でそうしても無意味なのは無意味なんだし」

正直、驚いた。

事実上、彼女は誰からも干渉されないというこの状態に対しまったく慌てない素振りにラグナは驚かざるを得なかった。こんな幼い感じの少女が泣きもせず、不満をぶちまけたりもせず、その柔軟さに逆に感心する。

「ほお、思ったよりこの娘、肝が据わっているな」

「……のようだな。こんな奴も珍しいな」

「え？ 何かオリソンテさんが言ったの？」

不自然な会話に気がついた竜那がそう聞くとラグナは軽く頷いて、

「ああ、肝が据わっている奴だつてよ」

「え、え、そうかな？」

その後ろ頭を掻いて何故か照れる竜那を見て、ラグナも思わず失笑する。

その視線の中で、竜那は自分の身体を見下ろして『もしやミスデスになってたりして』などと呟きながら見廻し、それからふと何か思いついたような表情で顔を戻し、ラグナに訊ねる。

「ところでさー、ラグナって何者なの？ 思いつきり銃刀法違反しているみたいだけど」

昨日出会ってから彼の正体に関しては興味があった。

何しろ後腰にでかい拳銃二丁を隠し持ち、尚かつ自分が知る中で高レベルの技術で作られた戦闘服を纏っているのだ。

とりあえずこの国の法律に縛られて動いているような人物ではないと考えたのだ。

「いきなり呼び捨てか。まあいいけど。俺か？ 言っても分からないし、信じないだろうけど……………いや」

この少女は先程、声も聞けない自分と契約している創世人の存在を認めている。

何故彼女がこれほど動揺せず、しかも曖昧な存在を簡単に信じてしまうのかは分からなかったが、少なくとも敵の息吹がかかっていないのは確かなので、とりあえず言ってみる。

「俺は……兵士だ」

「兵士？ ……自衛隊？」

「違う。『アクリオン』の軍所属だ」

「あくりおん？」

「そうだ、この世界ではない俺の住んでいる世界の国の軍だ。俺はその特殊戦闘班^{SCT}に所属している。階級は二佐。コールサインはケイル4だ」

すらすらとラグナは答えた。

しかしさすがの竜那も何言っているのか理解できず、そしてその返答の中に引つかかるものがあり、表情を曇らせる。

「いやあの、ラグナさん？ さっき言ったことの中に『この世界ではない俺の住んでいる世界』って言ったよね？ まるでこの世界以外にも世界があるような……そこまで言われるとラグナが電波系の軍事オタクにしか見えないよ」

「ん？ だが俺は事実を述べただけだ。それとも何だ？ オリソンデ 創世人と契約していることは信じて、俺が異世界の人間だつていうのは信じられないのか？」

「だって、んな唐突に言われても……ファンタジーとミリタリーごっちゃになってるし」

どうやら彼女には独特の信用順序のようなものがあるらしい。やはりその辺の人間に比べたら妙な感性を持っているようだ。

「お前、変わった奴だな……」

「そう？ みんなからはよく言われてるけど」

「そいつらは正しいな。いい友人持つてんじゃねえか」

「むう、それだとあたしが変人みたいじゃん！ ラグナだって十分変だよ！」

「てめえと一緒にすんじゃねえ、俺はちゃんとしているぞ」

「それには些か疑問が多いのだが」

そう言つてポカポカとラグナの胸の辺りを拳で叩く。ラグナはそれを簡単にあしらつてから落着かせる。

「ともかく、昨夜の奴がお前を再び狙いに来る可能性が高いと判断したのでこれからお前の護衛にあたることにした」

「え？ 昨日のイケメンが？」

「そうだ、奴の手口は特殊なケースだから調査も兼ねてお前の護衛をし、もし奴が食らいついたら殲滅する。それでよし、だ」

「ああ、だから私に色んなことを教えてくれたのか」

ようやく何故この男が自分に普通信じないようなことを教えたり、こちらの質問に対してちゃんと答えてくれるのかを理解した竜那はポンと拳で掌を叩く。と同時にその言葉の重要な点に気づく。

「つてことは……あたしまだ命狙われてるってこと！？」

「そういうことだ。でもまあ、まだ確信が持ててないからどうとは言えないが、一応だ。一応な」

「ん、何か複雑な心境だけど……まあよろしくお願いします」

ペコリ、と竜那はお辞儀をする。

「ん、ああ、こちらこそ。最善を尽くして何とかしてみせる」

そしてラグナも軽く礼をして見せると、

「ついでにオリソンテさんもよろしくです」

「ふむ、声が聞こえないだろうが一応よろしく言っておく」

「テイトもよろしくだったよ」

「どうも」

そうして二人の、正確には三人の挨拶が済み、丁度屋上に心地の良い風が吹き抜けていくと、

くうくう

「……………」

「……………」

「……………」

竜那のお腹が鳴った。

「い、いや」朝と昼でコッペパン一つしか食べてないからお腹空いちやあって。でもここの売店のパンはもう売り切れてると思うし」

「それならどつか近くで済ませるか？」

「じゃあ、ごちそうになる」

「フフツ、本当に面白い娘だな」

「そうみてえだな、お前が笑うくらいだし」

そうして竜那の空腹を満たすべく二人は、正確には三人は近くで昼食を摂るために屋上から退場していった。

正午が少し過ぎた程度の平日の町の賑わいはなかなかのもので一番近くにあった、生徒達から値段が安くてうまいと評判のレストランに寄った二人はそこで食べることに決め、自動ドアをくぐるとさっそく案内人が駆け寄ってくる。

「お客様何名でしょうか？」

「二人で」

「ふた、り、でございますか？」

「……一人をお願いします」

相手の目で確認できる範囲では、ラグナ一人でしか見えない。

そのことに竜那は心のどこかで何かが疼くような、そんな小さな痛みにも似た感情を覚えるが空腹がそれを押し流そうとするのでさっさとラグナと共に二人用の相席へと案内された。

それからメニューを眺めるようにしていた竜那はふと、手持ちがあまりないことに気がつき異世界から来た（一応信用してみる）彼がお金を持っているかどうか不安げに訊ねると、そういうのはここに来る前に事前に用意している、ここで何を喰おうが困らないくらいには持っている、と言ってくれたので遠慮無くハンバーグのポイル焼きを頼んだ。因みにラグナは腹が空いていないのでコーヒーという奴を頼んでみた。（事実上、彼がその二つを頼んだということにはなっている。因みにコーヒーはハンバークと一緒に来るように

頼んだ」

そしてお待ちかねのアルミホイルに包まれたハンバーグが到着し、テーブルの上に置かれる。

ラグナはそれを前に差し出すと、竜那はフォークとナイフの二刀流でアルミホイルを解くと中から熱で溶けたチーズのかかったハンバーグが姿を現してデミグラスソースの香りが鼻に届き、その周りには茹でられたブロッコリーとバターソテーにされたニンジンが同封されている。

「ううゝついに来たこのときがゝゝ」

じゅるるつとよだれを拭き取り、竜那はハンバーグを一口サイズにナイフで切る。切る際にひき肉の間に詰まっている肉汁が漏れ出てソースと融合し、それを口に運ぶとハンバーグの味と独特の香りを持つチーズ、そしてデミグラスソースが絡み合って何とも言えない味へと変化する。

「うん、美味しい！ 生きてて良かった！」

そして付属のパンを手でちぎって食べ、さらにパンにデミグラスソースをかけて二段階の味を楽しむ。その様子を見ながら、相席に座っているラグナは用意された目の前の黒い液体を観察しながら、

「……なんだこれ？ すごい身体に悪そうな色の飲み物だな」

「しかし周りを見てみると飲んでいる人間がいる。私も調べてみたが毒ではなさそうだ。飲んでみる」

「まあお前が言うなら飲んでみるか。匂いは悪くねーしな」

「ああ、飲んでみるがいい、ただし――」

周りの客がこの黒い液体を飲んでいるのと、香ばしい匂いで好奇心が湧いたラグナはティシュトリヤに勧められるがままにカップを持ち、それをぐいっと飲んでみると、

「苦いぞ」

ブフーーーーー！！

口の中に広がった予想外の苦みにラグナは一瞬で拒絶反応を起こし、左にあった窓に向かって黒い噴水をぶちまける。その様子に周りの客も竜那も驚き、店員が慌てて駆け寄って声を掛けながらフキンで零れたコーヒーを拭う。

それから掃除が済み、ラグナは店員に謝ってから一息つき、肩をガツクリ落とすと、

「最初に言えよ。あとタツナも聞かなかった俺も悪いけど教えてくれたっていいだろうに」

「いやー、まさかコーヒー初体験だと思わなくて」

「クスクス、いや、すまなかつたなラグナ。その飲み物はどうやら一緒に用意されたその小さな容器とスティックの中にあるものを混ぜて調整するらしいな」

「ん？ これミルクと砂糖か？ おっ、ラッキー」

そう言ってラグナはシュガースティックを元々テーブルにあるものも含めて三つ入れ、さらにミルクも二つ入れてそれをスプーンでかき混ぜる。

甘党なのかな？

竜那はそう思いつつニンジンソテーをパクリと食べ、食事を続ける。

一方その頃、そんな二人の食事風景を少し離れた三階建てのビル
の屋上から二人ほどがうつぶせの姿勢で双眼鏡でこちらを覗いていた。

一人は髪を短く刈り込んだ男で背は高い方に位置し、年齢は三代前半ほど。

もう一人は髪が長く、背はもう一人よりさらに高く、年齢は二代半ばほどであった。

この二人、それぞれ『クロー2』と『ホーン3』というコールサインを持つ特殊戦闘班の兵士であり、今交代で彼らの行動を監視していた。

「どうやら本当にあの少女は周りから認識されてないみたいだな。ところで二佐はあのまま彼女にくつついている気なんだろうか？」

「うわー、何美味しい立場に立ってんだよ二佐殿はー、マジないわー。ほんと俺と代われと言いたい」

「二佐の考えた案だ。それに彼女は彼しか信用していないから適任だ。それにお前に任せたら我々の監視から逃れて何するか分からん。それよりあんな幼い子供も守備範囲なのか？」

「六日近くも可愛い女の子に会ってないんですから俺限界ですよ。この際見た目が幼かろうがあの子可愛いから俺の口説きテクニクを持ってすればイチコロで——」

「その口説きテクニクでブラット1殿でも口説いたらどうだ？」

「そんな恐ろしいことしませんよ。お偉いさん方から神の鉄拳が降り注ぎますから」

監視するだけの暇な任務なのでつつい談話を始めている二人はこんな感じであった。

因みに残りのファンゲ8とレッグ9は別の任務でこの場を離れており、最近入隊したての新人ではあるが、ちゃんと任務を任せられるという点では非常に優秀であった。

「さてと、ともかくあの少女が何かしらの鍵を握っているというのだから気は抜けない。敵が攻めてくるのは今までの傾向だと夜の方が多い。もし奴が狙ってくるとしたら……」

「夜ですか、まあ二佐殿だったら一人でも大丈夫なんじゃないでしょうかー？」

「我々SCTはチームの団結と連携が命だ。如何なる時でも見捨てたりしてはいけない」

「へいへい、あーそれにしても暇だなー」

そんな二人はただ単に流れる時を肌で感じ、双眼鏡の先でようやく食事を済ませた二人を見ながら、よっこらせと移動の準備を始めた。

ラグナと竜那は息抜きと言うことでゲームセンターにやって来ていた。

ラグナは見慣れた感が少しあったが、やはり見たこともない機器が喧しく鳴り響いているので少し興味ありげな視線を周りに散らし、既に中で遊んでいた先客達はその三白眼でのキョロキョロぶりに驚いていたりした。

ということで割とノリの良いらしい彼と記念に一枚、プリクラを撮ってみようと竜那が提案し、キャラクターが印刷されたビニールシートをぐり抜けて中に入り、パシャッと一枚撮ってみる。（周りから見れば男が一人、寂しく撮っているようにしか見えず、悲しげな視線が送られてたことは彼は気づいていない）

そしてできあがった一枚を取り出してみると、ピースをしたラグナ一人しか、映っていないかった。

「……ここまで、拒絶されるとは……あゝあ」

「何だ？ 俺一人しか映ってねえのか？」

「……ぶっ、これじゃあ寂しい男子だね。おっ、あっち行こ行こ」

プリクラにすら映らない自分に、竜那は先程の元気を消してしゅんとなり、それから何か誤魔化すように急に元に戻るとラグナの手を引いてUFOキャッチャーの方に行く。

「……………」

「情を移すな。冷静な判断を保て」

「分かってる」

彼女は所詮、こちらの任務遂行に有利になる情報を持っているか

ら保護しているのであって、決して同情心から側にいるわけではない。それを彼女は分かっているのだろっか。もし分かっていたいけば何を胸の内に隠しているのであろっか。もし分かっていたいなければ自分は利用されていると知って自分をどういう風に見るのか、それは怖かった。

（……って、何考えてんだ俺は。たかが昨日助けて、今日自己紹介したり飯喰ったりこうして遊んでいるだけじゃ……結構関わってるな）

っと、一瞬考えるのを止め、それから首をブンブン振って冷静に護衛任務遂行ということで竜那に付いていった。

因みにキャッチャーは六百円使って何とか鞆に付けるような兎のぬいぐるみが手に入った。（周りから見れば男が一人寂しくUFOキャッチャーをく中略>――）

二人はゲームセンターを出て、それから外に出て行くと、竜那は妙なものを発見した。

「え？ 何あれっ!？」

「ん？ あ、あれか」

竜那が驚いて指を差している方向に気がついたラグナは特に動じ

た様子もなく目で捕らえる。

竜那が見たのは、昨日見た狼のような怪物であった。

しかし、昨日の夜見たような獰猛さや恐ろしさは感じられず、しかも、何故か、その隣には十代後半あたりの女子大学生がその腕を掴んで並んで歩いているようにしていた。

何ともシュールな光景である。

「昨日の怪物が……可愛い彼女と歩いてる」

「最初に俺も初めて見たときすぐに射殺しようとしたよ。でも相手は何故か驚くだけでまったく反撃しなかったし、むしろ何か本当に人間みたいな素振りをしてたな」

「え？ 何それ？ 何がどうなってるの？」

竜那は不思議顔で訊ねると、ラグナは続ける。

「昨日、お前は使徒に認識を剥がされて喰われたって言ったよな？」

「うん」

「そしてこんな真つ昼間からあんなドス黒い化けもんが歩いていても周りが騒がない。それと唐突だがタツナ、実はお前の前に犠牲になった奴が何人かいるんだよ」

自分の前に殺された人が何人かいる、その言葉で竜那は息を飲む。

「だから使徒が何らかの手を加えて剥ぎ取った認識を化け物にすぐ替えている可能性が高い。一体何が目的かは不明だが、まあ一応手は打ってあるから大丈夫だとは思っけだな」

そう言ってチラッと離れたビルの屋上を見ると、そこには僅かながら、こちらを見下ろす影があり、ラグナが見たことで何か小さな合図をしてまた自分のすべきことを続行していた。

それを確認し、ラグナは視線を前に戻す。
すると急に裾の辺りが重く感じられ、何だと思いそちらに目をやると――

「……」

「……どうした？ タツナ」

竜那は何かに怯えているような表情で、小さくて頼りがいのない手でラグナの裾を掴んでいた。その姿は、本当に繊細なガラスのようで、触れてしまったら崩れてしまいそうなほど、弱々しいものだった。

そしてそれは、自分の姿が見えてる彼を、頼っているようにも見えた。

「……怖いかな？」

「……うん」

もし昨日、自分があそこで喰い殺されていれば学校で過ごしているのは『槻汐竜那』という認識をされたあの怪物なのだ。槻汐竜那は自分ただ一人だけなのに、それを誰も気がつかないうちにすげ替えられ、本当の自分という存在がなくなっていく。

これが、自分が認識できていなかった現実なのだ。

それは、彼女がようやく自分の身に起きていることを自覚するのに十分すぎる光景であった。

「馬鹿だったなあ……ようやく自分が誰からも見てもらえない

つていう怖さが、今頃来た」

自嘲の笑みでそう言い、僅かに裾を握る力を強くする。

「……あたしもう、みんなに会えないのかな？」

「……………」

「だったら……寂しいな」

「……………！」

それでも、彼女は泣こうとはしなかった。

普通ならば此处で泣きじゃくってすつきりすればいいんじゃないか。

そう思っていたが彼女は掴んでいる裾の握る力を強くするだけで、必死に堪えるだけだ。

泣いても仕方がないくらい、まるで分かっているような――

「……あたしは自分の将来なんて考えたこともない今を大切にすること、という今時の若者みたいな考えをしてただけだし、こうして誰にも忘れられて覚えてもらえなかったとき、あたしは気が付いた」

突然冷静な口調で話し始めた彼女に、ラグナは黙って耳を傾ける。

「もし死んじやったら、あたしのこと誰が覚えててくれるの？ わたしは死ぬときは、誰かが寄り添っていて欲しいと思った。人生にセーブポイントなんてないんだから……」

すると裾から手が離され、前に出た竜那がくるつとこちらに身体を向けて先程と打って変わって明るい口調で喋る。

「なーんて、受けおりみたいなことを言ってみたりしました〜！あ、でもでも！ 昨日イケメン野郎を何とかすればまだ希望はあるんだよね!？」

「え？ あ、ああ、まあ、無いとは、言えないな」

突然の急変ぶりにラグナはついて行けずつい曖昧な返事を返してしまう。

しかし竜那にとっては十分プラス思考にはなったのか、何故かフンフンと気合いを入れるかのように拳を何度も前に突き出し、

「じゃあそうと決まればしゃっしやとイケメンカモーン！ ラグナがあなたをけちよんけちよんにしてくれるから！」

「おいおい待て待て、此処で戦ったらまずいつて！ そして変な挑発を送るんじゃないやねえっ。それに奴は大体夜に行動することが多い。だから出てくるのを待つしかねえ」

「え？ ええ〜そうなの？」

「お前ももう少し自分の状況整理しやがれ！ たくつ、これだから子供は……」

子供、その単語に反応して竜那が喰ってかかる。

「子供じゃないもん！ これでも今年17だもん！」

「……タツナ、あんな」

ラグナは何か諭すような表情でポンと竜那の頭に手を置き、

「お前くらいの女子はどうしても見栄を張ってしまうんだ。大人に

なりたいという願望が自分がまだ幼いと言うことを幻想に仕立て上げ、誤魔化そうとするんだ。でもな、大人になるってというのは自分がどうやって生まれて来たかを知ることだな――」

突然、視界が暗転。気がつけば鼻の辺りがじんわりと痛い。

「何気に変態セクハラ発言してんじゃないわよ！ あたしは確かにこうして幼児体型のロリロリだけど、これはステータスなの！ あたし17歳OK？」

「……鼻痛い」

殴られた鼻を押さえ、ラグナは若干涙目で頷いて了解する。それを見て満足した竜那はまた彼の手を引いてどこかに行こうとする。

そういえばさっきから彼女はやたらと自分の手に触れてくる。自分を認識してくれる唯一の人間だからか、それとも繋がりを求めているのか。

この感覚は、前にもあったことを彼は思い出していた。それから何故かこの少女の手が温かいと、思ってしまう。

そして彼は彼女に希望を持たせてしまったことをすぐに後悔することになる。

「そついえばラグナってさー」
「ん？ 何だ？」

町の雑踏の中、隣を歩いていた彼女がふいと質問をする。

「この仕事って長い方？」
「……俺はまだ23だから。確か所属してから七年くらいか」
「ふーん、七年も……え？」

突然竜那は足を止め、すぐさま逆算すると驚いた表情で不思議顔を向けているラグナに顔を向けると、

「つてことは16歳の時からやってるの！？」
「まあそついうことだ。因みにティトとは五歳からの付き合いだ」
「こんな馬鹿ともう二十年近くになるのか。時の流れは速い」
「ああ？ 誰が馬鹿だコノヤロー」

ティシュトリヤの言葉に不機嫌そうな顔をしたラグナは歩くのを再開し、竜那もすぐに追いかけるようにして隣を歩き始める。

「じゃあラグナは何でこの仕事をやってるの？ あと聞いてなかったけどオリソンテって何？」
「いきなり二つも質問すんなよ。ええつと、俺がこの仕事をやってる理由か？」

ラグナは顎に手を添え何か考えるようにした後、口を開き、

「オリソンテ創世人っていうのはな、この世界で言えば神か精霊みたいなものだ。通常彼らは姿は見えないが個人の能力と『マナ』の量で契約者を決め、そして契約ができた者は『契神者（コントラクター）』」

と呼ばれて兵士や魔術師よりも強大な――」

「ってちよつちよつちよつ！ 仕事をしている理由は！？ って『マナ』って何！？」

いきなり二つめの質問の返答をしてきたのでついツツコンで見たが、また新たな単語に反応し、しかもどこか聞き覚えのあるものだったのでそれを聞いてみると、

「ん？ 『マナ』っていうのは万物に宿る力のことだ。特に生物には多く宿る。俺たちは通常それを『魔力』って呼んでる」

「ま、魔力？ もしかして魔法とかに使うアレ？」

「ああ、そうだが？」

「……もしかしてラグナって魔法使える？」

「使えるけど……？ どうした？」

まさか、今日の前にいる青年が魔法を使えると言ったらどう思われるであろうか？

普通は信じずに突き飛ばすか笑い飛ばすかのどっちかであろう。

竜那もそれは例外ではない。

ここに来て彼の属性が兵士、精霊憑きと異様なもののなのにここに来てさらに魔法が使えるというのが付属してきたのだ。

「いやーそれはさすがに嘘でしょ？」

「まあ、普通こんな人がたくさんいるところで使っちゃいけねえし、派手だから証明はできねえが、昨日俺とお前も護った防壁があったる？ あれも一種の魔法みたいなもんだ」

「あ……」

言われてみれば確かにあった。

昨日化け物が死に物狂いで自分に突進してきて、そして蒼く透明

な防壁に阻まれて絶命したのを。確かにあれは硝煙臭い彼とはまったく反対の神秘的なもので、それを魔法だと言われればそうと納得せざる終えない。

「じゃあラグナって、どんなのが使えるの？」

「さすがにそこまで教えるわけにはいかない。禁則事項だ」

「ケチ、やっぱ嘘なんじゃないの？」

「俺は事実を述べてるだけだ。そして教えられる範囲は此处までだということ」

そう言って口を噤んでしまい、竜那もこれ以上聞くのは無意味だと思ったのか、それ以上は聞かなかった。

太陽が夕陽に切り替わる頃、竜那はトイレに行きたいと言ったのでラグナはビルの外で待っていた。

しかしやはりというか、あの少女の存在を認識していないのか、すれ違う人間は彼女にぶつかりそうになるので彼女はいちいち避けながら向かっていくのがこちらからでも分かった。

「……お前の考えていることは分かるぞラグナ」

「何だ？」

頭の中で凛々しい女性の声が響き、ラグナは返事をする。

「もし、あの娘の認識が戻らなかった場合のことを考えているのであろう？ 相も変わらず情が脆い」

「……」

「ただしそれにはリスクを伴う。だから彼女をどうにかして此処に残そうとしている。だがそれがいいのかどうか確証を得ることができず、困惑している」

ラグナは暫く黙っていたが、やがて、

「ああ、だがその答えを見付けるのは、この任務が終わってからだ。そしてその時のあいつの意見も聞かないと、判断が付きづらい」

そう本音で答えると、ティシュトリヤも答える。

「お前は、だいぶ変わったな。だが己の感情のみで任務遂行は味方にまで影響を及ぼすのを忘れるな。そんなことをするのは愚行の極み。常に冷静に、最優先順位を考えろ」

「ああ、それは分かっている——おっ？」

仕舞っていた通信端末が竜那のいなくなったタイミングで鳴っていることに気がつき、それを取り出してスイッチを入れると、スピーカーから声が入ってくる。

『よおケイル4。デートは最高ですか？』

「……ホーン3か。私語なら切るぞ」

『とつとつ、冗談だ。さっきファング8から連絡があつて、あの人間の振りした化け物に動きがあつたそう。全員どつか消えてしまつたらしい』

「！ とういうことだ？」

『それは現時点を持って調査中だ。気を付けてくれよ。何しろお前

大将の手を切ったんだろ？ それに敵の狙いもあの可愛娘ちゃんなんだから警戒を怠らないでくださいよ二佐殿」

「最善は尽くすつもりだコノヤロー。それよりもそつちも気をつけろよ。いよいよ相手が動き出した可能性がある。全員バラバラにならず固まっているよう伝えてくれ」

『了解』

そう言い、スピーカーから声が途絶える。

ラグナは端末をしまい込み、少し不安げな表情で眉間にしわを寄せると、

「そろそろ、タツナが狙いつてことで正解らしいな」

「肯定。相手が慌てているのがよく分かる。だがまだ確信の領域ではないな」

「どちらにせよさらに警戒が必要だな」

そう言い終えると丁度トイレから竜那が帰ってきた。

「ふい〜お待たせ〜」

「よお、お帰り」

「あ、そういえばトイレで考えてただけだよ〜」

何か少し頼み事があるかのように少しもじもじとし、ラグナは怪訝な顔になる。

「何だ？ 用件があるなら聞け」

「う〜んつとね、この服装じゃいろいろと動きづらいから家に帰って着替えたいの。それに家族の様子も見たいし……」

「ああ何だ。今から行くと暗くなるが俺がついてるから大丈夫だ」

「うん、ありがとう!」

竜那からの精一杯の笑顔での礼。

それを見たラグナは、心のどこかで突き刺さるような罪悪感に見舞われる。

任務の優先順位では、彼女の命より敵の殲滅が優先。

もし彼女が命の危機に瀕したとき、自分は冷静に対処できるのであろうか。

最近、そういう任務が無く単純に敵の殲滅に徹してきた彼にとって、辛いことだった。

彼もまた人間、そして兵士と呼ぶにしては、まだ心が未熟な部分もある。

結局は戦闘能力だけで買われたような一個人に過ぎないのだ。

ああ、どうして俺は、こんなにも罪悪感があるんだろうか。

その答えは、すぐに見つかる。

陽が沈み始め、人の行動が疎らになってくる時間に、二人は住宅街を歩いていた。

町からは歩きで三十分以上かかってしまったため竜那は制服が暑く感じられ、さっさと着替えた気分であった。一方、ラグナの方は涼しい顔をしており、どうやら着込んでいる戦闘服に何か小細工

を施されているのであろう。そんなこんなでようやく家が見え始め、
ゴールが見えた竜那の表情が明るくなる。

「おっ、見えてきたな」

「うっやつとお家見えてきたー」

「俺は外で待つててやるからちやつちやと着替えてこいよ」

「うん……あつ、そういえば……」

ふと何かを急に思い出したのか、竜那が足を止めたのでラグナも
釣られて立ち止まる。

「どうした？」

「いやー、あのね？ 昨日ラグナが何かしてあたしを眠らせた記憶
があるのよ」

「……で？」

「だから眠っている隙に何かいけないことしてるんじゃない、って思っ
たけど真意はいかが？」

「……誰がお前みたいな子供襲うんだよたくつ、安心しろ、た
だお前を肩に担いだだけだ」

「えっ、お姫様抱っこじゃなくて何死体のような運び方しちゃって
るわけ？」

「るせえ、そっちの方が運びやすかったただけだ」

二人のそんな会話が繰り広げられる中、不意にティシュトリヤが
何かに気がついたようにソツと耳を傾けていた。

何かが、こちらに近づいているような。

これは、いつも感じてきた気配だ。

何か遠い雷のような、体中に絡みつく雑音のような、そんな感覚。

そしてその気配が大きくなるにつれ、確信へと変わる。

「ラグナ！」

「分かつてる！」

不意にラグナは制服だった服装を戦闘服に切り替えると左手で竜那を自分の背後に隠し、右手で腰のホルスターから大型拳銃を抜き取るとそれを前方の方に向ける。

竜那は突然のラグナの戦闘態勢の入り方に驚いたのか、ポカンとした表情でその背中を見ていた。

だが彼女にでも分かるくらい大きな殺意が前にあることに気がつくと思いを飲んで黙る。

体中に染み渡る感じたことのない感覚。それは大きすぎる恐怖。

「そういえば、ここに一人ロリコン野郎いんの忘れてた」

「どうした？ 随分我慢というのができないようだな？」

二人して前方にいる気配に向かって話しかけると、やがてそれが地面からぬつと出てくるように姿を現し始める。最初は黒いゼリー状だと思ったが、やがて人の形をとり、黒以外の色も入ってきてだんだん絵になつてくるとスーツ姿の顔立ちの良い男へと変わっていく。

「我慢？ それをしていたら君たちはその子を手の届かないところに置くんじゃないの？ それともそうしていたら君たちは何かしてくれるのかい？ だれどご生憎そんなものいらないし、僕の計画を邪魔するから気分は最悪だよ」

そう言い、完全に地面の上に立つと相変わらずの微笑み顔でひらりと切られたハズの手をファイファイと軽く振って見せ、

「それに凄く痛い目にもあったしね。すごく、すごく痛かったし、僕の可愛い下僕達も殺されちゃったし、もう何もかもぶち壊したい気分だよ」

「自分で勝手に自滅でもしてろよ。それで全部終わるぜ」

「楽しいジョークをありがとう。だけど君には、戦う以外での恐怖をプレゼントするつもりだから、たのしみにしてね？」

そう言つて形相を突然凶悪に変えるとその場の空気が一気に軋み始めたかのように耳鳴りが酷くなる。昨日と違い、相手は油断を一切していない。なので昨日のように撃退だけではすむことはないであろう。それに人間に化けている怪物達の動向も気になる。だがそのためには目の前の敵を倒さなくてはいけない。

そう、今回は護るべき少女を背中に。

こんなことは、初めてだ。

そう思いながらも誤発を防ぐために伸ばしていた人差し指をトリガーにかけ、戦闘態勢にはいると、

「タツナ、これより護衛の任としてお前を守護する。俺から離れるなよ」

「う、うん、分かった」

「よし、ティト、準備は大丈夫か？」

「問題ない」

「じゃ——逃げろぞ！」

「え？」

そう言つて左手で軽々竜那を持ち上げると、くるっと回つて走り去り、そして人間にはありえない跳躍を試みせると軽々と民家を乗り越える。

そして屋根伝いに走つてもう一回跳躍。担がれている竜那にとっては絶叫系のアトラクションに匹敵するほどの恐怖であつた。

「ちよつ！？ 何で逃げるの！？」

「馬鹿野郎！ あんなどこで戦つたら周りに被害が出る。昨日は傷を負わせられたから被害は最小限だったが今回の相手は本気だから広いところに行く！」

そう言つて着地し、また思いつきり跳躍をする。

そして走り続けること三分。驚異的な速さで向かつた先は——
学校のグラウンドであつた。

「え？ ここあたしの通つてる——」

ここは竜那の通っている高校で、今は時間帯が時間帯なので誰もいない。

そう言っている間にもラグナは着地し、竜那を下ろして少し休憩するように大きく息を吸い込んで深呼吸をする。

たしかに此処ならば多少暴れてもグラウンドが荒れるだけで人的被

害は出ないであろう。

「やあ、随分遅かったね」

つと不意に前方にいつの間にかあの男が立っていた。

「ここが君の決めた墓場かい？」

そう言って口だけをつり上げ、目は睨み上げるようにしてみる。
するとラグナの方も楽しげににやっとして見せ、

「さあ、お前の墓場かもな！」

ようやく戦闘態勢に入り、竜那を背中護りながら、二丁の大型拳銃を取り出し、ピタリと照準を合わせ、

「やるかテイト！」

「獲物に食いついたからには、もう逃がしはせんぞ」

そう言っと思いつきトリガーを引き絞り、無音に近い乾いた音を響かせた。

04話：エンリル

大型拳銃から発射された初弾が唸りを上げながら空気を突き破って直進する。

それを男が優雅に身体を反らして簡単に回避をする。

「おつと危ない。せめて自己紹介くらいさせてくれないんじゃないか？」

竜那は相手がラグナの正確な射撃をいとも簡単に避けたことに驚き、ラグナはやっぱりなと言いたげな表情するがそれでも銃口は下げず、今度は唐突にトリガーを何度も絞り、狙いは特に付けず驚異的な連射によってほんの五秒で男の位置が土煙に覆われる。

だがその煙も中から薙ぎ払われた手によって掻き消され、そこか

ら無傷の男が姿を現す。

「フーン、どうやらそれくらいしか芸がないのかい？ では改めて自己紹介をするよ？」

そう言ってパンパンと手を軽く叩いた後に、

「シウテクトリ、これが僕の名前。ところで君の名前は？」

「答えたら何かくれんのか？」

「……それもそうだね。聞こうが聞かまいが結果は同じだもんね」

そう言っけゆつくりとシウテクトリと名乗った男は二人に近づき始める。

ラグナは間入れず相手に銃弾をくれてやるが近距離にもかかわらず相手は最小限の回避で銃弾をあっさり避け、徐々に距離を詰めていく。

「どうしたの？ こんな弾避け遊びじゃ僕を殺せないよ？」

自分が二人を追い詰めているのが楽しいのか、時には手で弾丸を弾くなどの芸当を見せ、嬉しそうな微笑みの表情のまま距離を詰めていく。

残り五メートルほどになるとさすがに後退しなくてはと判断したラグナは竜那に下がるよう言い、二人で同時に後ろに下がり始める。

「ふふ、また逃げるつもりかい？」

「ご生憎此処以外で戦うと後が面倒なんで逃げる気なんかねー……
つとー！」

ここで再びラグナの乱射。土煙がまた相手の周囲を包む。

「何だい？　これで僕の視界を奪ったつもりかい？　無駄無駄」

そして再びシウテクトリは手で煙をあつさりと振り払——拳銃
とは比べ物にならない速度の何かが左から突然近づいてきたのです
ぐさま顔を横に動かす。

すると頬の辺りがザツクリと切れ、

「……なっ」

頬の皮がべろんと剥がれるとそこには白い皮膚ではなく逆の黒い
皮膚のようなものが露わになり、それが切っ掛けとなって顔半分の
皮膚が崩れ、黒い瞳も姿を現す。

シウテクトリは自身が傷ついたことにも驚いたが、急いでラグナ
の方を見ると自分の顔を崩した武器など持つてはいない。しかも攻
撃は彼からではなく横から来たのだ。

そしてラグナを睨んだまま、

「……仲間がいたのか？」

「……外したか、一発勝負だったんだけどな」

「え……？」

竜那は驚いてラグナの方を見ると、ラグナは相手を睨んだままで竜那抱きかかえるとそのまま後方に思いっきり跳躍をする。するとそれが合図となり、一掃射撃がシウテクトリの周辺を暴れ、大規模な煙幕をそこに張る。

なるほど、二度目の乱射はこれを気づかせないための罠か。

一度目であえてやってみせ、二度目も無駄な行為だと思わせて隙を突く。

相手は思ったよりやってくれるタイプ、だけど僕の方がそれを上回ってみせるさ。

そう煙幕の中で思い、擦過傷のできた頬を拭うようにすると皮膚が元の状態に戻る。

それから急に煙幕の中の影が急に膨れると何かが分離し、幾重にも重なった唸り声が煙の中を支配し始めた。

「うわっ！　ちよっちよっ！」

一方ラグナに抱きかかえられた竜那は今、丁度地面の上を滑って減速している揺れに驚きながら慌てており、そして敵から100メートルほど離れた地点で停止すると下ろされ、そして煙幕の中を見る。

「……ねえ、今のつて」
「ああ、俺の仲間達だ」

ラグナは一斉射撃をしてくれた何者かの正体を言う。
それに対して竜那はなぜそれを言ってくれなかったのかについて
問い質そうとすると先にラグナが答える。

「すまん。だが敵がもし俺たちを監視していたときのためにこうする
しかなかったんだ。だからお前にも話さなかった。それは詫びる」
「おお、いい、無事か二佐殿！」

不意に上から声。

すると月明かりに照らされた四人ほどの影が次々と後ろの建物から
飛び降り、ラグナ達の周辺で次々と着地を決める。

「あつぶなっ！ もう少し気をつけて落ちてこいよ！」
「それよりも作戦通りこの場に待機し奇襲は掛けた。だがあの程度
で倒せたら今までの戦いは苦労していない。指示を」

竜那は突然舞い降りてきた黒づくめの男達に驚いた表情で見廻し
ており、

一人はラグナと同じ二十代くらいで今は後ろに一纏めにポニーテ
ールにしている若い男、

一人は三十代前半ほどで髪を短く切り込んだ強面な男、
一人はやや長めの髪で日本人に近い顔をした若い男、

そして最後はガツシリとしたいかにも工事現場にいそうな体型の
若い男で、全員ラグナと同じ黒いボディースーツを纏っており、背中
にはそれぞれ火器らしき装備を背負っている。

「おおっ、映画みたい」

「いやー初めましてタツナちゃん。俺はホーン3のコールサインを持つルーグ三尉って言っただけど」

「あ、初めましてー、このたびはお世話になって——」

「茶番は後にしろ！」

竜那の危険発言とルーグと名乗ったホーン3の自己紹介に対し、クロー2が渴を飛ばして黙らせると、ラグナは全員にすぐ指示を出す。

「これから応戦に入る。戦闘に参加するのはホーン3、ファング8、レッジ9で俺を合わせた四人だ。クロー2は竜那を非戦闘領域まで待避させてくれ！」

「「「「了解」」」」
ラジャー

「えっ、ちよっラグナ！」

「タツナ殿、此处は待避を」

急にラグナから引き剥がされることになった竜那は困惑の表情が隠せず、そのままクロー2に抱きかかえられ、さよならの挨拶も言わずにその場から人離れた跳躍で戦場を離脱していった。

それを見送った四人はすぐさま前方の煙幕の方に視線を移す。

「ヒュー、二佐殿も捨ておけねえな。結構懷かれてんじゃないですか？」

「今はそれどころじゃねえぞ。お前足引っ張ったらアカトル三十本おごらせっからな！」

因みにアカトルとは彼が愛用する嗜好品で、主に子供が食べる白い棒状のお菓子である。

そして今持ってきた分を切らしてしまったため若干口元が寂しい

気分である。

「そんなに安く済むんだったらいいんですけどね」

「……出てきましたよ、それも大量に」

ファング8がボソツと呟き、そしてレッグ9の言葉通り、煙の中からは昨日と比べ物にならないほどの数の狼のような化け物達が溢れかえっており、まるで餌を抜かれた猛獣の如く、獲物と定めた四人の姿を炯々とした瞳で捉えており、そしてその中からシウテクトリがゆっくりと現れる。

「おや？ あの子を逃がしたのかい？ それは困るねー」

対して困っていないような様子で肩をすくめ、残った四人を観察するような目つきで見据える。

それからゆっくりとした動きで右腕を持ち上げ、周りにいる下僕達に向かって静かに、あの四人に何をすればいいかを告げる。

「殺せ」

そう告げた瞬間、マラソン大会が始まったかのように一斉に化け物達は互いを踏み潰さん勢いで四人に向かって突っ込み、その圧倒的な漆黒の波を見据えながら、殺戮対象となった四人は各自何をすべきかを行動し始める。

「さて、数は多いけど――」

そうホーン3ことルীগ三尉が背負っていたアンダーバレルと呼ばれる銃身を取り付けた小銃を構え、

「火器も何もない敵兵がゾロゾロ突進してくるだけで――」

ラグナは両手に握った大型拳銃のトリガーに指を掛けて構え、

「武装をした我々との火力の差が――」

フアング8がポンプアクション式のショットガンのポンプを前後させて弾丸をセットし、

「大きすぎる」

最後にレッグ9がサイレンサーを付けた短機関銃を構える。

そして黒い群れを十分引き寄せ、それぞれが射撃準備を終えるとラグナから命令が下される。

「狙いはしつかり、殲滅せよ！」

「了解！」

武装した兵士四人とたかが四十弱の突進しか脳がない怪物とでは、どちらが勝つのかは目に見えている。

まずホーン3のグレネードランチャーが火を噴いて群れの中に手榴弾が突っ込み、爆発と生成破片をお見舞いし、ラグナのピンポイント射撃で胸と頭を撃ち抜いて前のめりに倒し、フアング8のショットガンの広範囲射撃が近い順からズタズタのボロ雑巾に変え、レツグ9の横薙ぎの射撃で多くの敵が射抜かれる。

「へえー」

シウテクトリが感心の声を上げた視線の先に、もう立っている化け物達はいなかった。

そこには多くの死体が築き上げられており、その先には硝煙の臭いを纏う四人の兵士がいるだけである。

「さーで、どうすんだ？ お前の可愛い下僕達はみんなくたばっちゃったぞ？」

「気をつけるラグナ、奴はまだ何か隠し持っている筈だ。他のみんなも」

「分かってる」

ティシュトリヤの忠告を受け、ラグナは返事を返してから銃口を相手に向ける。

「おつ、警告ありがと姉さん」

「忠告感謝します」

「最善は尽くすつもりです」

そして他の三人もその忠告を受け、より一層警戒心を高め、銃口を狙い変わらず向ける。

その時シウテクトリは違和感を覚えた。

今さっき、残りの三人は明らかに”創世人”の声を聞き取って返事をしていた。

なるほど、じゃあ残りの三人は――

（なるほど、その可能性があるとすれば、今このまま戦うのはマズいな……）

「そうか、だけど僕の可愛い子供達はまだまだ――」

ラグナに応えるかのように、シウテクトリは身体に少し力を入れるようにすると、途端身体全体からボコボコと泡のように黒い物体が湧き上がり、それがある程度大きくなると分離し、身体から離れて地面に着地すると、みるみるうちに先程の化け物達へと姿を変えていく。

「うげっ、気持ち悪っ」

ホーン3の素直な感想。

そして化け物達はまた彼の周辺で蠢き始め、主人に楯突く相手に

向かって吠え始める。

すると下僕の召還を終え、一息ついたシウテクトリは、

「さーてお前達——この場は任せたよ」

と、いきなり背中を見せ、何と——逃げた。

「！ なっ……！」

敵の予想外の行動に四人は驚愕の表情で立ち尽くす。

何故この場面で逃げ出したのか。戦力差を考えて逃げていったのだろうか。

いや、それは断じて違う。奴が何の考えも無しにこの場を待避するわけがないのだ。

「奴が何か考えているに違いない！ 俺が追いかける！ 任せられるか！？」

「了解！ さつさとして倒しちゃいな二佐殿！」

「この場は我々だけで制圧が可能ですのでどうぞ！」

「入隊したばかりですので是非手柄を立てさせてください！」

ホーン3と残り二人の了承を得たラグナはすぐさまシウテクトリが逃げていた方向——化け物達の群れに向かって疾走すると突っ込む前に大きく跳躍。眼下に黒い絨毯が広がる中、見事に飛び越えると再び足を付けて跳躍し、学校グラウンドを飛び越え、

「テイト、奴の位置分かるか？」

「大丈夫だ、そのまま12時の方向に進め」
「了解」

ティシュトリヤの索敵能力を信じ、ラグナは三たび大きく跳躍し、静寂が支配する町へと飛び降りていった。

「ラグナ……大丈夫かな」

一方、クロー2のコールサインを持つ兵士に抱き抱えられたまま夜の町を飛び回っている竜那は不安げに呟く。それに反応したのか、

「タツナ殿、それなら大丈夫だ。彼は若いがプロだ。私は彼が入隊している時から所属しているが、彼の強さは想像を凌駕する」

安心させるかのようにクロー2はそう言い、竜那はコクンと頷く。それから、

「ねえおじさん……」
「なんだ？」

「ラグナが……この仕事をしている理由って知ってる？」
「それは……」

竜那からの急な質問に、思わず黙り込む。

「……何か深刻な理由なの？」
「……その話は今の状況では明かせん。だが……」

そして彼は竜那の顔を見るように顎を下げ、

「今は、彼を、我々を信じてくれ。君の存在がまたこの世界の人々に見られるよう、我々は最善を尽くのみだ」
「……ありがとうございます」

そう、竜那は笑顔で応え、クロー2の方も微笑む。
だが、戦場の勘が突如働き、民家の上で走るのを止めると竜那を下ろし、振り返って背中に隠すようにしながら拳銃を抜いて振り向く――

「……此処にもいたのか」
「あ……」

二軒ほど離れた民家の屋根の上に、一体の化け物がこちらを見て

いた。

同時刻、ラグナの方も屋根の上で立ち止まっていた。

その理由はもちろん、殲滅目標であるシウテクトリを見つけたからである。

その相手は今、ラグナから一軒ほど離れた屋根に佇んでおり、まるで逃げたのではなく彼を待ち侘びていたかのようにしていた。

「……何のつもりだ？」

ラグナは睨むようにそう言い、銃口を向けて圧力を掛けるようにする。

「なーに、ちょっとサービスで君に教えたいことがあってね」

シウテクトリはそう言い、唇に軽く指を当てて子供のように笑う。それは一見無邪気なように見えるが、心の底では殺意とプレッシャーが垣間見える。

それでもラグナは微動だにせず、ただの時間稼ぎだと思い、トリ

ガーを引き絞ろうとする。

「待ちなつてせっかちさん。僕だって今すぐ君をグチャグチャにしたいけど、あの子を狙う理由が知りたいんだろ？」

「……！」

その言葉に僅かながらラグナの表情に変化が生まれ、それを機に彼のお喋りが始まる。

「素直でよろしい。では言うよ。僕があの子を狙うのは彼女が『ノイレヴェン』だからだよ」

「……！」

「ノイ……レヴェンだと……？」

彼の発した言葉にラグナは驚愕し、冷静の筈のティシュトリヤでさえ困惑の色を隠せない。

シウテクトリは二人のそんな反応を楽しみながら続ける。

「そう、正しくはノイレヴェンになれる可能性がある人間だよ。この町は妙で、影響を受けやすいのかそう言った若い子達が少数ながらもいてさ、でもその力に気がつかず一生を過ごさせるなんてもつたいないだろ？ だから僕は利用するために彼らの存在を奪った」

「奪つて……お前の下僕に置き換えたのか？」

「ご名答。そして僕の計画では全部で七人ほどの人間が必要だ。でも彼らは君と同じで素直に聞かない愚かな生き物。だから記憶も存在も忠実な僕の下僕に置き換えたのさ」

「置き換えて……何をするつもりだ？」

ラグナは息を飲み、核心へと迫る。

シウテクトリはその言葉を待っていたかのように、にたりと笑う

と、

「僕の世界を作るためだよ。じゃあね。君はあの子に随分気に掛けてたみたいだから——」

「”歪み”を広げるのが目的かコノヤロー!？」

ラグナは間入れず銃弾をぶっ放すが、相手はいつも通り軽く避け、

『戦い以外の苦しみて奴を、いよいよ公開してあげるよ』

そう言つて全身がいきなり黒ずむと屋根に融け込むようにし——
—そこには最早シウテクトリではなく、ただの化け物がラグナに向かつて一直線に突っ込んできていた。

「!」

ラグナは突然の変化に動揺せず寸分変わらず額に銃弾を叩き込むと、その場で崩れて死体へと変えさせる。それから相手が消えたと頭が理解し、かつてないほどの焦燥に駆られる。

「あいつは……どこ行きやがったんだ!」

「落ちて着けラグナ! 冷静に」

「……まさか……タツナのところに!」

その焦燥が、確信へと変わり、ラグナは相棒の声も聞かずに急いで竜那が向かった方向へと走る。

とにかく、怖かった。

少しでも、自分と関わってしまい、そして失うのが、怖かった。
どうしてあいつが、どうしてこんな目に、どうして死ななくては
いけないのか。

あいつは普通にいる人間で、ただの少女で、でもどこか違う不思議な奴で。

そんな奴がどことも知れないクソ野郎に喰い殺されて、何もかも失わせるのか。

久々の、誰かを失おうとする恐怖。

それは間違いなく、自分より弱い存在だった。

その弱い存在が見せてくれた、強さと手の温もり。

それを失う恐怖が、彼を掻き立てる。

（待ってるタツナ！）

最早、自分のやるべき事は決まった。そしてラグナは夜の町を疾走していった。

クロー２は道路の上で仰向けに倒れ、身動きが暫くとれないほどのダメージを受けていた。

それは先程、こちらを捕捉し、向かってきた化け物に銃を浴びせようとした刹那、それがいきなり四人と交戦中の筈の使徒に置き換

わり、銃弾をごくあつさりと避けると細い腕ながらもまるで巨大な鉄槌で横からぶん殴られたかのような威力で意識が飛びそうになり、弾き飛ばされて今はこうして体中の神経が痺れていた。

もしこのスーツの衝撃吸収能力が並であつたら、自分は既にあの世行きである。

（うかつだった……まさか奴は……こんな能力を持っているなんて……）

相手の能力は自分の下僕と立場を交換する能力。
なるほど、どうりで二佐の索敵から逃れるはずだ。

しかし今はそんな呑気に敵の能力の分析をしている場合ではない。

（タツナ殿が……タツナ殿が……）

身体を弾き飛ばされている最中、彼の眼には一つの光景が焼き付いていた。

それは、彼女が奴に首を掴まれ、易々と持ち上げられ、それなのに彼女は自分に向かって何かを絶叫しながら、連れ去られていった光景を。

彼女は恐怖でも何でもなく、助けを求めたわけでもなく、ただ単に自分のことを心配して叫んでいたのだ。

（連絡……しなくては）

すぐに彼女を救出しなくては、そう思い、手を通信機をしまっているところに伸ばそうとすると、急に誰かが上から降ってきた――ラグナであった。

「大丈夫かクロー２、いや先輩！」

「二佐か……だが俺は動けなくなっているだけだから……タツナ殿は１１時の方向だ……それと奴は……下僕と立場を交換する能力をもつてやがる……」

「ああ、今さっきあんたを発見して他の三人に連絡を入れといた。すまないがこのままちよつと此处にいてもらうから！」

そう言つてラグナは素早く身体の状態を確かめてから骨折や大きな出血がないと判断すると敬礼を済ませ、再びその場から疾走を開始した。

あんなに慌てた奴の顔は、久しぶりだな。

そう思つて、彼は意識を失った。

市街地と住宅街の丁度あいだに、廃墟となつている一際高いビルがそびえ立っている。

そのの屋上から見る景色はこの町を一回り見下ろすことができ、今は静まりかえろうとしている町並みがよく見えた。そして高いので、時折強い風が屋上内を駆け抜けていく。

竜那はここで意識を取り戻し、それから辺りを見渡すとすぐ側でシウテクトリが立っていた。

彼女は殺されると思い、恐怖で逃げ出す素振りを見せたが、彼は特にそれを気にも留めず好きなようにさせた。どうせ屋上の鍵は壊れている。

非力な彼女では此処から逃げ出すことはできないのだから。

それを知ったのか、竜那は必死で逃げ出そうといういろいろ試みたがついには無駄だと悟って屋上の隅で蹲ってしまった。

蹲ってから数分、町の方で何か奇妙な現象が起こっていることに気がつき、それを眺める。

「なに……あれ？」

暗いはずの町並みの中で、何か青白く光っているものが小さく映っている。

それは、このビルをぐるりと囲むようにしており、その数全部で六。

「あれは存在を置き換えた僕の下僕達だよ。彼らは特別でね、僕の世界を切り開く鍵の役割をしているんだ」

いつの間にか側まで来ていたシウテクトリがそう言い、

「それと彼らは今は誰にも触れられやしないさ、この僕でもね。さて、始めようか」

そして無理矢理竜那の首を掴んで持ち上げ、

「ちよっ！ 何すんのよ！ このロリコン野郎！」

竜那がじたばたと暴れるのも構わず、シウテクトリは屋上の上まで歩いていくと、

「黙ってるよ。僕は今機嫌があまり良くないんだ。早く死にたくなきゃ大人しくしているよ」

その声の奥には、言葉では尽くしがたい怒りが見え隠れしており、それを垣間見た竜那は思わず声を潜める。そしてそのまま高々と持ち上げられ、風が強く吹く中、着ている制服が風に煽られる。

「もう誰もここには来ない。あの男ですら探すのは困難だ。そしてもし誰かが今来ても僕が君を殺す方が早いだろうね。こっやって首の骨とかをさ」

「うっ……！」

首を掴んでいる手に少しだけ力を込められ、竜那は苦悶の表情で息を漏らす。

「でもご生憎ただ殺すだけじゃダメ。君の記憶が詰まったその頭が必要なんだ。この世における完全な君を再現するためには、どうしても必要なパーツだ」

そして彼はソツと微笑み、高々と持ち上げている彼女に尋ねる。

「最後に言いたいことはあるかい？」

そして彼女は先程乱れていた息を整え、視線だけを見下ろして何を言おうか迷ったが、最後に、

「この、ドSのロリコン野郎……」

「……じゃあね、おチビさん」

そして彼の口が大きく、人を飲み込めそうなほど広がっていく。そして首を掴んでいる手が徐々に下げられ、その口へと運ばれていく。

こんな高いビル、もう彼は駆けつけてはくれない。

もう自分は、ここで人生が終わってしまうのであるうか。

まだ自分はたくさんしたいことがあったのに、自分は誰にも覚えてもらえず、ここで死んでしまうのか。

そして彼女の上半身がバツクリと彼の口の中に入った。

生暖かい体温と滑りと湿気がそこにあり、そこは真っ暗であった。ああ、自分は食べられてしまったのだ。

それを自覚するまでに少し時間がかかったが、此処までなんだと

覚悟を決めた。

もう、お終い。これがゲームオーバーって奴なんだよね。

でも、最後に彼が、私のこと覚えててくれた。

みんなが忘れても、彼が最後に私を覚えててくれた。

それだけでも、今は感謝しなきゃ。

変なロリっ子だと思われていたのかな、変なチビだと思われてたのかな。

ああ、でもどんな風に思われても、彼さえ覚えててくれてれば、私はまだ本当には死なないはず。

神様、最期に彼に会わせてくれて、ありがとう。

そして彼女は、この世界と彼への別れを込めて、一筋の涙を、流して、意識を沈めていった。

……ここはどこなんだろ。

もうあたし死んだのかな。

あゝあ、そういえばあのポイントあともう少しだったのに、ちえゝ。

そういえば今年で三段とる予定だったのにそれも潰れちゃった。おゝい、天国ってあるんですかゝ！ などと聞いてみたりする。うゝむ、死んでも結構意識って残るもんなんだね

……うう

此処でなら何か喋っても大丈夫かな？ アスカの体重とかさ。

……うっ……ぐっ

ん？

……ぐっ、ぐっ

何かさっきから、変な音してない？

……うっ、うっ、うっ、

ちよっ、耳が痒い！ 耳犯さないでよ気色悪い！

「うつ、うつ、ああああああああ——！！」
(……え?)

突然のゼロ距離での絶叫。

竜那は思わずそれに驚き、そして急に暗闇から吐き出され、屋上の上を滑る。

「うつづつ！？ ……え？ 何が起こってるの？」

屋上の床に唾液でべとべとになった手をつきながら自分がまだ生きていたことの驚きと、何故シウテクトリが悲痛な叫び声を発しているのかが分からず、混乱する。

「お、お、お、お前——！！」

表情を歪ませ、苦しんでいる彼は喉と後ろ首を手で押さえ、

「お前、一体僕に何をしたんだっ!？」

見ると口からと手で押さえている部分からは赤色ではない血が遠慮無く流れており、明らかに負傷しているのが目に見えた。

「え？ な、何で？」

その予想外の事態に彼女はますます混乱し、一体自分がどう彼に反撃をもたらしたのかが分からない。

しかし今はその答えを探すより彼から少しでも離れた方が得策と考え、急いで屋上の隅へと移動する。

そして今なら届くかも知れない、今なら彼に、と大きく息を吸い込み、

「誰か————!! 助けて————!!」

「っ!？」

竜那の精一杯の声。それは町中に明らかに響き渡る音量であった。さすがのシウテクトリもこれには驚き、傷の痛みを堪えてさつさと彼女を亡き者にしようと近づいた最中——二人の間を裂くように銃弾の嵐が降り注ぐ。

「なっ——！」

そしてシウテクトリが夜空を見上げるその先には——大型拳銃を持った若者が一人。

「あっ！」

その姿はもう彼女にはおなじみの姿。

背が高く、ノリが良くて、時々子供みたいな一面を見せ、目つきの悪いお兄さん。

それは異世界からやって来た兵士であり、階級二佐、しかも精霊憑きな不思議な彼。

「ラグナー！」

「ういーすっ、元気にしてたかチビッコ」

そして三白眼のお兄さんことラグナは屋上に着地し、竜那の無事な姿を確認するとホッと一安心。しかしすぐに敵へと視線を移すと銃口をすぐさま向ける。

一方、シウテクトリは状況を打開しようとするがすぐさま逃げ出して傷を癒してから再び、

——と、逃げだそうとこの町のどこかで潜ませている下僕と立場を交換しようとして、急に彼はビルの周りの空間に弾き飛ばされ、屋上へと叩き戻された。

「なっ——！？ な、何だと！？」

見ると、このビル全体が薄青色の透明なドーム上の防壁に囲まれ

ており、波打つその壁はさながら戦場には似合わない美しい姿を持ち、まるで逃がさないように作られたさながら檻のようである。

それは、昨日、ラグナと竜那を護ってくれた魔法の一種だと言われた防壁であった。

「……クロー２の身体を張つての情報だ。てめえは下僕と場所を交換することができるって言うじゃねえか。どうりでティトの索敵から逃れられるわけだ。だが、だったらこうして閉じこめちゃいいんだよ」

「……くっ！」

「さーてどうする？ 此処から出たきや俺を殺さないといけない」

するとその言葉を聞き、安心したのか、シウテクトリの表情が軟らかくなり、

「何だ、簡単じゃないか、じゃあ是非そうさせてもらうぞ」

そうして傷を負った喉も既に修復を終え、万全の状態を整え始める。

「——いよいよ、これでどつちかが死ぬまで終わらなくなつたな」
「ラグナ……」

敵が戦闘準備に入る最中、竜那は不安げに彼の腕をソツと掴む。

怖い、というのが掴まれた手から伝わってくる。

ラグナは正直ここで彼女に生きてて良かったと言いたかったが、それはこれが終わってからにしようと思い決めた。

代わりに、彼女に優しく声を掛ける。

「タツナは、お前は此処から極力動くなよ。お前を逃がしたいのは山々だがそれをしてたら相手にも逃げられてしまう」

「うん、分かったよ」

「よし、ティト、『エンリル』を出してくれ。奴にはライフル並の銃弾しか効かない」

「了解」

そして彼は後ろ腰のホルスターに大型拳銃をしまい込むと、両手を自然体にだらんと垂らす。

すると竜那が瞬きを一回する間に、既に彼の両手には違う武器が握られていた。

形状は鎖に繋がれた青く輝くオーラを纏った大型のナイフ二振り。そしてその鎖は丁度彼の肘から生えており、生えている部分も若干蒼く光っている。

さながら、銀色の刃に清き光を纏わせた聖剣を思わせる。

「……エンリル？」

竜那はもう一度その大型ナイフの名前を呟いてみる。
するとラグナがこくと軽く頷き、

「これがティトが持っている唯一無二の神具だ。これで銃で戦うよか安全な戦い方ができる」

そして彼は一度切れ味を確かめるようにナイフ同士をぶつけて火花を散らさせ、しっかりと柄を握りしめると左はそのまま右手の方の刃を逆手に持ち相手の行動に対応した構えを取る。

「さーてアカトルも切れたし、ロリコン野郎はいるし、じじい共には面倒な任務押しつけられるしもう最悪だ。絶対逃がさねえからな！」

そして金属音を響かせ、腰を入れると殲滅すべき敵を睨み付ける。

それは完全に愚痴を言っているようにしか見えなかったが、その時の彼の背中では、竜那が見ても本当に、戦士そのものの覚悟を決めた姿であった。

05話：透明だった彼女

竜那は戦いのは始まりを肌で感じ取っていた。

今、目の前で護るように立っている背中からは、最早自分が知る彼はいない。

いないが、先程と何か違う強い意志のようなものでこの場に立っているのだ。

「エンリル……？ 聞いたことはないな」

若い故に、自身に蓄積された情報から該当するものがなかったシウテクトリは笑みを浮かべながら対峙している相手に対してそう述べる。そしてその対峙しているという相手、ラグナは両手に握りしめた双剣の感触を確かめるようにし、それから教えるように言う。

「だだよタイト、どうすつか」

「無理にこんな若造に情報を与える必要もない。ただ殺すための武器だと言っておけ」

「なるほど僕を殺す、ね」

そしてシウテクトリは納得したような表情をとると、瞬間、身体からボコボコとあの黒い泡が生まれ、屋上の床にそれが落ちることに化け物共へと姿を変貌させていく。

そしてそれが屋上の半分ほどを占め始め、五月蠅い吠え声が耳に届く中、ラグナは頭の中で彼女が呆れた様子で言っのを聞き取る。

「やれやれ、どうやら護りを固めてきたようだな。様子を見るか、突っ込むか……」

「イエス・アイマム了解姉さん。思いつきりやるほうで」
「アフアーメティフその提案、肯定と答えよう」

そしてラグナが一步前に踏み出すとそれを合図に化け物達が雪崩の如く出迎えるようにたった一人の獲物を対象に何十体もの化け物達が牙も爪も立てて襲いかかってきた。

この光景は、竜那でさえ、絶望的なものだと思われた。

（どうして——銃を使わないで行くの？）

この数での相手ならば、彼は得意の正確な連射であっさりと勝利することであろう。

しかし彼は敢えて、神々しくはあるが防御にも使えそうにない不思議な大型ナイフ二本であの軍勢に突っ込んでいったのだ。

ナイフから銃に持ち替えてももう遅い距離。

もはや突っ込んだら最後、何体倒そうがすぐに周りから寄って集って爪と牙の応酬がなされてしまふであろう。

それが、普通の人間で、普通の武器の場合の話であるが——。

「さーで、タツナとの距離も丁度良い具合に離れているし、やるかつ！」

姿勢を低くしたラグナは足の裏を爆発させたかのような速度で黒い軍勢に突っ込み、一番前にいた化け物の一体の胴体に深々と二本の刃を連続で突き刺す。

そして絶叫が轟く中、人間離れた速度で突っ込んできたラグナに対し一瞬の躊躇があったが、すぐに黒い津波の如く周りから化け物達が押し寄せてくる。

この光景を目にし、竜那はこの後予想される惨劇を想像して目を瞑り、同じ事を考えていたシウテクトリも思わず凶悪な笑みが零れる。

そして世界の動きがゆっくりと流れる中、ラグナの周りが丁度黒い空間で染まり始めると――

「――吹き飛べ――」

途端、突然刃が刺さっていた怪物が内側から大きく爆発した。すると竜巻を横に倒したかのような爆風がラグナからまっすぐ放たれ、風の豪拳が彼の周りを含め、次々と化け物達を弾き飛ばし、屋上から奈落の底へ退場させていく。

「なっ——！」

その中でシウテクトリは真っ直ぐ自分に向けて放たれた爆風を耐え、そして防いでいた腕をどけると——二本の刃を携えた男が風で空いた道をかいくぐって自分に向かって斬りかかっているところであつた。

「おっしやあああつ——！」

気合いと共に振り下ろされる双剣。

しかしシウテクトリはそれを、両腕を持ち上げて何の変哲もない素手で簡単に受け止めるとまるで堅い何かにぶつけたかのような音がし、火花が散る。

「なっ——！」

「こんなものが君の切り札か？ 銃を使つた方がまだ良かったよ」

そしてお返しに重い蹴りを一撃、胴体へと繰り出す。

ラグナはその蹴りをまともに受けると衝撃と共に後方にぶっ飛ばされ、まるでボールのように何度も床の上を跳ねて転がる。

「ラグナ——！」

竜那の悲鳴を浴びながらもラグナは何とか体勢を整え、スーツの性能のおかげが大したことなさそうな表情で前方を睨む。

すると丁度背後に一体と前方に五体、の爆風に耐えた残党が挟むようにして疾走してくる。

それにラグナはすぐさま反応して前を睨んだまま後ろ下投げでエ

ンリルを飛ばし、それが背後にいた怪物の両肩にそれぞれ一本ずつ突き刺さると、怪物の身体が、真横に持って行かれる。

正確に言えば突き刺さった直後にラグナが鎖を手元に引き寄せており、力任せにハンマー投げの要領で風の抵抗も振り切って綺麗に円を描くと、正面にいた怪物の横を急襲し、そのままぶっ飛ばし、次々と奈落の底へと退場させる。

そしてエンリルに刺さっていた怪物をラグナは今度はそのまま一回転で振り、自身が望むタイミングで遠心力を使って化け物を解放すると――シウテクトリに向かって投げ飛ばした。

「むっ」

風でまだ煽られている状態でも、シウテクトリは受け止めるわけでも打ち落とすわけでもなくただ単に身体を横にずらして回避するとそのすぐ側を黒い物体が通り過ぎ、先程の仲間達と同じ道を辿っていった。

「危ない危ない――」

（小賢しい真似をしてくれた。でもまだ僕は下僕達をいくらでも生まれさせることができる）

あの剣は、確かに強力だと彼は評価した。

この限定された空間内での爆風を生み出すあの剣の真価は際限なく発揮され、彼に有利な状況を作り出すことが可能であろう。

（でも切れ味はたいしたことはないし、それに長期戦をとればこちらの勝機は十分にある。そしてまだこっちには真打ちがある）

彼を殺してしまえばこの鬱陶しい防壁も崩れ、何とかあの娘を手中に収めれば町中に配置させた部下と立場を交換して行方を眩ませ

ればもう相手は打つ手はなくこちらが完勝する。

さて、ただ単に爆風を巻き起こすあの剣は厄介だが、所詮は剣。銃を使っても僕には効かず、爆風もだ。そして刃は僕には届かない。

さあ、どうする。

っと、彼は重要なことを忘れているのに気がついた。

そう言えばどうやって相手は、最初自分の手を”切り飛ばした”のかを。

よくよく考えてみれば、銃弾やあんな切れ味のナイフを簡単に防げたのだ。

それにこう見えても自分の肉体は刃物とかライフル並の弾丸などでも皮膚が剥がれる程度で傷が付くことはない。

じゃあ何で最初、この鋼の皮膚を、手を丸ごと切断して切りとばせたのか。

その答えは——前方で構えて佇んでいた。

「これで余計な障害物はなくなった」
「喰らわせてやれ、ラグナ」

風が左右に流れている中、ラグナはナイフにもう片方の手を添えて構えている。

そしてそれを前に突き出すようにして、刀身から何かを高速で飛ばした。

そしてその何かは、化け物を避けて僅かな隙を作ったシウテクトリへと飛んでいく。

それは、明らかに刃の形を模った——透明な液体だった。

（あれは——）

そう思い、すぐさま回避行動を起こそうとするとそれが肩を挟み、激痛が奔る。

「ぐっ——！」

銃弾程度の大きさならば避け切れただけの攻撃が避けきれず、肩から体液を流してふらついたところへ、ラグナがここぞとばかりに距離を縮めるために疾走を開始する。

その両手にはあの双剣。しかし先程と様子がまるで違った。シウテクトリの目から見たその刃はもうオーラを派手に纏ってい

るのではなく、刃に密着させるように最小限に留めている。

あれは、先程と同じように絶対に素手で触れてはならないと直感で理解する。

そしてシウテクトリが何かを取り出しながら、ラグナが懷に潜り込んで――

ギイイイン！

二回、金属音が二人の間で生まれ、周りに火花を散らしていった。

「……ようやく、切り札を出しやがったか」

ラグナはそう呟いてエンリルを止めたモノへ視線を動かす。

自分の二連撃を斜めで受け止め、しかも尚かつ普通の鋼よりも硬いもので構成されているらしい。

それは、竜那の世界では”日本刀”と呼ばれる代物であり、今それが抜き身の状態でシウテクトリが握っていて、刀身を斜めにして二つの刃を見事に止めていた。

「まさか早速これを出すことになるとはね――さっきのは、水だね」

そう言い、シウテクトリは先程肩を抉り飛ばしたものの正体を述べて顔を見る。

先程ラグナがエンリルから飛ばしたのは、紛れもなく水であった。それも高圧に凝縮して高速で。

そしてその後はこちらに突進してきた際にエンリルに纏わせていたのも水である。

しかもこちらは相手に触れた瞬間に刃から高圧水流が飛び出すようになっており、もし防いでいなかったら簡単に貫かれたことであろう。

そう、彼の本当の能力は水。

先程のエンリルから放たれた爆風は付属の能力に過ぎない。

そしてこの力を与えているのは、紛れもなく彼と契約を交わしている創世人、オリソン・テティシュトリヤなのだ。

「……………」

この遣り取りに関してラグナは肯定の意思を見せない。

しかしシウテクトリはその沈黙を肯定と受け取ると、何の前触れもなく両肩から化け物の首を誕生させ、それが伸びてラグナへと襲いかかる。

「！」

ラグナはそれを危ういところで後退し、回避をすると月明かりで光る一筋の光が見え、咄嗟にエンリルを頭上で交差させて振り下ろされた刃を受け止めるとその衝撃で床にヒビが入る。

一方、シウテクトリは振り下ろした刀の下にラグナがいることを確認すると、

「じゃあね」

そう呟いて握っている刀に力を込めると、瞬間——ラグナの身体に複数の斬撃が襲う。

「なっ！」

「ラグナッ！！」

襲いかかる斬撃をともに受けた身体は、まず右肩から右下へと
ぱっさり斬られそして傷は浅いがこめかみの部分も斬られ、視界が
赤く染まる。

「どうだい斬られた気分は？ ほら、もう二丁――！」

自分を傷つけた相手が今度はこっちの攻撃で傷つく姿に酔いしれながらも容赦のない第二波がラグナの真横から襲う。

視界が赤く染まったことで反応が少し遅れたラグナはかろうじてエンリルで斬撃を受け止める。

が、今度はまるで何もないかのように素通りされ、左袈裟斬りを決められるとまた複数の見えない斬撃が全身を襲い、後腰のホルスターも斬られ、二つの拳銃が屋上の床を滑っていく。

「——！！」

[illegible]

そして攻撃のフィニッシュにシウテクトリは突きの構えを取り、そのまま鉄板でもぶち抜きそうほどの威力で突く。

ラグナはすぐに身体の前であの水の防壁を張るが、それも虚しく

貫かれて胴体の真ん中にまともに受け、身体をくの字に曲げ、そして竜那のすぐ側のフェンスに向かって吹っ飛ばされ、ぶつかるとそのままずるっと落ちて頂垂れる。

「ちょっ——ラグナ!？」

相手に散々切り結ばれ、しかもまともに突きを喰らった彼に心配顔で竜那がすぐ駆け寄って状態を見る。見るからに痛々しい姿になっており、高い防御力を誇るはずの戦闘服が切り傷だらけになり、突かれた箇所はスーツがかろうじて防御性を発揮し、あまり深くは刺さってはいないが血がドクドクと流れ、床を赤く濡らしていく。意識は、ない。

「ラグナ！　ラグナ！！　目を覚ましてっ！！」

竜那は肩を揺さぶって覚醒を促すが、彼は起きず、どんどん血を流していく。

「ラグナ、ラグナ、ラグナ……！　……どうして……どうして……他人のあたしのために……」

思えば、昨日出会い、そして今日共に行動しただけでこんなに命を張れるものなのか。

そんなに命をかけて護れるほどの関係になったのか。そうじゃないはずなのに、彼は事実此处で戦い、今大怪我をしている。

「はは……は、はははははははははは！」

その姿を見て、突然狂ったようにシウテクトリが嘲笑う。

その笑い声に思わず竜那はラグナの頭を抱き寄せ、護るようにして振り返る。

「どうだ！ この武具は攻撃する瞬間だけ斬撃を増やすことができるんだ！ そして相手の能力ですら無効化もできるまさに素晴らしい代物だよ！ でも、いくら何でも此処を囲っている結界を破るのは困難だ。だから君を殺さないよね。さあまだ死んではいけないよね？ 終わりにしようか？」

楽しそうに、完全に勝負の流れを勝ち取って見下すのが嬉しくて仕方がない彼は一步一步踏みしめるように歩きながらその姿を歩くことに徐々に変えていく。

「これが僕の手を切り、僕の下僕を殺し、僕の計画を邪魔した報いだ。さあ、この舞台も終劇にして、僕のハッピーエンドで飾らせて貰うよ！」

そして六歩手前で立ち止まった頃には、顔は真っ黒になり、眼は黒みがある深色、瞳が黄色になり、両肩に化け物の首を載せたその姿は地獄の番犬と言ったところである。

そして何か根源的な恐怖、狩るモノと狩られる者のような感覚も存在していた。

しかしその姿の変化や、恐怖に驚きながらも、竜那はソツと立ち上り、一歩前に進み、両手を横に広げてラグナを護るようにして立ちはだかった。

「……？ 何のつもりだ？」

突然、目の前の少女のたった行動を理解できないように、怪訝そうな声で言う。

「あんたに、ラグナをこれ以上傷つけさせない……！」

竜那は唇を噛みしめ、身体が震えるのを感じながらも、言葉を紡ぐ。

「あたしのこと、覚えてくれて、護ってくれた人を、これ以上――
――！」

「じゃあそいつを殺せば、君はもう誰にも覚えてはくれなくなるんだね？」

最早この二人の命の手綱を握っているのは彼である。
この二人をどうしようとも彼の気まぐれで左右されている。

「もう諦めなよ、君の抵抗は無意味だ。大人しく僕の世界の材料になってくれば此処らの人間も全部同じところに送ってあげるよ？」
「……！」

此処のみんなが、危ない。

彼の言葉から察することが出来る事柄に、竜那は動揺を隠せず、その場で固まってしまう。これは最早自分だけの問題ではない。他のみんなも、危険に晒されているのだ。

「驚くことかい？　ならば訊くよ。君たち人間は家畜などを食べて生きてるじゃないか、自分たちの都合で。何故なら君たちの方が家畜よりも強く、従えられるからだ。ならば君たち人間よりもさらに

上に行く僕のような存在が君達を材料にしようが何しようが文句を言われる筋合いはない。何故なら僕の方が強いからね」

だけど、自分は無力な女子高生。

漫画やゲームのような特殊能力も特殊技能も持ち合わせていない、小柄な少女なのだ。

後ろで倒れている彼のように殺し合いを演じることでもできず、こうしてただ立っていることしかできない。

「ま、どちらにせよ君はこの世界の誰一人からも認識されず、一人で死んでいくんだよ」

「……………」

「じゃあ、そこをどいてもらおうか、孤独なおチビさん」

そして彼は刀を持っていない方の手を伸ばし、竜那を引き寄せようとした。

その魔の手が迫る中、竜那は思いの内を巡らせていた。

ごめん、ラグナ、あたしのせいで、こんな目に――

そして目を固く瞑り、これから起きることを覚悟して固まったときだった。

キシッ

ドサッ

不意に奇妙な音を、聴覚が捉えた。

「なっ……………！」

最初、竜那は相手の歓喜の声だと思っていたが、違ったので恐る恐る目を開けてみる。

「な、な、な」

この声は、喜んでいるのではない、苦しんでいるのだ。
やがて、その声が獣の断末魔の如く絶叫する。

「ああああああああ——！！」

彼女の目に映ったのは、刀を持った腕を丸ごと無くし、体液を流している傷口を手で押さえているシウテクトリの姿だった。腕ごと無くしたため頭が二つしか無く、そして腕ともう一つの頭は少し離れたところで転がり落ちていた。

そして竜那は彼の腕を斬り飛ばしたものをハッキリと見た。

水、それも床にいつの間にか現れた魔法陣から水圧カッターのように夜空へと放たれた大きな剣。

そして魔法陣が消滅すると共に、腕を無くし激痛で唸っている彼の後ろから逆手に持った二本の大型ナイフが襲いかかり、一本は肩の化け物の頭にもう一本は背中に深々と突き刺し、さらなる絶叫をプレゼントする。

「——お前は、一人じゃねえぞタツナ——」

声が、シウテクトリの背後から聞こえた。

竜那はその声を聞き取り、驚愕の表情で見る。

「な、んだと！？ 何で——」

当然シウテクトリも動揺が隠せず、肩越しに睨んで相手の姿を見つける。

そこには紛れもなく、身体のうちこちらから出血し、米神からも派手に流しているが特に問題もなさそうな様子で、エンリルを彼の身体に突き刺したままの姿勢の——ラグナがそこにいた。

しかもその背後には彼が飛び出してきたと思われる穴が床に存在している。

「ば、馬鹿なっ！？ お、お前は——！」

そう叫んで前に顔を向け、竜那も釣られた彼が先程いた場所に顔を向ける。

彼は、まだそこにいた。傷だらけで、意識を失ったままで。

しかし次の瞬間、彼の身体から色が消え失せ、輪郭や形などが崩れていくと元の透明な液体、水に戻り、その身体で隠していた一人が通れそうなほどの穴の中に落ちて姿を消していった。

「……！」

「ありや偽物だ。タイトの作り出したな。ま、ただし魔力を結構消費すんだよな。それとさすがスーツの防御力。何度これに救われた事やら」

「シウテクトリとか言ったか？ 自分が有利な立場になったと勘違

いをした愚かな小僧が調子に乗るな」

ラグナが愚痴のようにボソツと呟き、ティシュトリヤのきつい口調が彼に届く。

「……ラグナ！ よかった！」

「お、タツナ。中々根性あるじゃねえか。下で聞いてたぜ。見事な時間稼ぎだった」

「時間稼ぎじゃない！ ガチで心配したんだから！！」

彼は屋上ではなく一階下のところで待機していたのだ。

それはぶっ飛ばされた後、意識を失った振りをしてこちらの攻撃を敵が避けられない距離まで引き寄せようとしたところ、彼女が自分を護ろうとして間に入った。

だからこそ、彼女が立ちはだかるという一時は危うい状況ではあったが、こうして機転を利かせ、見事に相手の腕を真下からかつ飛ばしてやり、しかも床を壊して這い出て、こうして接近に成功したというわけである。

一見単純なように見えるがリスクは大きく、失敗すれば本当に危ない騙し討ち作戦であった。

「さて、あの妙な能力殺しの武具は厄介だったが、こうしてお前の手に無ければ無力だな」

「誰が無力ぐっ！」

怒号を浴びせようとするとラグナは彼を引き倒し、うつ伏せの状態にして背中を踏みつけて動けないようにする。それから左肩の化け物の頭からエンリルを引き抜くと遠慮無く彼の首筋へと突き刺した。

「……………!!」

「さーててめえは強いから人間を従える権利があるって言ったよな？ まあ大体正解じゃねえの？ よく知らねえけど。だけどよ、俺達人間は支配に”抗える”力を持つてんだよ」

だが致命傷にはならず、シウテクトリは驚愕の表情で虚空を凝視していた。

その行動にティシウトリヤも不審な声を上げる。

「……………？ 何をしているラグナ？ 早く討伐を」

「少し待てティト」

「しかし……………」

「いいから」

彼に何か考えがあるのだろう、そう考えると彼女はすぐに黙り込んだ。

ラグナは内心で彼女に感謝しながら、首筋にナイフを突き立てた男に向かって言った。

「お前の致命傷は外しておいた。これから俺の質問に答えろ」

「……………何？」

何故彼がすぐに自分を殺さないのか、そのことに疑問を持ったシウテクトリは視線だけをラグナに移す。

そしてラグナは、ちらと視線だけを動かして竜那の方を見て、

（あっ……………）

彼女は彼が何を聞こうとしているのかをすぐに判断すると、彼はシウテクトリに言った。

「タツナの存在を、元に戻すことができるか？」

「あの娘の認識を……？」

「そうだ、てめえが奪ったんだからそれに関する情報を持っているはずだ」

「……もし僕が言わなかったら？」

「知っているなら吐いて貰う。因みに嘘はついても無駄だ。このエンリルがそれを見抜く」

そう言つてエンリルを握っている力を少しだけ強くし、一ミリ深く突き刺す。

竜那はその尋問を見ながら、心の中では期待に満ちていた。これでようやく、自分の世界に帰れるのだと、そう願っていた。

「さあ言え、返答次第ではお前を逃がすことも考えてやるぞ！」

「……ラグナ！ それは！」

兵士あるまじき任務優先順位の変更。

普段、絶対に言つてはいけない発言にティシュトリヤは慌てたように叫ぶが、今の彼には聞こえてはいない。

そうか、何故彼がこの若い使徒程度に手こずっていたのかを。

彼は、このことを聞き出すためにわざと実力を下げた戦い方をし

「……………」
「……タツナ」

もちろん、一番ショックだったのは彼女である。

竜那はシウテクトリの言葉に耐えられず、絶望の表情でその場にペタリと座り込む。

もう、彼女は、この世界では家族からも友人からも二度と思い出してもくれないし認識もしてくれない。

この世界で、彼女は初めからおらず、誰にも見られることもなく死んでいくことが決定したのだから。

（………… ああ、そっか………… 何で俺が、あいつのために此処までするのか…………）

不意にラグナの方は身の内に秘めていた罪悪感の正体を突き止めたように感じたときだった。

背後から不意に風を切る音。

すっかり注意を怠っていたラグナは思わず大きく横に避けてしまい、手に握っていたエンリルも引き抜いてしまう。

飛んできたのは、先程ラグナを苦しめた日本刀形状のあの武器であつた。

何故、飛んできたのか、その答えを見ると、斬られて転がっていた腕が刀を投げるような形をしており、大方しっぱを斬られたトカゲの如く自律行動でそうしたのであろう。

そして武器は屋上のフェンスに当たって落ち、金属音を辺りに響かせる。

それからラグナは横に軽く回転するようにして回避し、そして体勢を立て直したときだった。

「——おっと、動くなよ」
「！」

見ると、シウテクトリの手にはラグナの大型拳銃が握られており、トリガーに指が掛けられていつでも発砲が可能になっていた。そしてその銃口の先は——タツナである。

「さて、僕の背中と首に何てことをしてくれるんだ君は。つくづく不愉快だよ」

銃を手にし、銃弾を避けるほどのスキルがない人質を確保したことで優越感を取り戻したシウテクトリは銃口を彼女に向けたままラグナに向かって言った。

あのラグナが使用する銃は、ホルスターごと斬り飛ばしたときに屋上の上を滑っていったものであるう。

それが今、敵の手に渡っている。

「そして今度は僕が交渉する番だ。さて、手始めにこの結界を解いてもらおうか？」

「……………ラグナ」

人質にされたことをようやく自覚した竜那は、憔悴しきったような眼差しでラグナの方を見る。

それはまるで、もう自分のことは気にせず相手を倒してと願っているような、何もかも映しているようで何も映していない瞳だった。

「……………」

「おい、聞いてるのかい？ さつさと解くんだ！」

交渉という名の命令を聞かないラグナに対し、シウテクトリは苛立ちの声を上げる。

彼女は命の危機に瀕している。自分はその時ちゃんと冷静に対処できるか。

彼は今日、このことについて少しだけ考えていた。しかしそれが該当するのはこの状況ではなかった。

該当するのは、彼女と最初会ってからずっとだった。

「……任務の優先順位は、使徒の討伐だったな」

「……そうだ。人質などの想定外の状況は不確定要素で二の次だ」

「……そうだな。それが俺たちの使命だもんな」

「おい！ 彼女がどうなってもいいのか！？」

いよいよシウテクトリの苛立ちも頂点に達し始め、トリガーを今にも引き絞りそうである。

竜那はその光景を見て、絶望から僅かに恐怖が生まれる。

（あたし、ここで殺されちゃうのかな？）

すると不思議なことに、何もかもを失った感情から、生きたいと思う感情がふつふつと生まれ始める。

そう、まだ自分を覚えててくれる人間がいる。その人がいる限り、生きれるところは生きてみたいと、心の底で思った。

まったく、人間というのは絶望の淵からでも生きたいと思うものなんだな。

彼女はそう思った。

あたしは、生きたい。

言葉にしない思いで、すぐるように彼を見ると、彼は――

敵の方へ向かって疾走した。

（なっ、人質がいるのに関わらず、こっちに！）

先程から妙にあの娘を庇っていた奴ならば彼女の命を考えて結果を解くはず、だと思っていたのに、まったく予想していなかった行動にシウテクトリは動揺を覚える。

しかし、まだ自分と奴とでは距離がある。

この距離ならば、彼女をこの道具で殺すことができる。

「――君は選択を誤ったな」

両手にエンリルを構え、突進してくる彼を馬鹿な奴だと思い、それから遠慮無く、トリガーを絞った。

そして銃弾が空気を突き破り、人の目では確認できないほどの速度で直線突き進み、彼女の方へ向かっていく。

そして彼女の額の方に弾丸は軌跡を描き、そして着弾し、赤い噴水をその地点から吹き出させ、小顔の頭の中をさらに弾丸が内容物を突き破りながら進む。

———と言うことはなかった。

弾など、一切出てこなかった。

「な———」

トリガーを何度も引いても、出ない。

「に———？」

そしてシウテクトリが言葉を言い切る前に、懐に向かって突っ込んできたラグナが遠慮無く胴体に水を纏わせたエンリルを一本、突き立てる。

「な、がつ———！」

突然の鋭い痛みで思わず身体を震わせると、ラグナは追撃でもう一本を鎖骨の辺りに突き立てる。

「バーカ、その銃に弾なんて一切入ってねえよ！！ それは魔力凝縮して撃つもんで、俺のモンしか受け入らないんだよ！」

思えば、あんなに発砲しているのに関わらず空薬莢なんて一切出てきてなかったことを竜那は思い出していた。そう、彼は初めから弾丸などを撃ち込んではいないのだ。

リロードの必要がない超連射式の魔力拳銃。

それが彼の持っている銃器の正体である。

だから初めから弾の入っていないこの銃などオモチャ同然である。だから彼は先程の状況を人質の危機だとは捉えず、あくまで優先任務達成を装いつつ竜那の救出に繋がったのだ。

「タツナ！！」

そして急にラグナは竜那の名を呼び、彼女が顔を向けると、

「絶望はまだ早えぜ！ まだお前を覚えて、触れて、喋ってくれら奴が俺こゝにいるじゃねえか！！ 確かにお前に出会ってまだ二十四時間も経って無えけど女の子一人困ってたら手を差し出すのが男ってもんだらうが！！ あア！？」

シウテクトリの身体から化け物達の首が飛び出し、身体中を噛み付かれようが、彼は叫び続ける。

「綺麗事だったことは分かってる！　だけど俺はてめえに生きて欲しいと思った！　今のてめえは前言ってたみてえなバットエンドを迎えた奴じゃねえんだよ！　スタツフールはまだ先だ！　今からてめえは始まる！　今この場で俺が始めてやるよ！」

「くそっ……！　何なんだこいつは……！」

何体もの化け物に噛み付かれようが、剣を握る力に一切の緩みは感じられず、　それどころかますます力を、恐怖を与えてくる。

まるで痛覚を忘れ、身体から出る血も関係なく、これでは、まるでこいつの方が化け物ではないか。

相手にそう思わせるほどの威圧感のあるラグナは、ようやく顔を振り向かせ、彼女を見ると、

「だから俺と来いタツナ。もうこの世界にお前の居場所はないけど、俺の世界とこならある。第二の人生、始めねえか？」

彼は、言ってくれた。

使徒を前にしながらも、何かを誓うように、そう言ってくれた。

今思えば、この一言がどれほど助けになったのか、もう計り知れ

なかった。

彼女は、予想をし得なかったその言葉に、思わずポカンとした表情になるが、やがて、両眼から月明かりで光る一筋のものを流すと、笑顔で、答えた。

「——うん！」

「よしっ！」

竜那の了承を得たラグナは、敵の胴体に突き刺していたエンリルを引き抜くとそれを一閃させ、自分に噛み付いていた化け物達を斬り捨てると、今度はそれをもう片方の鎖骨の方に突き立てる。

「うわアああああああ——！！！」

「ようやく待たせたな！！ 前の顔の方が良かったのに今じゃこんなに化け物じみやがって！」

刺したときの鮮血を身体で浴びながらもラグナはナイフの柄から手を離すとそれに繋がっている鎖を片方ずつ持つ。

「よくも、よくも——！！！」

「でもこれでようやくお終いだコノヤロー——！！！」

シウテクトリの残った方の腕での最後の抵抗。

それを気ほども感じないラグナは鎖を掴んだままその場で大きく前方に跳躍する。

すると肘から生えている鎖が伸び、彼の思い通りの長さになる。

そしてシウテクトリの視界からいなくなり、彼を飛び越すと空中で軽く一回転をする。

すると持っていた鎖が引つ張られ、シウテクトリに刺さったエンリルも引つ張られる。

その鎖に引き倒されるかのようにシウテクトリは背中から床に倒れ込む形となった。

そして最後に、竜那も見ている中、彼は一回転を終え、十分回転力を得ると――鎖を思いっきり引つ張った。

「てめえのバットエンドだ。このくそつたれが」

鎖骨の辺りで突き刺さった大型ナイフが後ろ斜め上に向かって思いつきりやったら、その後の光景は簡単に想像が付いた。

つまり、ラグナが鎖を引つ張った瞬間、あのお喋りだった顔が月夜に向かって高く打ち上げられたのだ。そして残された身体は力なくその場で倒れ、切断面から流れ出る液体を床へと注いでいく。

幸い、竜那は予想できた事柄だったのですぐに目を閉じていたため直接見ることはなかった。

そして宙に打ち上がった頭部が、屋上に舞い戻り、少し重い音を立てて着地した。

ラグナは着地した後、その音を背中と耳で感じ、それから伸びきった鎖を元のサイズに戻し、手元に刃身に戻すとそのまま肩越しでそれを見る。

酷く、何かを呪い殺せそうなほどの最期の表情。

それを見てから、顔を前に戻し、少し息を吐いてから瞼を閉じると、一言だけ呟いた。

「ありがとよ。おかげで久しぶりに不愉快だった」

06話・さよなら、あたしの世界

「よいしょつ、怪我は大丈夫ですかー？」

「打撲程度だ。そんなことよりタツナ殿の方が心配だ」

「タツナ殿なら二佐が何とかしてくれるハズですよ」

暗い住宅街の中の道の上でクロー2は戦闘を終え、すぐさま連絡を聞いて駆けつけてきたホーン2とファング8に両脇下に頭を入れられ、覚束ない足取りで移動しているところであつた。そして周辺の警戒はレッグ9が担当しており、しきりに見渡して不測の事態に備えている。

「はっ、最近はどうもお前達が羨ましいと思えるようになってきた。
コントラクター
俺も契神者になれば、こんな事態になることはなかったのにな」

「……いや、一尉は十分今のままでもすげえけどな」

「……ありがとよ」

皮肉でもなくただ今回の失態を苦く思うクロー2にホーン3が慰めのような言葉を掛ける。

そう、彼はこのメンバーの中では唯一の契神者コントラクターではない。

それは、彼の個人能力は高いのだが肝心の『マナ』が凡人並ということもあり、創世人の感心の対象にならず、契約したがらないところにあつた。

「とりあえず今は休んでもらう——おつ」

安静ができる場所を探し、ホーン3は首を動かそうとしたとき、通信機から連絡が入り、スイッチを入れて耳に近づけなくても周りに聞こえるような音量を大きくすると、そこには望んでいた結果報告が待っていた。

『繰り返す、こちらはケイル4。使徒は二〇三四時時点で討伐完了。保護対象のタツナも目立った外傷もなく無事保護完了。続いて次の任務完了を行うので、帰還準備を頼む』

「おおつ、これでもうやく帰れる！」

「ナイス二佐！ タツナちゃんも無事でよかった！ これでようやく温かいベットで寝られるぜ！」

待ちに待った使徒殲滅の報告。

それに歓喜の声を上げて思わず喜ぶメンバー達。

「そうか、よかった。タツナ殿も無事か……」

自分の失敗で危険な目にあつた彼女が無事だと聞いたクロー2は

思わず泣きそうな雰囲気になるが、ここは男だと自分に言い聞かせ、何とか堪える。

そんなメンバー達の色んな反応が湧き起こっている中、通信機からラグナはボソツと呟くように言った。

『それとタツナを連れて行くことにした。詳細は後に言う』

ブチッ

「よっしゃー、久々に故郷の酒を……って、え!？」

思わぬ言葉に、四人は一時言葉を失い、通信機を凝視していた。

戦いは終わった。ラグナの勝利という形で。

彼は通信機をしまい込むと肩越しに彼女を見る。

「……ラグナ」

「……終わった。怪我はねえかタツナ」

「うん」

怪我はないか、それはあたしじゃなくてラグナの方でしょ。

そう言いたげに竜那は勝者を見る。

それからその横で転がっているモノを見て、思わず顔を青くする。

先程までは敵としてラグナや自分を、さらにはこの町の人々を危機にさらした敵の屍が転がっている。

しかも首と胴体が離れた状態で。

身体から出る体液や人間離れた容貌はまだ恐怖を語っているが、問題はそれを倒した本人にあった。

人間じゃない存在をただの人間が倒した。

何だか、彼もまた別の生き物のように見えてきた。すると、自然と表情に不安が差し始める。

「おっ、これは……珍しいな」

その彼は今、敵が残していった転がっている刀を見てそう呟いた。

「何と、ノイレヴェンなる者達を喰らってきた所為か、まさか武器の存在を確立させるほど強力だとは」

「ああ、どちらにせよ、これも回収だな。預かってくれティト」

そう言って拾い上げた刀は、シュツと音を立てて消える。

「さーてと、……………あっ」

そしてふと、振り返ってみてから何かに気がついたような表情になると再び身体を前に向け、それから頬を指でポリポリと掻き、

「あー……タツナ、怖いか、俺が」

背中に何か不穏な視線を感じ取ったラグナは、彼女に背中を見せたままそう言った。

竜那は、すぐには答えられなかった。

それを肯定と受け取ったのか、ラグナは何か言おうとし、黙り込み、それから言った。

「すまん。確かにこの世界における人間にとっては怖いもん見せたよな、俺を含めて。だがこうしなきゃ、お前も此処の人間もこの世界も、救えやしないんだ」

そう言っただけでも分かるほど、彼が落ち込んでいるのが目に見えた。

それを見た竜那は、心の中でどこか痛むような感覚を覚える。

彼の様子は、人間のそれと変わらないものなのだ。

形がどうあれ、彼は命をかけて自分を護ってくれたのだ。そんな怯えるような、不安げな目で見たことに竜那は嫌悪感を感じ、同時に彼に護られたことを自覚すると、何だか無性に身体が熱くなるのを感じた。

それから彼の向けていた視線とこの熱さを一緒に誤魔化すよう、わざと明るく振る舞う。

「い、いやあたし別にラグナのこと怖くないよ！ それにあたしゲ

ームとかでグロテスクな描写のものの結構やつてるから大丈夫だつて。ほらバイ。とかサ。レントヒルとかS I。E Nとか。だからあたしをその辺の女子と同じされちゃあ困るぜ？」

「……！……そっか、あんがとよ」

そして彼は振り向いた。目つきは鋭いが、穏やかな表情で。それに対して竜那もニツと笑って応じる。

すると、ラグナの側にあつた死体が急に光り始め、辺りを照らしたかと思うと――

シュツ……………バシュンツ！

「わっ！ 何！？」

「おっ、これで場所が分かるな」

「うむ、ご苦労だったなラグナ」

突如シウテクトリの死体が光弾となつて屋上から飛びたち、そして夜空を何回か遊ぶように円を描くといきなり急降下をし始め、竜那とラグナの間に突っ込み、床に吸い込まれるように消える。

「……な、何のイベントですかこれは！？」

「やっぱりこの建物で正解みたいだな。よし竜那、お前に見せたいもんがあるから来い」

そう言つてラグナは屋上の鉄扉の方に向かい始め、そして壊せるかどうか確認してから、ふと彼女が付いてきていないことに気がつく。と振り向き、そして何か立ち往生しているのを見付ける。

「……どした？」

「いやだって……今、夜だし……こんな時間に建物に入るのって死

亡フラグだよ?」

「ほー、じゃあ此処に残って待ってるか?」

「!?!?行く」

屋上でただ一人待つ想像をした竜那は、二人で建物内の探索をした方が良くと判断し、渋々ラグナの方へ歩いていった。

屋上の鉄扉を破壊し、中へと侵入した二人は月明かりも届かない電気の通っていない場所なので歩くには少々不都合な空間であった。おまけに下の階へ続く階段も視認できないのでラグナはボソッと呟く。

「.....暗いな」

「ねえ明かりないの?」

「俺の後ろのホルスターの近くに小型ライトがあるからそれとってくれ」

「ああ、これ? 取ったよ」

「じゃあスライド式スイッチがあるからそれやって」

「ほいつ」

カチッ

「おぎゃああああああっ!?!?」

スイッチが入ると同時に、ぬおっとライトを顎の下から照らした竜那が浮かび上がり、ラグナは思いっきり仰け反って盛大な叫び声を披露する。

「あつはー！　ラグナナイスリアクション！」

「~~~~てめつ、今度やったら承知しねえからな！」

「クスクス」

頭の中でティシュトリヤが忍び笑いをしたのが聞こえたがラグナは気にしない振りをして誤魔化すよう、さつさと先程見付けた階段の方へ行ってしまったため慌てて竜那がその背中を追いかけていった。

そしてようやく一階までたどり着いたが、ラグナの言っていた肝心の見せたいモノはなかった。

そのことについて竜那は辺りをしきりにキョロキョロしているラグナに訊ねる。

「ねえラグナ、何か怪しいものは特になかったようだけど……」

「しっ、静かにしてろ……」

どうやら何かに集中しているようなので言われたとおり黙る。

「ティト、見付けられたか？」

「どうやら我々の真下の方に空間があるな。そこに”歪み”がある

ようだ」

「なるほど、地下があるわけか。えーと……………あつた」

辺りをゆつくりと見渡し、そして何やら錆びたドアがあつたのでそれが地下へと通じる道だと判断したラグナは、『地下やばい地下やばい地下やばい地下やばい！ 死亡フラグだよ！』と連呼して逃げだそうとしている竜那を置いていくわけにもいかないのでずると引きずって地下へと入場を果たした。

「ううゝゲームだとよく地下には恐ろしい人食い生物がいたり超グロテスクな人間解体現場とかあったり時間が経過するとその辺が錆びだらけになって命が削られるとかあるんだよ」

「もしそうなつても俺が解決してやるよ」

泣き言を言いながらも付いてくる竜那にラグナはそう言い、そして一番奥の部屋のドアの前に辿りつく。見た目は一見廃墟らしいドアでヤバサ全開であり、しかもドアの向こうから何かが渦巻いているような奇音も聞こえてくる。

「な、何？ この音？」

「さーて到着、つてとこか？」

「そのようだ。さつさと済ませるぞ」
「了解」

竜那にとって成立しない会話を済ませたラグナは、いきなりドアの取っ手に掛けたので竜那はあたふたと慌て、

「ちよっ！？　こういうときはタイピングか教会か電話か赤四角でセーブをしてから行くのが常識だよ！？　それをいきなり突っ込むなんて！」

「……お前、大丈夫か？」

その慌てぶりからついつい変な発言をする竜那を白い目で見ながら、ラグナは取っ手を捻り、ドアを普通に開けた。

部屋は、普通であつた。

部屋は広く、壁などは錆などで汚れて老朽化しており、踏み入れた足の下でギシギシと妙な軋み音を立たせるなど長い間人の手が掛かっていないことを思わせた。

ただそれは部屋自体の話。部屋の中には明らかに、別のモノが存在していた。

それは、丁度部屋の真ん中に位置していた。

「何……？　これ？」

「これが俺たちが”歪み”って呼んでる奴だよ」

二人の前にあつたのは、様々な色の絵の具をかき混ぜるかのよう
に渦巻いている人が何十人でも同時に入れそうな巨大な穴だった。
それはまるで何かを吸い込んでいつてしまいそうなブラックホール
のようであり、同時に円の中心から光の砂のようなものを吐き出
して空間に融け込ませているようでもあつた。

ラグナは、その歪みと呼ばれたモノの真ん前に移動すると、ソッ

と手を伸ばし、翳すようにする。

「これが使徒の力の根源であり、供給源で奴らの通り道だ。だけど普段、連中は自分たちの力でこれをリーダーにすら映らないように巧妙に隠してるんだ。だから最初に倒しておかないとこれが見つからない」

「そうなんだ……でもそれじゃあ隠れられたりして使徒が見つからなかったら？」

それならば使徒自体が見つからなかった場合は、と言うとラグナは答える。

「それなら大丈夫だ。俺たちはこの歪みが出る僅かな電磁波で場所を大まかに特定してこちらに来てるからな。奴らはこの歪みの力が及ぶ範囲しか行動ができねえ。だからさっきのシウテクトリっていうやつはこれを広げて活動範囲を広げようとしたんだ」

彼が倒される前、確かに『僕の世界を作る』などと言っていたことを思い出した竜那はなるほどと納得する。つと、同時にその時起こった奇妙な出来事も一緒に思い出した竜那はラグナに訊いてみる。

「そ、そういえばさ、あたしあのイケメンに喰われた時、何だか知らないけど何か喉に怪我をしてあたしを吐き出したんだよね……何か、知ってる？」

「ああ、それはだな——」

ラグナが言うのと竜那は身体から何か抜け出るような感覚に襲われ、そしてキュポンと音を立てて体中の穴から透明な液体が抜け出ると一箇所に固まり、ふわふわとラグナの方に飛んでいく。

「！？ えっ、あたしの身体から水！？」

「ああ、今日学校の屋上で水飲ましたる？ あれ俺が作り出した水だよ。俺の魔力入り特製ウォータードリンクだ」

コッペパンを食べ、そして水分を欲しがっているときに差し出してくれたあのペットボトルに入っていた水は実は彼の作り出した水だという。

しかもこの水は先程彼が言ったとおり彼の魔力が秘められているため、もし竜那が攫われても位置特定が簡単にでき、さらに何かしらの危害を被った場合にカウンターとしてすぐさま竜那の身体から出て反撃するという便利なものであった。

それのおかげで彼女はこうして無事であり、すぐさまラグナが駆けつけられたというわけである。

だが、

「こ、こ、この……あたしの身体に何してくれんのよ！」

「グハッ！？」

純情なる乙女としてはそんな危なっかしいもの入れてんじゃねー、それと何故教えなかったんだーという怒りを込めたチョップをラグナの後頭部に決め、意外な威力で彼を蹠踉めかせる。

「お、おい邪魔すんなよたくっ」

プンプンと頬を膨らませて怒っている竜那を後頭部をさすりながらちらと見たラグナは、目の前の歪みを改めてジッと見つめ直し、そしてようやく何かの目処が立ったのか、契約をしている彼女に話

しかける。

「どうやらトラップ等のものは見当たらなさそうだ。やれるか？」
「肯定、ではいくぞ」

そして次の光景で竜那は目を丸くした。
手を翳している彼、ラグナの背中から何の前触れもなくいきなり
水が吹き出すようにして生まれ、そしてだんだんと形を整えていき、
”それ”は身を起こした。

「だ、誰……？」

竜那が思わず声を零したモノは、確かに人の形をしていた。
それは、水でできた身体の上に純水で作った衣を羽織り、さらに
長いシヨールのようなものを纏っている。

そしてそれは、女性であった。

一本一本水でできた長い髪を持つ、女性の姿であった。

「これより、歪みを閉じるぞ」

その水の女性から、声が発せられる。

竜那はその声に驚いて、まるで足に根っこが生えたかのように、
その場で動かなくなる。

初めて聞いた声はまるで静かな湖に起こった波紋のような、凛々
しい女性の声。

そしてすぐに竜那は彼女が誰なのかを理解した。

その水の女性、ティシュトリヤは水でできた両掌を歪みと呼ばれる渦に押し当てるようにする。

すると渦が徐々に回転力を無くしていき、心なしか様々にあった色も薄れていく。

「もうじき終了だ」

そして押し当てた手を今度は内側にゆっくりと動かすといよいよ渦は回転しなくなり、色もなくなって昔の写真のような白黒へと変わっていく。

そして最後に、両扉を閉めるかのように掌を合わせると歪みはそれに伴って力チツと音を立て、そしてゆっくりと空間に融け込むようにして、完全に消滅した。

一方その頃、このビルの周辺や学校のグラウンドで築き上げられていた化け物達の屍の山は、歪みが閉じると同時に一瞬で分解し、そして歪みがあつた建物の方へサーツと風があるかのように流れていった。

「歪みの消滅を確認。任務完了。ご苦労であつたラグナ」

「うおー！ さつさと具現化状態解くぞーティトー！」

「その名で呼ぶなと言っているだろうがラグナ」

「ハイハイ分かりましたから黙れ！」

歪みを閉じる作業を終えたラグナは、具現化と言われる状態になっているティシュトリヤにそう怒鳴り、彼女は渋々と彼の背中へと戻っていった。

そして完全に戻り、水気も無くなるとラグナはまるでこっているかのように肩を動かし、

「これが結構疲れるからイヤなんだよね、具現化はやっぱ魔力消費激しいな」

そう言うってからやれやれと少し疲れた様子でまだ驚いている竜那の方に身体を向け、

「これで少なくともこの世界はもう連中の手には二度と掛からないこつから出るぞ」

「……うん！」

少し遅れた返事を聞き、ラグナは竜那を連れて地上へと向かった。

そして地上へ出て、中がごちゃごちゃしている建物の入り口から外に出ると息苦しかった感覚が打ち消え、竜那は思わず深呼吸をす

ると、ラグナは周囲を確認するように見渡し、

「よし、あの化け物どもの死体もなくなってやがるな」

「え、ど、どうして？」

事情がよく分からない竜那はそう訊ねると、ラグナは顔を向けずに腰に両手を当て、

「連中もあの歪みによって引き起こされた現象の一介に過ぎないからな、だからこうして閉じれば自然と姿を消し、本来のあるべき世界に戻るんだよ。ただどな……………」

それから、暗い顔をして竜那の方に顔を向け、

「今回で犠牲になった人間は戻らないし、お前のように影響を受けた人間は戻らない場合がある」

「……………」

「……家まで送ってやつから、そこで確認して……ダメだったら荷物を纏めて、出てこい。俺は外で待ってるから」

「うん……………」

こうして二人は、槻汐家に向け、足を運び始めた。

槻汐家では、今は台所で母親が夕飯の後片付け、父親がテレビで

何かの番組を見ているところであつた。夕飯はハンバーグでも作つて食べたのであろうか。大皿二つにデミグラスソースのようなものがこびり付いており、ニンジンソーテのバターも付いていて、しかも食卓ではその双方の香ばしい香りが支配していた。

「今日もお勤めご苦労様」

「ああ、今日も疲れちゃったよー」

そんな何気ない夫婦の会話。

それからテレビの音量を大きくしようと思い、いざリモコンを探すと見当たらず、座っているソファの下に隠れているのを見付けると、

「あ、また元の場所に置かないでいるな」

そう呟きながら拾い上げるとふと、何か違和感を覚えた。

自分の奥方は、片付け魔と思うほどの潔癖性なのでリモコンをこんな辺鄙なところに置くはずがない。なのに何故自分は誰でもない第三者のことを言うように呟いたのであろうか。

父親はそう首を傾げながらもテレビの音量を大きくする。

それから、皿洗いを終えた母親がエプロンを外した姿でやってきて、夫の隣に座り込むと、

「あなた、お風呂沸いたわよ。どっちが先に入る？」

「うー、今これを見たいんだよねー、だから先入ってくれる？」

「んもう、ホントどっかの誰かさんに似てるわね」

と、此处で母親の方も何か違和感を覚える。

目の前の夫をどっかの誰かと比べて言ったのに、そのどっかの誰

かが思い出せない。

夫は結構テレビを見るのが好きなので毎度注意することは日常茶飯事なのだが、何故か自分たちにはもう一人、誰かもう一人いた気がしてならなかった。

そう、悩める彼女に夫が心配そうに声を掛ける。

「大丈夫かい？ 疲れているように見えるけど？」

「え、ああ違うの。何か違和感があるなーって思っちゃって……」

「ああ、それならさっき僕にもあったよ。何かこう足りないような気がして」

「え、あなたも？ 私もなのよ？ 変ねー二人してこんな気持ちになるなんてー」

「それだけ僕たちの心が繋がっているんじゃないの？」

「や、やだ、あなただったらさっさと恥ずかしいこと言わないでよ」

「……………」

（こんなに楽しそうな両親の会話のその中に、私はいたのに……）

その様子を両手に服を抱えて廊下から見ていた竜那は、両親がこちらに気がついてくれないことに予想はしていたものの、何か心の中で大事なものを失ったと改めて自覚した。

それと先程着替えを一階で探っていたときに気がついたのだが、自分から見れば自分の服や電話の横に置いてある写真はちゃんと自分が映っていることが確認できるが、両親は自分のだけ認識できないようになっていらいしい。

本当にもう、あたしはこの家には戻れない。

そう思い、重い足取りで二階の自室へ行くと、そこにある自分が

持つて行きたいものを全てをバックに詰め込み始めた。

ラグナからはできるだけ大きいモノは持たず、俺も運ぶから自分が大切だと思うものだけを持ってこい言われているので悩みながらも自然と手が動き、パンパンになったでかい荷物が四つできあがり、それをゴロゴロと転がすようにして一階へと運んでいった。

「うぐぐぐ疲れた。部活の千本素振りに匹敵するくらい」

そんな独り言を呟き、ようやく全ての荷物を転がし終えた彼女はもう一度両親のいる部屋を見て、それから玄関のドアを開けて荷物を一つずつ持ち出し、最後にドアを少し開け、顔を覗き込ませるようにしてから、

『じゃ、どうか元気で。行ってきます』

そう小さな声で告げ、小さくパタンと、ドアを閉めた。

外ではラグナが誰かと連絡を取っているのか、耳に通信機を当てて喋っていた。

「ええ、ええ、今から彼女を連れて行きます。ええ、軍法で定められた基準を満たしているので決定したことです。……感謝します、ブラット1殿」

相手は自分より上官らしく、そう丁寧に言っただけで目を閉じて感謝の意を表し、通信を切って仕舞い込むとふと、何かがこちらに近づいていることに気がつき、そちらに目をやってみると何か巨大なボールを四つ身体に付けた何かが接近していることに気がつき、その異様な存在に思わず腰のホルスターから拳銃を抜く体勢に入るが、

「お、お、お待ちせー」

「あ、タツナか、ってか荷物多っ!？」

声で竜那だと判断した彼は改めてその姿に驚く。

まず、彼女は背中の一つ、手に各一個ずつ、そして身体の前につとどこかのモビルスーツのような姿になっており、その総重量に膝を笑わせながらやってきたのだから呆れる以外リアクションに困る。

「お前……荷物は普通少なくなるもんだぞ？」

「こ、これにはあたしの人生で必要なものがたくさん詰まってるの! だからどうせ戻れないんだっただけなら今まで集めたものとか勿体ないから……!」

「はいはい、まあお前の身体で持ってたんだから許してやるよ。ほれ、二つ貸しな」

そう言って彼女の許へ寄り、両手に持っていた荷物をまるで重量

を感じていないかのようにヒョイツと持ち上げるとスタスタと先に行ってしまう。

「ちよっ、ま、待つてよ、女の子を置いていくな」

「自分の所為だろうが、ちゃっっちゃと来ーい」

「うう〜」

そんな彼の背中を見送った後、ふと、竜那は自分の家の方に顔を向ける。

ここで十七年間、自分は生まれ、育ち、家族とともに過ごしてきた大切な場所を、今から自分は旅立っていくのだ。

目的地は、自分の知らない未知の世界。

そこでちゃんと生きられるかどうか、保証はないがこの世界で生きていくよりはマシな選択である。だから、自分に行く。この世界での繋がりを一切捨てて。

「……お母さん、お父さん、あたしは、行くからね。今までお世話になりました。こんな娘でしたが、向こうで何とかやっていきますので、見ててね」

そう言つて最後のお別れの言葉を言い、彼女は静かに感謝の思いを込めて頭を下げ、それから数秒後、今居る自分の居場所から後悔の念を断ち切るかのように背を向け、一度も振り返らずに離れていった。

その両眼に何故か温かい液体が流れながらも、彼女は拭おうとはしなかった。

そして今すぐにでも本来居るべき場所に帰りたと思うが、振り切つて、ラグナのいるところへと向かった。

曲がり角を二つほど曲がったところで、一目でそこが出発地点だと分かった。

何故なら道のど真ん中に二人の戦闘服を着た人間と背後にこの場には似合わないモノがあつたからだ。

「遅せーぞタツナ」

「だって重いから仕方ないでしょ」

「だから お前の所為だろうが」

二つのバックを軽々と持っているラグナに、今度はもう一人待っていたホーン3ことルীগ三尉がその肩をポンポンと叩いて言う。

「まあまあ、こうして時間内には間に合ったからよくねえかラグナ」

「そりやそうだけだよルীগ。理不尽だろこの荷物の量」

「いやいや、女っつていうのは荷物が多いもんだぜ？ もっと女の子を知ろうぜラグナ？」

「うっせえな」

どうやら任務も完了し、早くも地位関係無しのプライベートモードで会話をしている二人は元々ため口で話し合う仲のようである。そんな会話を暫し端から見えていた竜那だが、少し待たせていることに気がついた二人は同時に彼女を見て、

「準備は良いか？　これを通ったらもうお前の知っている世界じゃねえぞ」

「……うん、でなきゃ此処に来てないよ」

「……いい面構えだな。どうやら本当にいいみてえだな」

「……あゝ、ごほんっ、タツナちゃん、荷物一個運ばうか？」

この少女の経緯をラグナから聞かされているルীগは優しさから彼女のその団子バックを一つ持とうと提案するが、彼女は首をフィィと横に振り、

「大丈夫ですよルীগさん。これに入ってるの大体着替えだから」

「なにっ！？　じゃ、じゃあ遠慮せずに俺に運ばせてくびばっ！？」

「さっさと行けこの女たらしの変態野郎が！」

着替えという単語に反応したルীগにラグナが蹴りを入れ、後ろにあったものの中に突っ込ませると尻餅をつく音さえしなかった。そして静かになったところで改めてラグナが説明をする。

「じゃ、これにお前から入れ。別に痛くも何ともないから安心しろ」

「これに……？」

竜那はそう不思議そうな表情で彼の後ろのモノを見た。

それは四角形に切り取られたゲートのようなものであり、中は真っ暗で何も見えない黒一色のもので先程見た歪みとは正反対に位置するようなものであった。

これに先程ラグナにけっ飛ばされたルীগが入り、姿を見せていない。

「うゝむ、危ぶめば道はなし。踏み出せばその一足が道となる。迷

わず行けよ。行けばわかる……って感じかなー？」

勝手に一人で納得した竜那はスタスタと前に歩み出る。

それから異世界に繋がっているゲートの前でくると身体を返すと、数秒間、夜の自分がいた町に向けてお辞儀をするように頭を少し下げると、

「じゃ、みんな、行ってきます。そしてさよなら、あたしの世界」

（あ……………）

その姿を見てラグナが何かを思う間に彼女は再び前を向き、それから躊躇わず——入った。

その後にくよう、ラグナは一步を踏みしめ、

（この罪悪感は……俺の所為なんだ……）

また一步を踏みしめ、ゲートの真ん前で立ち止まると、

（タツナをこんな風にしたのは、奴じゃない、俺なんだ……）

昨夜、敵の出現を捉え、彼は走ったがとても間に合いそうではなかった。

だから間に合わないと考えて立ち止まってみたが、不思議なことに、普段なら消えているはずの時間を過ぎても今回は残っていたので今がチャンスと思いながら向かった先には、彼女がいた。どうして、もっと早く、諦めずに走って行かなかったであろうか。

あと一分早かったら、彼女はこんな目には遭わなかった。

（だから俺が彼女を連れて行くのは……罪滅ぼしなんだ）

これは、自分の責任を別の形でとろうとして行なった無自覚の行為。

だから俺は、彼女を護ろうとしたんだ。

それは、あの小さな手から渡された温もり。

そして時々見せてくれた、見た目にはふさわしくない心の頑強さ。それを護りたくて、自分は戦った。自分が傷つこうとも関係なく。

その後悔と自責の念を感じ取ったのか、珍しく頭の中で彼女が優しく声を掛けてきた。

「……どうしたラグナ、またお前の心に雨が降ってるぞ」

「……るせえ」

「始まりはどうであれ、お前はあの子を救った。違うか？　そして彼女に新しい選択をもたらしたのもお前だ」

「……ああ」

「ならばさっさと帰還せよ。これからは、お前が面倒を見るんだからな」

「……そう、だな」

そしてラグナは、トンと地面を蹴り、ゲートの中に入っていった。すると最後のメンバーが入ったことでゲートはそのまま消滅し、元の空間へと戻した。

そしてこれは、この世界で少女が一人消えた翌日のこと。

世界は変わらず周り、日の出がまた上がったこの町で、同じ日常が始まるうとしていた。

部屋の中にはカーテン越しから光が差し込み、眠っている人間達を起こす。

そんな中、一つの家庭では朝食をいつも通り人数分作って、それから朝食ができたと報告すると一人やって来て、一人はまだ出てこず、その一人が何遍言っても出てこないのどうとう痺れを切らしてその人物の元へ行くために階段を上り、二階へと行った。

そして最初のインパクトが大事だと、ドアの取っ手に手を掛けると勢いよく開け、

「こら竜那！ いい加減起きな——え……」

そして母親が見たのは、ほとんどもぬけの殻になった娘の自室だった。

いつも此処にあったのは、この年の娘らしからぬ力オスな空間。それなのに、まるで彼女が最初からいなかったかのような、そんな寂しげな部屋。

「竜那……？ 竜那、どこ？ ……そう言えば……何でかあの子のこと、忘れてたような……」

娘の姿が見当たらず、部屋に入って探そうと見渡してみるが、やはりいない。

すると玄関からチャイムが鳴り、父が代わりに来ると見知った顔なのか、朝の挨拶をしようとするすると靴を脱ぎ捨てた音がし、そしてこの部屋に向かって喧しくドタドタと階段を上って向かってくると同じく勢いよくドアを開け、

「たっちゃんいるっ！？ あ、おばさんお邪魔してます」
「……アスカちゃん」

慌てたような表情でやってきたのは娘の親友の、工藤明日香であった。

よほど慌てて走ってきたのであろう、気の強そうな顔立ちは今は疲労の色が見える。

「え、ええつと昨日どうしてか、たっちゃんのこと忘れてて、心配になったから来たんですけど……これって……」

そうして彼女も同じように、このほぼもぬけの殻となった部屋を見る。

家具が残ったままだが肝心の中身はほとんど無くなっており、大凡彼女が大事にしていたモノは全て消えていた。

まるで昨日自分たちが忘れてしまったのを切っ掛けに、旅立っていったような。

「そっけないの、朝から……竜那……竜那どこ？」

ようやく娘が行方不明になったのだと確信した母親は急いで警察に連絡するために涙を拭いて下に駆け戻り、明日香もそのことに気がつくといよいよ青ざめ、友達に昨日竜那を見たかどうか一人一人に連絡を取りながらその後を追いかけていった。

世界は元のままに戻ったのに、一人の少女はいつまでも、戻ることとはなかった。

06話・さよなら、あたしの世界（後書き）

どうも、これでようやく一区切りができました！

この話までに既に八万文字以上、すいません飛ばしすぎですね（汗）
でもまだまだ続きますのでどうかよろしくお願いいたします。
それでは、後書きでした。ではでは

07話：リュウナ

薄暗く、様々な情報が随時送られてくる司令室の席に、まだ幼さが残る女性が座っていた。

その席の脇には女性の秘書も待機しており、今し方送られた情報を馬鹿丁寧に記した報告書を読み上げたところであつた。

「やはり、彼を送り込んだのは正解でしたね」

「そうですね。結果、使徒を殲滅し、歪みの閉鎖も迅速に終えることができました。しかし三将……」

大きな黒い瞳を持ち、肩で切りそろえられたショートヘアの黒髪で、可愛い顔立ちの女性は三将と呼ばれるには若すぎるが女性用軍服スーツスカートを着こなし、その胸には金の刺繍で描かれたドラゴンと星が一つ付いた階級章が光っていた。

彼女——フレイア・ゴールクは最年少の三将であつた。

普通、この階級にたどり着くにはそれ相応の努力と成績、そして年月が必要だが彼女はある理由によってこの地位を与えられているのだ。

その理由とは彼女の人並み外れた頭脳と柔軟な思考と的確な判断は当然、家柄や彼女独自の能力もだが一番の理由がその地位でなければコールサイン『ブラット1』と名乗れないのが主な理由だった

りするのだ。

「ラグナ二佐の報告、＜ノイレヴェン＞のことですね。記録によれば三年ぶりということになりますね」

「……これからどうするおつもりで」

秘書がそう言うつと、フレイアは席から立ち上がり、

「既に＜ノイレヴェン＞の可能性がある少女については局長に伝えてあります。そして“ボク”は今からお父様とおじさま方のところへ向かって伝えるべき報告をしてきます。それに今回はラグナ二佐も呼び出されますからその弁護もです」

「了解いたしました。では私は皆様のところへ参ります」

「よろしくお願いしますね」

自分より少し年下の女性に対して至極真面目な態度で答えた秘書は一礼をし、その場から去る。

そしてフレイアもファイルケースを抱え、自分が向かうべき場所に足を進め、廊下に出る。

今は夜の七時半ほど、作戦を終えた部下達が異世界から戻ってきたことをひとまず安心し、それから歩きながらふと、

（もし今回の少女がそうであるならば、ラグナ二佐にはまた頑張ってもらわなければいけないですね。ほんと、多忙な人です）

そう思い、廊下を一人歩いていった。

異界接続安定値持続、生命反応確認、IDチェック完了、ホーン
3 生還を確認

不意にそんなアナウンスが流れる。

そのアナウンスが流れた場所はやや異質なところであった。

広さは小劇場くらいの大きさで、部屋の半分ほどがパイプやケールが剥き出しで全て中央に向かって延びている。その中央にあるのが縦三メートル横二メートルほどの門のようなものでその後ろ側に全てパイプやケーブルが接続されていた。

そしてその門、通称ゲートと呼ばれるそれが明るく光り出すとそこから突然足が一步踏み出される。

そしてその一步を始めとし、もう一步、さらにもう一步とゲートから誰かが出てくる。

「おお、懐かしの故郷に帰ってこれたー」

そんなのんびりと緊張感のない声でルーグ三尉はゲートから出てくると部屋のスピーカーから声が掛けられる。

『ご苦労様ルーグ。六日間の禁欲生活はいかがでしたか？』

「地獄だよ地獄、あゝあ早く寝てー、それでクロー2、バツカスー尉の容態は？」

『それなら大丈夫、幸い骨とかも大丈夫だし少し安静にしていれば

すぐに復帰するわよ』

「そうか」

自分の上司の無事を確認したルーグは振り返り、ゲートの方を見つめる。

此処から出てくるのはあと二名、それを確認してから着替えに行こうと考えてたのでその場で待機しているとゲートがまた発光し、アナウンスが流れる。

生命反応を確認、IDチェック完了——ケイル4生還を確認

流れたあと、ゲートから足が覗き、そして荷物を二つ抱えたラグナが姿を現す。

そしてゲートから二、三步離れると荷物をゆっくりと下ろし、

「あゝ肩凝るなコレ。一体何突っ込んできたんだあいつは」

肩をさすりながらそうばやいているとルーグは彼に近づいて話しかける。

「よう二佐殿。まさかタツナちゃんを最後に置いてくるたあ、やっぱおめえは女性の扱い方なっちゃいねえな」

「はっ？ タツナは俺の前に行かせたけど……」

「えっ？ ……え、でも来てねえぞ……？」

ラグナは確かに彼女を先に行かせてからこちらに来たことは明確に覚えている。

異世界とこの世界を移動中は真っ白なので周囲二メートルほどしか眼では確認できないが基本一方通行なので二人より前に此処に戻った彼と最後にゲートに入った彼にいたはずの少女がいなくなる

と、二人の顔は一気に焦燥に駆られた。

「ま、まさか、”拒絶反応”であいつ……そんな……」

「お、おいどうすんだよ！？ お前こんな事になるくらいなら何で彼女を連れてきたんだよ！」

そう言ってルーグはラグナの胸ぐらを掴み、顔を引き寄せる。

「それしかあいつの生きる道がなかったんだ！ あいつは俺と来てくれるって言ってくれたから！」

「落ち着けラグナ」

「生きる道って、確かにあの子はもうあの世界で生きられなかったとは思うけど結果がこんなことに……！ 酷すぎないかこれは！」

「落ち着け、二人とも」

「何だよティト、さつきからよオ！！」

「ゲートを見る」

先程から妙に冷静なティシュトリヤに苛立ちを覚えたラグナはつい声を荒げて言う。

それから次に出た言葉に従って二人ともゲートに視線を注目させると一気に表情が急変した。

生命反応確認。ID読み取り不可能。至急警戒態勢

「うわっ、いきなり明るくなったと思ったたらあたし警戒標的ですか

い
」

アナウンスが終了すると共にゲートが光り、そこから足が出てくるとみるみるうちにその先に繋がっている体、顔の順に姿が現れ、ゲートから小柄な少女が姿を現した。

それは紛れもなく、大きな荷物二つを抱えて出てきた、竜那であった。

「タツナっ!？」

「え? 何その疑問系の声は? てかつラグナって気づかずに置いていくもんねあたしを。って此処どこ?」

大きな荷物二つに潰されそうな姿のその姿を確認したラグナは思わず声を上げ、鬼気迫る雰囲気ですぐさま駆け寄る。その様子に思わず一步下がる竜那。

「ど、どうしたの? ラグナって怖い顔だから、より一層怖いよ?」
「とりあえず無事で良かった。ところで中で一体何があったんだ?」

とりあえず無事を確認したラグナは次に何故彼女が自分よりあとに出てきたのかを問う。

「え、ああ、あのね。途中で転んじやったの。何故かドジっ娘属性が発動しちゃって」

「……………」

どうやらゲート内で何もないのに躓いて転んでしまい、そして小柄なので重い荷物を再度持ち直すのに時間が掛かったとのこと。そしてその隙に隣をラグナが走っていったがそのまま気づかずに行ってしまったのでそのあとを追うことにしたということらしい。

「ま、まあとりあえずようこそタツナちゃん。それにしてもノイレヴェン>誕生の瞬間をこの目で見られるとは……」

「ん？ ノイレヴェン？」

「余計なお喋りは無しだルーグ。とりあえず此処からでるぞ。タツナも付いてこい。荷物軽くなってるから余裕だろ？」

「え？ あ、ほんとだ」

言われてみれば先程重苦しかった荷物がまるで半分くらいの重さになったかのように軽くなっていることに気がついた竜那は驚くが、前の二人がこの部屋の外へと向かい始めたのでその理由を聞く前に慌ててそのあとを追っていった。

ファング8とレッグ9はクロー2を医務室に運ぶために先に行ってもらったので既に解散していると言うこと、そしてどうやら此処は『アクリオン』という国でその軍の地下だということはラグナの説明で大体分かった。

そして通路を三人で歩いているとすぐにあるものが前に立ちはだかった。

それは天井までみっちりと届いた透明なガラスのようなものが壁になっており、しかもまるで水密扉のように分厚く中にはいるためのハンドルもごついものになっている。

そしてその脇にはダストシュートのような投降口が大小二つ付いた壁がある。

さらにガラス扉のその奥には個別のロッカーが並んでおり、その奥にはまた別の扉がある。

「何コレ？」

「ここで消毒すんだよ。一応俺たちは異世界では大丈夫なんだが悪いモノを持ち込むと危ないからってことでこの部屋で消毒殺菌を行うんだよ。ほれこういときは男が先に行くからお前は後ろ向いてる。それと持ち物はでかい方。そして脱いだ服はその脇の小さな方に入れとけ」

「あゝあ、レディファーストって言葉を此处で活用して欲しいよな」

「お前みたいな奴がいるからそういう風に決められたんだろうが」

そう言いつつラグナはハンドルを開けて扉を開くと襟に手をかけ始める。

ルীগもそれに続いて襟に手を掛けると背中 of ファスナーを一気に下げると男らしい鍛えられた背中が露わになる。

あとは女性ならば思わず赤面で顔をそらすように、二人は文字通り戦闘服を脱ぎ去って真っ裸になると小さな投降口に突っ込み、竜那の荷物二つを大きい方に突っ込むと開けた部屋に入り、ハンドルを締めて密閉する。

それから壁にある赤いスイッチを押すと一瞬でガラス板で挟まれた空間が壁から噴出した液体で真っ白になり、十秒後に噴出が終了すると二人はずぶ濡れの状態でげんなりした様子で口に入った消毒液を吐き捨てると真ん前にあるハンドルを絞り、そして開けてから出ると用意されたタオルで体を拭きながらそれぞれ自分のロッカーに向かう。

そして各自、軍服を着ると竜那に消毒殺菌した服を持ってこさせるようにしておくから外で待っていると伝え、せっかくのイベントを親指を噛んで名残惜しんでいるルীগと共に部屋の外から出て行った。

残された竜那はまず自分の最後の荷物二つをラグナと同じように入れ、それから監視カメラとか人がいないかをちゃんと確認してから服に手を掛け、脱ぎ始めた。

それから文字通り全裸になり、自分の体を唯一色んな意味で護ってくれてた服を投降口に渋々と入れるとハンドルを絞って部屋の中に入り、何語か分からない文字で書かれた赤いスイッチを押すと壁に付いている噴出口から一気に消毒液体が噴き出し、体の隅々まで猛烈な勢いで洗い流す。

そして約十秒後、前髪をダラーンと下ろし、かの有名なホラー映画のような姿になっていたがすぐに体を振るわせ、ハンドルを絞って部屋を出るとタオルを手にとって体中を拭き取り、そしてタオルにくるまって服が届くまで待つことにする。

「うーむ、あたしもこの消毒は好きになれないね」

そんなことを呟きつつふとある危険性に気がついた。それは、一体”誰”が自分の服を持ってきてくれるかという点であった。

（ちょっと待ってよ。あたし今タオルしか纏っていない身一つの乙女だよ？）

そう心の中で呟きつつ誰が一番無難なのかを考える。

ルীগは、まあラグナが止めさせそうだから危険性はない、でも

ラグナだつて一応は信用できるけどやっぱ男だからイベントが起これないと言い切れないし……もしどっちもじゃなくて、此処つて軍らしいから男しかないなさそうだし……もしかしてあたし今、何気に危ないシチュエーションじゃない？

そう考えているうちに扉の開く音がし、反応が遅れた竜那はバツと自分なりの警戒態勢に入る。

そこで見たのは意外や意外、綺麗に畳まれた服を持った竜那の歳と変わらないほどの金髪の少女がそこに立っており、服装はもはや軍ではなくラフなスカート姿であった。

腰まであるふんわりとした金髪に碧眼、どこか和服が合いそうな外人美少女。

さすがに予想を裏切られた竜那はポカンとし、そしてその少女もタオルにくるまっただけの全裸の少女に驚いた様子で互に見つめ合ったまま暫く。

「あ、あのお……？」

「● □ ？」

ようやく少女は警戒心を解いたのかこちらに歩み寄りながら話す。

「え、えつとおその服ってあたしの？」

「× ？」

（言葉分かりませーん。何語？ 英語？ 英語苦手だからどっちに

しろ無理ですハイ)

「**▼&\$#」

竜那は言葉が通じない相手に困惑するが少女の方にはこやかに微笑みながら竜那にソツと服を渡すと軽く手を振ってあっさりと部屋から出て行ってしまった。

残された竜那は礼も言わずまるで風のように去っていつてしまった少女の背中を見送っていたが、やがて服をさつさと着るとその部屋から出た。

部屋を出るとまた扉があり、それを開けて出るとようやく待っていてくれた二人の姿を見付ける。

先程服を届けてくれた少女の姿はもうなかった。

竜那は礼も言えなかったことに少し肩を落とし、そして二人の元へ行くとまずラグナに訊ねた。

「ねえねえラグナ。さっきの女の子知らない？」

「あ？ ああソフィアのことか。あいつならもう行っちゃったよ」

「あゝもう、言葉通じなかったばいからお礼言い損ねた」

「あとで言っておいてやるよ。さてタツナ、お前はこれからちよいと検査を受けてもらうからな」

検査、というと病院とかでやるあれかな。そう考えた竜那はげんなりとした様子でため息をつく。

「消毒のあとは検査ですかい。まだ夕飯も食べてないのに」

「異世界から人間を連れてくるのにはそれなりに手順が必要なんだ

よ。夕食はそのあとだ。それとお前が検査を受けている間に俺もちよっとした用事が入っているからまたこの場を外す。そしたらまた会おうぜ」

「んじゃ俺も二尉と曹長みたく報告書を書かないといけねえからタツナちゃんじゃあな、あとクロー2バツカス一尉は大丈夫だそうだ」

「あ、そうなの？ よ、よかった……あ、ルীগさんお疲れ様でした」

クロー2ことバツカス一尉が無事だと言われた竜那はホッと息をつくとルীগは二人に手を振ってその場をあとにした。

そして彼がいなくなったあとにラグナは顔を上げ、天井のスピーカーに向かって声を掛けた。

「んじゃあよろしく局長」

「はいはい。それにしても二佐ほどスーツボロボロにしてくる人なんてそうそういないわよ？」

「え？」

すると今度はルীগと入れ替わりに扉から一人の人物が部屋に入ってきた。

その人物は眼鏡を掛け、白衣を纏い、白いバンダナをした二十代ほどの女性でどこかしら明るい雰囲気を感じていた。そしてこちらに近づくと早速竜那に気がつき、

「おっ、この子が三年ぶりの<ノイレヴェン>なのね？ えっと、

報告には記されていなかったけど名前は？」

突然の登場に彼女は困惑するがすぐに名を言う。

「あ、え、ええつと、たつ——『リュウナ』です」

「！？」

「そつかありユウナちゃんって言うのね。じゃあ二佐、今からこの子の検査とあんたの『太陽と影』^{ソル・イ・シンブラ}の調整を行うから上の人たちに叱られてきなさいね」

「うわつ、嫌な言い方だな。あ、あとな——」

「分かつてる。この子の専用の一式を揃えてやってくれでしょ？」

今度良い酒期待してるわよ。じゃ、リュウナちゃんこっちに来てね」
「はい」

そう言つて局長は自分に付いてくるように言い、一応彼女の様子を見て信用できると判断した竜那も素直に従つてその後を追う。

残されたラグナは少しの間その場で佇んでいたが、やがて首を傾げるとそのまま扉の方に向かい、

「いや、そういえば何であいつ、違う名前を教えたんだ？」

「分からん。だが敵意ある行動からではないから大丈夫であろう」

相棒からの言葉を聞き、ラグナは考える前に扉の方へ向かい、そして出て行った。

アクリオン中央基地第一会議室に、ラグナは来ていた。

そして彼の前にはブラット1のコード名を持つフレイアが席に座っており、そして彼女の前では立体画像で映し出された、それなりに年を取った人物がずらりと席に座るようにして全員この二人に視線を向けていた。

彼らは、いわゆる<アクリオン軍>の幹部達である。

『またお前か、ラグナ二佐』

幹部の一人、丸坊主で強面の五十代ほどの男が重い声で言う。

『前回から年月は経つモノの、またお前の判断で異界の人間を連れてきたそうだな？ しかもその前はこの少女を護衛したそうじゃないか。それによって作戦に支障が出たらどうするつもりなんだ？』
「グラット將軍。彼は軍法で定められたことに従って彼女を連れてきたのです。それに今回は迅速に作戦を終了し、一人の負傷者が出ましたが全員生還いたしました」

『フレイア三將、それは結果オーライというものだ。報告によるとバカス一尉はこの少女を非戦闘区域に逃そうとし、そしてこの少女を護衛した結果が負傷に繋がったとしか見えないではないか。そしてそれを命じたのは紛れもなくラグナ二佐であることもな』

そして鋭い視線をラグナに向けると、彼は後ろに手を組んだ休め

の姿勢のまま言った。

「今回、彼女は使徒に狙われる身で自分はそれを保護したまでです。それは使徒が彼女に相当な執着心を持つているからだと判断し、結果それが迅速に任務完了に繋がることも判断した結果でもあります。もし彼女が殺害されていたならば、任務続行不可と判断せざるを得なかったでしょう」

今回の任務の内容、使徒の狙い、そして彼女が何故連れてこられたのかの詳細は報告書にて既に幹部達の手渡しているため彼の言っていることには頷ける点が多い。

『それは分かっている。私が言いたいのは今後もこのような状況、例えばだ、お前は使徒に人質を取られたりしたら大人しく降参し、殺されるのか？ 違う、あくまで任務完遂のためにその人質の命を無視し、殲滅し、歪みを鎖さなくてはならない。お前の自己の感情に揺るがされ、その所為で味方が全滅したらどうするんだね？』

（あーもう、うっせえじじいだな。あんたの毛根が全滅してるじゃねーかコノヤロー）

ラグナは心の中では言ったら何が起こるか分からない発言をしつつ、ただ押し黙る。

『そこまででどうだグラット君。君の言っていることは確かに的を得ているが彼は正しい判断の下で行なったに過ぎないのだぞ？ それに今回は彼のおかげで作戦が終了したのだから苦勞をねぎらうべきであろう』

すると先程から遣り取りを聞いていた眼帯を付けた將軍が声を掛

ける。

『しかし、彼は味方を負傷させてまでも連れてきた、まだ正体の分からぬ少女を我々の心臓部に持つてきたのだぞ？』

『報告を見る限りでは分かんが、彼女は魔力も武器も扱えない少女だそうだ。それにこんなことは一度では無かるう。これは我々の戦力を向上させる貴重なものだとは思わないかね？』

『しかし……』

『それにどうせ、この少女にはこの先あるリスクを背負ってもらうのだから焦る必要はない』

ようやくグラット將軍は押し黙り、そして眼帯を付けた將軍はラグナに目を向け、

『君は優しい、だがグラット君の言うとおり感情だけで判断しては何時かは自分の身どころか世界が滅ぶことを忘れないで欲しい。今回は君の優しさが任務完了に繋がったが次回はより慎重に考えて行動し給え。今回は大目に見るということだ』

「はっ、了解です」

『ふふっ、本来は君に敬語を使われる”立場”ではないのだがな。他のみんなはどうだ？』

隻眼の將軍はぐると他の高位の軍人に声を掛けるが、誰も反対意見など出さなかった。

『そういうわけだフレイア。今回の働きには感謝する。二佐にも期待しているぞ』

「ありがとうございます。お父様」

『うむ。そして二佐はその少女の護衛を引き続き行え。良い意味でも、悪い意味でもね。では諸君、今回の会議は終了だ。ごきげんよ

『う』

立体映像による中継の遠隔会議が終わり、がらんとした雰囲気の中、二人は残された。

「とりあえず、ご苦勞様でしたラグナ二佐。ごめんなさいね、急にあなたを送り込んだりして」

「はっ、三將と上層部の判断ならば自分は否定する要素はありません」

「かと言いつつ散々文句を言っていたではないか」

「うっ、……おめえはもう少しこう、誤魔化しをな……」

「……………その」

フレイアは躊躇いがちに言った。

「す、すいませんでした。前回からほとんど日が経っていないのにボクと上層部の判断であなたを送ってしまったて……」

「……いや、今回は、その……結果的には、今ではすごい良い判断だと思ってるのは確かです」

「そう、ですか？」

「あなたのおかげで、一人救えたんですから」

ビシッと敬礼をし、真っ直ぐな瞳で見つめられたフレイアは、恥ずかしくなったのか視線をやや横に向け、

「で、でもボクはいつもこうして皆さんに指令や作戦を伝えることしかできない身です。それに実際救ったのはあなた、ラグナさんですから……そろそろ彼女を迎えに行ってあげたらどうです？ マリン局長から先程検査終了との連絡が入りましたから。調べた結果ではウィルス兵器や危険な細菌等はなく、完全に”馴染んでいる”ようですから」

「はっ、では失礼させていただきます」

「……そんなに畏まらなくてもいいのに……それじゃ、お休みなさい」

そしてラグナは礼を一つしてから、会議室から出て行った。

「……あゝあ、二人つきりっていうこの状況は結構良い感じだったのに」

フレイアはそう言って軽くため息をつき、ファイルケースを持ってから次の仕事に取りかかり始めた。

ここ精密検査室では一人の少女が約一時間もの検査を受け、そしてようやく終了したところであった。

「えっ……荷物明日まで返してくれないですか!？」

「ごめんね。でも万が一に危険物が入っていたりすると大変でしょう？　いくらあなたがただの女の子と言っても誰もすぐに信用しないのは仕方がないの。特に此处ではね」

そう言っコップに入れた飲み物を椅子に座っている竜那に渡した局長ことマリンは先程フレイアに連絡を入れたばかりであった。その結果、竜那は体温、脈拍、血圧、それと精密検査等や検疫などで異常はシロとのことで彼女は事実上は危険性ゼロのお墨付きを出されたのだ。

ただしまだ外には出せないと言うこと、そして先程預かった荷物の点検をするなどを告げられた竜那は、特に後者にショックを受けたのかチビチビと不思議で甘い飲み物を飲む。

（むう、何かしら弄くられて使えなくなったらどうしよう）

「でも一応あなたはこれで仮釈放ってところかしらね。明日また検査を行うから今日は空いている部屋で寝てもらうわね。おっと、勝手に抜け出すことは不可能よ？　此处は最強のセキュリティが敷かれているから」

「いや、抜け出すつもりないし」

「……………大変、だったわね」

急に声のトーンを落とした彼女に竜那は顔を向ける。

「あ、ごめんね。一応あなたがどう言った経緯でこちらに来るハメになったのかを見たから……別に同情できる立場じゃないのは分か

つてるけど……」

「ん〜〜？ いや別に気にしないでいいよ？ 此処の人たちあたしのこと見えてるようだし、覚えててくれるし」

実際、竜那は嬉しかった。自分のいた世界では既に彼女を認識できる人間など一人もいなくなったのだから、こちらの世界の人々が自分の姿を捉えてくれるというのはなんともありがたいことである。

「そう？ あ、そういえば二佐とはどうなの？」

「ラグナ？ ん〜、最初は怖かったけど話しやすいし、ノリがいいから結構良い人だと思う」

俺と一緒に第二の人生、始めねえか？

こんなドラマチックな台詞を彼が言ってくれたことは恥ずかしかったのであえて口には出さなかった。

「ほうほう、まあ、あいつはそんな奴だからね。おつ、噂をすれば彼がご到着」

マリンの言うとおり、丁度ラグナがドアを開けて入ってきたところで、二人の姿を確認するところらに向かつて歩み寄ってきた。

「ご苦労さん二佐。そういえば私の作ったサプレッサーどうだった？」

「ん？ ああ中々良かったけど。そういえばあれって水で性能高められるようにしてあるのか？」

「うん、まあ今回は合格点ってところかしらね。ほい、これが例の鍵よ」

番号の付いた鍵を二つ振ったマリンからラグナは受け取ると、竜

那に付いてくるように言い、そして竜那はマリンにお別れの挨拶を
すると、

「じゃ、お休み。明日またお話しようね」

まるで友人同士の約束のような感じでそう言い、二人はその場を
あとにした。

二人が付いた場所はどうかこの敷地では端っこの方らしく、ド
アが等間隔に配置されている。

いわゆる隊舎のようなものでもらった鍵は隣り合わせの部屋同士
になっていた。

「そういえばタツナ、何でお前、局長に嘘の名前教えたんだ？」

「ああ、あれね……うん、何でだろ？」

「何でだろって……それ相応の理由がないとあとが面倒だぞ？」

「いやね。まあ第二の人生が始まるのならあたしの名前を別の呼び
方にした『リユウナ』でもいいかなって思ってたさ」

それは、外見からは分からないが彼女なりの決意だと彼は捉えた。
元の世界に帰れない以上、元の名前を変え、彼女は別の人間、つ

まりこの世界の人間として生きていく覚悟が決まっているのだろう。

「じゃあ、俺はこれからお前のことリユウナって呼べばいいのか？」

「ううん。ラグナはいつも通りでいいよ」

「……変な奴だな。それじゃ、とつとと部屋に入ってシャワー浴びるなりしてさつき渡した飯食って寝な。疲れたろ」

「んじゃあそうさせてもらっ」

「俺は隣にいるからドアの鍵は開けておくから何かあったらすぐ来いよ。じゃ、お休み」

「うんお休み」

そして彼らはそれぞれの部屋に入り、各自したいことをし始めた。竜那はさっそく寢室のベットを確認し、それからシャワー室を発見すると服を脱いで浴び、タオルで体を拭いてから貸してもらった寢間着に着替えると渡された夕食の包みを開く。

中身は野菜と肉を挟んだパンが二つ、何かしらのタレを付けているらしく食欲をそそる匂いがしたのでそれをハグハグと食べ、お腹が膨れたところで少々気は進まないが、早めに寝ることにした。

明かりを消して寝てから三十分後、竜那はちらりとドアの方を見た。

先程自分はおそこから入ってきた。

自分は、つい昨日まではごく当たり前の世界にいたのに、この世界は違う。

この世界の常識など何一つ付いていない自分は、ちゃんと生きていけるのだろうか。

隣の部屋からは既に気配は消えていた。彼もまた疲れていたのので寝てしまったのであろう。

そう思ったとき、こういうときこそ親って必要なんだな、と思った。

だけど、もうそれはいない。

竜那は今すぐ隣の部屋に行きたいという衝動に駆られたが、迷惑が掛かると思い、その寂しさを紛らわせるように布団にくるまって目を閉じた。

一方隣の部屋では――

（もう少し、そばにいてやった方がよかったかね？）

「それは分からない。何かあったらこちらに来るように言いつけてあるだろうに」

（それもそうだな。……明日はいろいろしてやんないとな）

「それでタツナの氣を楽にしてあげろ」

（おっ、初めてあいつのこと名前で呼んだな？）

「もう彼女はただの他人ではないからな」

（ああ、じゃ、何かあったら起こしてくれ）

「もう起きておる」

「え？ あ、ああ、なるほどな」

ラグナは上半身裸の状態でベットから身を少し起こし、そしてドアの方を見た。

そのあとドアは静かに開けられ、誰かがそこに立っていた。

翌日、竜那は眼を醒ました。時刻は割と早いらしくまだ朝日が弱い。

「んあゝゝ……そつか、あたしもう違う世界に来てたんだね」

目を擦りながら自分がどのような立場に立っているのかを改めて確認するとベットから降り、それから隣にいる彼に会いに行こうと思ひ、意識が完全に覚醒してから寝間着のまま部屋を出た。

部屋を出て三歩、ドアの前に着くと取っ手に手を掛け、にやりと笑う。

（ふっふっふ、ラグナはまだ寝ている模様。今からよくあるゲームシチュで主人公をヒロインがダイブして叩き起こす方法を実行いたしまゝ。さーてどんな顔するかなゝ？）

朝っぱら悪戯を考えついた彼女はそのまま取っ手を捻り、空いていることを確認するとソーッと音も立てずに部屋の中へと侵入を開始。

そして音も立てずにドアを閉めると抜き足差し足、そして剣道で鍛えたすり足で泥棒のように彼がいる寝室へと向かう。

そしてこのドアの取っ手に手を掛けるといざ突撃準備は完了。
周りに障害物、不確定要素皆無。いつでも作戦実行可能。

（ふふ、グッモーニングラグナー！）

そして彼女はバツとドアを開け、体を滑り込ませ、そしてそのままダイブしようと——そのままの姿勢で思い留まった。

何故なら、確かに彼はベットで寝ていた。

それに軍人のくせにこちらの気配に全く気がついていない完璧な熟睡である。

しかもよく映画とかで見るように彼は下着以外は身につけていないらしく鍛えられた若者の体を晒していた。此処までは格好がどうであれ竜那の予想範囲内、しかし此処に一つ、想定外の要素があったのだ。

それはラグナの隣に——下着姿の少女が気持ちよさそうな寝息を立てて彼に寄り添うように寝ていたのだ。

「……………え」

「あ？ 何だ音が……………タツナ？」

ようやく騒がしい事に気がついたラグナは上体を起こし、そして万歳の姿勢のまま固まっている竜那の姿を確認し、それから何故彼女が固まっているのかその視線を追うと、

「……………あ」

彼も同じく哑然とした表情になり、同じくその場で固まってしまった。

気まずい沈黙が流れること数分、ようやく竜那から口を開く。

「……昨夜は、お楽しみいただけましたでしょうか？」

「いや、違うぞ断じて。お前勘違いしている」

「いやだって……まあ、これでラグナも普通の男だってことが分かって、しかも明らかに年下の子が好みだってことが分かったから」

「だから違うって言ってるだろうがコノヤロー」

「じゃあ、その子は……？」

「……………俺の妹だ」

「え」

ラグナからそう言われた瞬間、竜那の表情は明らかに固まった。まさか彼に兄妹がいるなど思いもなかった。

しかし竜那の思考は人が持つ常識を一段階越えているのでこんな発言をする。

「あ、なるほど妹プレイね。まさかラグナがそんなマニアックな――」

「こらアアア！ お前その思考から離れやがれ！ 何でもそつちに結びつけようとするな！ それと完璧に妹だ！」

「う、ううん……」

二人の遣り取りで目が覚めたのか、むっくりとラグナの横の下着姿の少女は眼を擦りながら身を起こす。

肩で切りそろえたショートヘア、あどけなさを残した可愛らしい幼顔で——右頬にX字の傷跡がある顔で見た目から十代半ば、竜那と変わらない年のようにも見える。

そして少女は眼を擦り、ようやくぼんやりとした視界を確保する。それからまず最初に目に入ったラグナに気がつくと言わずな声で軽い朝の挨拶をする。

「あ、おはよう、ううん、ん？ あれ？」

それからようやくこちらを見ている小柄な少女に気がつくと言わずに首を傾げ、

「……あれ？ この可愛い女の子……だれ？」

「あ、ああ、こいつはな昨日——」

と少女がラグナにこちらを見ている彼女のことを尋ねる。

だがその瞬間、反射的に竜那は自分でも褒めてあげたくなるような悪戯な考えが浮かんだのか、それはもう嫌な笑みを浮かべるとラグナが答えるよりも早く自分の正体を明かす。

「ふふ、実はあたし、ラグナの女なの……」

わざと色っぽく体をくねらせ、頬を朱に染めつつ恥じらいを見せつけてみる。

すると少女は竜那の言葉を真に受け、眠気など一気に吹き飛ばしたような表情になる。

「え？ あ……あうあう……あっああ！ お、お兄ちゃん！？ あ、ああああ、も、もしかしてえっ！？」

慌てまくる少女。もちろんラグナも当然慌てる。

「ちよつ、ちよつと待った！ 違う！ お前が想像していることは、絶対間違っているぞっ！？ お、おい、タツナ！ お前、そういう誤解を招く言い方は……！」

「一晩中寝かせてくれなかったの……今でもあのときの感じたことを思い出すよ……あ、ああん……だ、だめえ……（にたりっ）」
「確信犯！？」

「あうあう……っ、ついに、ついにこんな幼い女の子と……！」

「いや！ 真に受けるなよオオオ！ てかつそんな男だと思ってたのかおめエはっ！？」

「すごく情熱的に愛してくれて……あたしの初めてを強引に奪って……もう、ラグナったら……もうあなたのしか、受け入れられないの……」

「い、いやあああ！」

「やめろオオオオオ！ 嘘の夜物語を作るのやめろオオオ！」

「よほどお盛んだったらしく色んなことを……もう、ラグナのテクニシャン」

「いやあああああ！」

「いい加減にしやがれええええ！ 分かった！ 俺は此処で今その妄想を破壊する、いや爆破する、いや切り裂いて俺の無実を証明す

るんだ！！」

（ふむふむ、やっぱりラグナは面白いし、この妹さんもナイスリア
クシヨンだー）

自分の言葉にすっかり踊らされている二人を見ながら、竜那は楽しげに事が治まるまで傍観していた。

08話：人生の始まり（前書き）

初めに今回は結構ややこしい文章であることを失礼いたします。

08話：人生の始まり

『そうか、ラグナが帰ってきたか』

「相変わらずですよ彼は。しかしよく頑張ってくれます」

早朝、一本の電話による二人の会話が將軍の自室で行われていた。自室で朝日を浴びながら壁に凭りかかって話しているのは昨夜会議でグラット將軍を宥めたフレイアの父、エリオスⅡゴールクである。

そして電話の先の相手は盗聴防止のためか電子音に変換された音声で話されていた。

『それで、二佐が連れてきた少女が無事来たというのかね？』

「左様で。不思議なモノです。彼はどうもそういう縁があるようですね」

『そうか。では私は今からある人物に会いに行く。引き続きくノイレヴェンとなる少女の動向を見守りつつ、我が国アクリオンの今日を任せたぞエリオス將軍』

「ええ、そちらも気をつけてくださいね。元帥」

そしてブツツと通信が切れ、エリオス將軍は電源を切り、それから部屋を出て行った。

「と、とりあえず着替えてくるから待っててねお兄ちゃん、リュウちゃん」

「分かった」

「うんー」

ある一室の隊舎の中、そんな遣り取りが話され、一人の少女が小さな個室へと向かう。

その少女の名は——マナ。ラグナの実の妹である。

タレ目で笑顔が可愛く、互いに誤解を解いた竜那（彼女にはリュウナと名乗った）とは女の子同士なのですぐにうち解け、マナは彼女のことを簡単に『リュウちゃん』と呼ぶようになった。

そんな彼女は右頬の×字の傷もその笑顔の前ではチャームポイントになるくらいの可憐さで、名前もこの世の全てから恩恵を受けられるという意味を込めての『万物の力^{マナ}』だということを嬉しそうに語ってくれた。

そして現在は兄ラグナと二人暮らしだということ。

（うゝむ、両親はどうしたのかな？ でもラグナって大人の人だし妹のマナさんが住み込んでいるっていう可能性もあるしな！。まあ今は聞かない方が無難ってとこだろうね）

二人の現状を聞いて一応複雑な事情があるのかどうかは定かではないので竜那は特に言わなかった。

気になったところがあるとすれば見るからに一人暮らしの男の家に住み込む女子高生（歳は一緒らしいので竜那視点で）という世間からかなり邪推を受けそうなシチュエーションというところであろう。

しかしこの世界の常識が皆無な彼女はこのこと（？）についても口には出さなかった。

「いやー、まさかラグナにあんな妹がいたなんて。しかもミルキーボイスで『お兄ちゃん』だよ？ それと絶対天然キャラ系だよね。それにしても何故ここに？ 軍の基地だよねここ」

「一応あいつも関係者みたいなもんだから許可証は持たせてる。それと昨日俺が帰ってきたのを知ったからわざわざ来たんだとさ」

そう言いつつ既に軍服姿に戻っているラグナはベットから立ち上がる。

「それにしたって兄妹なのに下着姿で一緒に寝るなんて……結構危ないね」

「そう言われてもなー、あいつ見た目通り寂しがり屋だから他の部屋を空けようかつつても此処が良いって言ってどかなかったから仕方なく——」

「仕方ない結果がこれですかい。どこのギャルゲーですかい。まったく、うらやま……けしからん」

「おい、今明らかにお前の方が危険発言に聞こえたのは何故ですか
コノヤロー？」

こんな会話をしつつ今日の予定をラグナは竜那に伝える。

今からもう一度検査をするため朝食は抜く。

そのあと無事にシロだと改めて判明すれば竜那に伝えたいことを
伝え、会わせたい人のところへ会いに行く。

全て合わせて三時間程度。このことに竜那は少し不満そうであつ
たがすぐにこくと頷いて了承を得ると、丁度マナが私服姿でこち
らにやって来た。

この世界は五つの大陸に分けることができる。

『ピロシアン』、『クリスタロス』、『クシフォス』、『ルナヴ
アイス』、そしてこの国『アクリオン』と。

因みにこれらは大陸名であって、その中でさらにいくつかの国に
分けられているが、その大陸で中心となる国は大陸名と同じになっ
ている。

現在、竜那がいるこの大陸では中心となる国アクリオンは他の四
つよりも水資源と科学技術が優れており、自然豊かな国ルナヴァイ
スに次いで創世人^{オリソンデ}が多く、契神者の数も多いとのこと。
^{コントラクター}

そしてその五つの大陸があるこの世界には、魔法と呼ばれる不思
議な力が存在している。

その魔法とはこの世界に於ける万物に宿る力『マナ』、通称『魔
力』を消費するというよくゲームとかでありがちな『発動条件^{ギブアンドテイク}』で

使用可能になるのだがこれはあくまで“マナ”という名称が付される生命の根源と言われる特殊なエネルギーを用いることで呪文等の手段で対象に働きかける（つまり魔力があれば誰でもできる魔法ということ）魔法であり、他には、

個人の空想や願望をそのまま具現化させる魔法、

オリジナル

創世人の力を一部を発現させる「神秘要素」の高い魔法、

『高レベルの科学』により現代技術に組み込んだ魔法、なども存在するという。

（うゝむ、そういえばラグナって魔法使えるとか言ってたもんね。昨日今日で軍基地っていうシニールな光景の中にいたもんだからそんな幻想的なものすっかり忘れてたよゝ）

竜那はラグナからこの世界の大まかな常識を教えられ、それを反芻していた。

因みに彼女は今現在、ガウン一枚姿で円筒形の精密機械の中で横たわっており、目の前に見るのは艶を帯びた壁面だけで、時折機械の台座が前後に動いて低い機械音を出していた。

『気分はどう？ リュウナさん』

「全然大丈夫ですー」

外から白衣を着た女性から声が掛けられたので適当に返事をする。今日は昨夜が割と遅い時間だった所為もあって局長以外の研究員らしき白衣を纏った人々がゾロゾロと来ており、竜那の精密検査を

確実な手順で行なっているところである。

昨日検査したんだからこれ以上はいいのに」

そう彼女は思うが普通異世界から来た人間に対しそんな甘い検査で通っていたら実際とんでもないことになるので手は抜けないのだ。

「うーむ、これが今回の使徒の使っていた武具か」

一方、局長ことマリンは分析室で先程ラグナから渡された武器を手袋をした手で優しく扱うようにして触り、しげしげとその眺めるようにして見る。

目の前にあるのは鉄の芸術と日本では評されているという抜き身の『刀』。

美しい銀色の刀身と彫刻のような柄が武器としての迫力以外のモノも一緒に醸し出しているかのようなこの芸術品と呼べるものは、『相手の能力を突き破る』『攻撃すると回数が増える』という変な能力付きである。

しかし注目すべきはその奇妙な能力ではなく、今まさに目の前に“存在”していることであつた。

「……<ノイレヴェン>になる可能性を秘めた人達が、コレに注ぎ込まれてしまっているのね……」

使徒が使用する武具は彼らの一部のようなものである。

それなのにこのように持ち主が消えても残ったままだというのはごく稀なことである。しかし気になるのはこちらの世界にやってきた少女である。何しろ三年ぶりなのだから。

マリンはこれを渡される際、ラグナがこの武具について述べたことを再確認するように呟くと、ソツと目の前の機械の台に置き、それから電源を入れて調査に取りかかり始めた。

因みにラグナはマナと部屋の外で待っていた。

私服姿になったラグナは待ち時間を利用して報告書にせっせと書き込んでおり、マナはその隣で待っているのだが何かしら深刻な表情で今は黙っていた。

そして竜那の方は無事検査は終了し、結果待ちと言うことで彼女は元の私服に着替えて部屋の外に出た。

「うおーす、血を取られたぜえ」

二回目の検査は昨日より本格的なので採血という注射の苦手な竜那はその試練を何とか乗り越え、そして二人を見付けるとふらふらと二人に向かって歩く。

「おーすつご苦労。まあこうでもしねえといけないのは仕方がねえんだよ」

そう言っただけでラグナは書き終えた報告書を束ねて両膝でトントンと整える。

「ま、そうなのかもしれないけどよく漫画とかでは異世界召還とか迷い込みはこんな検疫はしな——ん？　どしたのマナ？」

二人の元に到着し、竜那はラグナの隣で顔を俯かせているマナの存在に気がつく。

今朝はあんなに元気だったのに、今はまるでこっぴどく叱られて黙り込んでしまった子供のように大人しくなっている彼女にさすがの竜那も見過ごすことはできない。

それとついでに彼女は肩を小刻みに振るわせており、明らかに泣いていることが分かった。

「え？　ちよつ、マナどうしたの？」

「りゅ、リュウちゃん……？」

竜那が声を掛けると気づいていなかったのか、マナはその声に反応して顔を向ける。

その顔は既に涙で濡れており、さながら雨に打たれる子犬のような表情であった。

「ねえ、ラグナ何かしぬぐはあっ!？」

彼女が泣いているのに平然としているラグナに理由を尋ねようとしたところ突然身体が引つ張られる。

そして彼女の小柄な身体が思いつきり抱きしめられ、思わず声が苦しいと出る。

抱きしめているのは、もちろんマナである。

「ごめんね……私、知らなかった。リュウちゃんがくノイレヴェン>だつてこと……」

「え？」

「辛かったね……ごめん、ごめんね……」

竜那は突然涙声で抱きしめてきた彼女に驚き、ひたすら謝ってく

る。

なので何がどうなってるのと竜那はラグナに説明を求めると、彼は報告書の書き損じがないかどうか確認しながら顔を向けずに言った。

「一応マナにもお前が異世界の人間であることを伝えたんだよ。そいつにも知る権利はある。安心しろ、お前の存在は俺たち特殊戦闘班^{sc}や高官のようなお偉いさんしか知らねーようになっているからな」「えーっと……あたしってそんなに特別なの？」

「そういうこった。何しろ異世界から来たんだからな。ほれ、マナ、今からこいつに会いたいって人が来るからお前は先に戻って『フリーちゃん』の面倒でも見てあげな。寂しい思いしているだろうから」「うう……うん、分かったお兄ちゃん。ご、ごめんねリユウちゃん突然泣いちゃったりして……じゃ」

そしてマナは竜那を名残惜しそうに力強く抱き締めたあとに、兄の言うことを素直に聞き入れると指で涙を脱ぎ取り、その場から立ち去った。

「えーっと……」

「まあ気にするな、こんなこと前にもあったから……っと、お出ましだぞタツナ」

立ち去ってしまったマナにさよならの一言を言うべきか迷っていた竜那にラグナが声を掛け、そして廊下の突き当たりの方に顔を向けると同時に立ち上がった。

竜那も釣られてその先を見ると、確かに人が一人こちらに向かって来ているのが見えた。

そしてある程度距離が縮まると、ラグナはまるでお手本のような背筋を伸ばして敬礼、をするとその人物も軽く微笑み、そして竜那に気がつくと軽く会釈をし、

「どうも、ラグナ二佐とマリン局長から話は聞いていますよ」

一人の可愛らしい顔立ちの女性が、そう挨拶をしてきた。

「つまり……」

竜那は先程ラグナがこの女性についての説明を聞き、頭の中で簡略的に纏めた。

「この人がラグナの上司ってこと？」

「そう、彼女がコールサイン『ブラット1』 特殊戦闘班班長・フレイア三将だ」

目の前に立っている女性は女性用軍服を着て、髪は肩で切りそろえたショートヘアで、まだ大人になりきれしていない顔立ちが印象的で、胸には三将の階級章が光っていた。

「へえ、ラグナ達を統括している人ってバツカスさんだと思ってたけど」

「あはは、特殊戦闘班のリーダーってやっぱりバツカス一尉のよう

な人の方が似合ってますもんね。あつ、そういえばマナさんは？」

「彼女には先に帰ってもらいました。のちのち彼女にも事情は話しますので」

「そうですか、せっかくお菓子のお礼を言おうと思ったのですが」

そう言つて少し残念そうな声で言つたあとに、竜那は拳手して質問する。

「えっと、とりあえずフレイアさんって偉い人ですよ？ でも三将つてどのくらい偉いんですか？」

「ん？ お前の世界にも軍くらいあつたよな？」

「いやちよつと、此処の世界の地位の呼び名がピンと来なくて……」

「ああ、あなたの国では少尉、とか大佐、とかのクシフォス辺りの呼び名の方が浸透しているんですね。分かり易く言えば二佐は『中佐』、私は『少将』って具合ですよ」

「へえー、え、じゃあラグナって結構高い地位にすることになるじゃん」

「なに？ 俺そんな低そうな地位の人間に見えたか？」

「うん。それとさつきからラグナが敬語使つてるのつて何か新鮮」
「即答ですかコノヤロー！」

つまり三尉、二尉、一尉、とあつたら数の多い順から『少尉』

中尉』『大尉』といった具合である。

つまり一が一番偉く三が一番低いと言うことである。

それと中佐と言つたら銃持つて双剣振り回しているのではなく、多くの兵士の指揮官を担当するのではと竜那は自分の頭の中でそう言つが、この世界ではそう言つた常識は通用するかどうか分からないので敢えて黙つてみせた。

「でも“ボク”が三将なんですから、歳が四歳ほど離れている彼が

「二佐でも不思議ではありませんよ」

「ん？ ぼっ！？」

「え？ ど、どうかしました？」

何気なく言ったフレイアに竜那は驚いたような表情で彼女を見る。するとそこから何かしらを読み取ったのか、フレイアは苦笑いの表情で、

「や、やっぱり歳が19歳というのが驚き——」

「“ボク”って言いました？ さっきボクって言いましたか！？」
「え？」

そして竜那はグイッと顔を寄せ、彼女の身体の方をジロジロと見る。

どっからどう見ても女性の体つき、それどころかそこの女より良い身体をしていらっしやる。

一方、身体をジロジロと見られているフレイアはこっちを見ているのは見た目が明らかに12そこそこくらいの少女なのに何だか羞恥の念が湧き上がり、思わず頬を赤くして胸の前に手を置いて隠すようにする。

竜那はそんな彼女を観察するように見たあとにラグナの方に振り返り、

「男娘おやめではなさそうだから……ねえラグナ」

「何だ？ お前さっきから変だぞ？」

先程から自分の上司をジーツと見ていた竜那に対しラグナは怪訝そうな表情で見守っていたので彼女の妙な反応ぶりについて聞くと、彼女はこう言った。

「可愛い妹に、美少女リーダーに、今度は僕っ娘ときましたか。何かあたし、この世界でやっていけそうな気がしてきたよー」

その時彼は、初めて竜那に対して心底呆れた表情で肩を落としてみせる。

「いや、確かに三将の一人称は俺も変だとは思っけだな」

「ちょっ！ ラグナ二佐！ ボクの一人称に対して変だと思っっていたのは聞き捨てなりません！ でも理由ならあります！ なにせ僕が最初に自分のことを最初『ボク』って言ったのがきっかけでお父様やおじさま方は可愛がるだけで文句を言わず、そのあと誰も訂正してくれなかったからすっかり定着してしまっただけですよ！」

「あの三将、何気に父親と上層部の所為にしてないか？」

「……それとも」

急に声のトーンを落としたフレリアは両手に握り拳を作って両頬に当てるようにし、そして上目遣いでラグナを見つめる。

「ボク、って言う女性って……嫌ですか？」

（おおー、何という萌え仕草）

元々可愛らしい顔立ちの彼女なのでそういう子供っぽい仕草は竜那の中では大いに高評価であった。

ただ、ラグナはその仕草が可愛さや心を撥る仕草であったとしてもただ単純に言う。

「いいえ、自分は三将の一人称などに文句を付けるつもりはありません。どうぞご自由に」

そう答えるだけであつた事に対してガクーツとあからさまな仕草でフレリアは落ち込み、『今は結構グラツといかせられると思つていたのになー』と訳の分らないことを呟いた。

「？　どうかしましたか三将殿？」

「な、何でもないです！　とにかく、報告書と許可証の記入は終えましたかつ！？」

「？　はい、こちらに」

ラグナは不思議顔のまま手に持っていた紙の束をフレリアに渡すと、彼女はそれを流し読みし、それからポツケに入っていた判子を取り出して許可証の方に押すとそれをラグナに返し、

「これで一応彼女は二佐の保護下、ということが認められました。

でも今は二度目の精密検査の結果待ちのようなのでそれまでは外に出てはなりませんよ？　それと、お名前はリュウナさんでよかったですね？」

「はい、そうですけど？」

「これから、あなたはラグナ二佐の元で暮らしてもらいます」

「あー、そうです……え？」

思わず固まってしまうが、付け足すようにフレリアは言う。

「大丈夫ですリュウナさん。彼はこれまでに二人のくノイレヴェン>の身を預かった経験がありますし、マナさんもいますから間違つてもルীগ三尉に預けた場合の危険性よりは遙かに低いですから」

「で、ですよー！」

「あはは、……それと、大変、でしたね」

急に表情に影が差したフレリアに、竜那はすぐにどうしてこんな

表情になったのかが分かった。

自分では同情したって仕方ないのに、この少女がどうしてここに来るハメになったのを知っているから、何もかも失ってしまったこの少女に対して同じ立場ではないのでどう言えばいいか分からないけど、何か慰めを入れなくては、そう言った本来持っている優しさから出る表情。

だから分かっているので敢えて――

「でもボク達が――」

「いやだからそんな風に同情して謝られるのは何だか悪い気がするし大体あたしはここに来てあたしのこと見てくれるし覚えててくれるからむしろこっちが嬉しくて申し訳ないと思っているのでそのことは気にしないでくださいねいいですか？」

「え、え？ あ、そうなのですか？」

まるでセールスマンのような口調で竜那が続けざまに早く丸め込むようにしたためフレリアは何を納得したのか分からないまま頷いてしまった。

しかし竜那が何を言いたいのかだけは分かったのでソツと片手を差し出す。

「？」

「でも、困ったことがありましたらできる限りのことは尽くします。あなたはこれからこの世界での生活を歩む身ですから困ったことがあったらまずはラグナさんに。そして彼に相談事ができないようなことがあればマナさんかボクのところに来てくださいね」

「あ、ありがとうございます」

そして竜那は、ギュツと彼女の手を握りしめた。それから五秒間くらい握ったあとに手を離し、フレリアは改めてラグナに顔を向け

ると、

「それではラグナ二佐、幼い彼女のこと、任せましたよ」

「了解」

「……あ、あれ？ 幼いつてフレイアさん？ あたし17歳ですけど」

どうやら彼女は竜那の年齢までは知らなかったようである。

そして改めて自分の歳を告げた竜那に対し、フレイアはラグナに顔を向けたまま暫し固まっていると次の瞬間――

「え、ええっ……!?」

自分と二歳しか離れていないことに対し、思いつきりフレイアは声を出して驚いた。

というわけで年齢が17という新たな情報を書き記した個人情報
を手に、フレイアは竜那に手を振ってその場で去っていった。その
後ろ姿を見送った竜那は彼女の姿が見えなくなってからラグナの方
に向く。

「てなわけで、あたしはラグナの家に居候ってことなの？」

「そういうことになるな。まあ単純に言えば上層部共じょうぶがお前が連れ

てきたんだから責任持つて預かってことなんだけどな」

もちろんそれ以外のことも考慮しての決定も大分混じっているのだがラグナは説明が面倒なので敢えてしない。

「ふーん、そういえばさつきからくノイレヴェン>って呼んでいるんだけど何なの？」

「……………異世界から来た人間のことを俺たちはそう呼ぶんだよ」
「あ、そういうこと……………ってことはラグナってあたしと同じ異世界から来た人を二人預かったことがあるってこと!？」

先程のフレイアの話を遡ればそう言うことになる。ラグナは軽く頷いてみせる。

「ああ、でも今はもう家にはいねえぞ。あと先に言っておくが、あの二人も事情があつてこっちに来た。何れ会うことになるだろうが、今はこっちの常識に慣れるよう努力しろよ」

そう言い終えると丁度部屋の方から白衣を着た人間が出てきたのでラグナは竜那に待つように言いつけ、そちらに向かうと白衣の人間から何かボードに貼られた検査結果を見せながらの説明が始まり、ラグナは何度か頷く仕草をし、そして時折何か質問するかのような短い言葉を言い、そんな遣り取りが数分続いた。

そして検査結果の報告が終わり、ラグナは竜那に言った。

「あー、簡単に言えばタツナは無事二回目の検査もシロでしたー。」

これで俺の家に来てても平気ですよーってことになった」

「随分簡単な報告ありがとね」

一回目同様、二回目の精密検査でもまったく異常は見られず、おかしいところと言えば年齢に対して見た目が幼いくらいなので（年齢詐称の疑いがあつたが精密検査等で証明された）仮釈放から釈放へとランクアップを果たしたのだ。

そして同じく弄くり回されていたであろう四つの荷物も無事戻され、そしてマリンが二人の元に姿を現す。

「てなわけであつていきましたがリュウナちゃんも心理的な面でも身体的な面でも無事潔白が証明されました。まあ、あくまで機械的数値なので完全にそうは言えないけどね」

「ああ、世話になつたな局長」

「でも仕事はたくさんあるしその上あんたの依頼もあるしね。あ、そうそうシオンの奴にあんたのく龍機士ドラゴンヘッズの整備終わったって言うておいてくれない？」

「あゝ治つたのかあいつの。さぞ喜ぶだろな」

「でも表情にはそんな出さないだろうけどね。じゃ、リュウナちゃん」

ラグナとマリンによる少し分からない会話が終わったあと、彼女は竜那の方に顔を向けた。

「調べた結果あなたは問題ないってことなのでこっから出ていって言う許可が出ました。それとあなたの世界と此処の世界は類似点がいくつかあるから、まあ慣れないだろうけどラグナ二佐とマナちゃんいるから頑張つてね」

「どうも、ありがとございますー」

そうペコリと頭を下げたので『よしよし』とマリンは頭を撫で、そして不意に引っ張って顔を寄せると小声で、

（それと今度こっちに来るときはあんたが持っていたソフトらしきものを持ってきてくれない？ 何か調べて興味があるのがたくさん出てきたから）

（……あー、なるほど、局長さんはそういう趣味をお持ちなんですか？）

（いやーこの仕事やってると中々外に出られないからインドア系の遊びしかできなくてねー）

（分かりましたー今度ですね今度）

昨日預けられた竜那の荷物は全て消毒殺菌、そして多数の機械類やデータの詰まったディスクなどが入っていたため一つ一つウィルスなどのチェックが行われたがそんなものはなく、そもそもインターネットに繋がるようなものではなかったので無事彼女の手に戻った。

その中でマリンは彼女の持ち物に興味を示したモノ、一般人は普通は所持していないモノの方について興味が湧いたのだ。

そして女二人による密談は終え、蚊帳の外にいたラグナは終始怪訝そうな顔であったが特に興味はないので竜那に向かって、

「ほれ、行くぞ。局長に挨拶しな」

「ええっと、どうもお世話になりました」

「うん、何かあったらまた来なさいよ。わたしはいつでもこの基地内にいるからさ、じゃあねー」

ラグナと竜那は駅に来ていた。あと一分そこでこの駅にご到着の予定である。

あのあと竜那は荷物の中身を確認し、全てあることを確認してからラグナが二つ持ち、ヒョイツと残りの二つを竜那が抱えるが何故か軽くなっていることに疑問を持ったままだったがラグナがさっさで行ってしまったのでマリンに別れの挨拶をして急いで追いかけていったあとであった。

まず基地の外へ出るためにエレベーターに乗り、そして一階に到着するとエレベーター待ちをしていた一般兵達がラグナの姿を見るなり敬礼し、左右に分かれて道を空けた。

ラグナもその人たちに対して軽く会釈し、竜那もその後についていくがバカでかい荷物を抱えた少女という軍の基地内では一際浮いてしまっているためその光景に一般兵は豆鉄砲を喰らったような表情であったがラグナは気にせず、竜那はそそくさとさっさと立ち去った。

それから簡単な手続き等を終えて何故か車に乗り込んで基地の正面入り口に来て、竜那は驚いた。

まず、先程自分がいた基地は振り返って見るとまるで要塞のように見上げるほど大きいことから始まり、一目でこの基地は大都市のど真ん中に置かれているのだと分かるくらい、大都市がこの基地を中心に展開していたからだ。

そしてそこから10分くらいで駅に到着し、運転してくれた兵士に礼を言ってから戻させ、それから改札口ではラグナが用意したカードで改札口を通り、そして今に至るのだ。

「んー何か東京の進化バージョンみたいなことだねー」

「ああ、確かお前んとこでそういうところあったな。まあ此処は国の中で最大規模の大都市だからな」

そんな会話を交わしている間にも到着の合図が鳴り響き、乗り物はやってきた。

しかしそこに来たのは竜那が思っていた電車のようなものではなく流動体フィルム、すなわち新幹線に近い形状をした構造を持つ乗り物が音もなく滑るようにやってきた。

「おおっ、何か分からないけどハイテクな感じがする」

「ほれほれ、さっさと乗るぞ」

乗り物内の揺れと騒音はほとんど無かった。

あくまで氷の上をスィーと滑っているかのようなそんな走りであった。

リニアモーターカーに乗ったらこんな感じなんだろうなと竜那はそう思って窓から見える景色を眺めた。

外の景色は高い建造物や低い建造物、そして住宅街などと、竜那の世界と比べてそう大きな違いは見られなかった。

ただ、この世界では自分が知っている世界の科学技術など比べられないほど進んでいるのだ。

例えば今乗っているこの新幹線らしき乗り物もそうだし、先程駅の方ではかの有名な宇宙で光の剣を振り回す映画に出てきたドラム缶型のお掃除ロボが徘徊したり、時折高速で流れる外の景色にはソーラーパネルや風力発電等の施設が多く見られ、エネルギー問題もなさそうなのだ。

少なくとも自分の知っている世界からは10年、15年ほどは進んでいる。

しかしこんなことは彼女が知る中ではほんの0・1%にも過ぎない常識なのだ。

「問1：あたしがここで『襲われてますー』と言ったらどうなるでしょうか？」

「おい、他の人の耳に入ったらもう弁解しようのない言葉を言うのだけはやめろ」

暇を持て余した何気ないおふざけで言ったことに対し、ラグナは慌てた仕草で口を塞ごうする態勢に入る。

竜那はもちろん、そうなる自分も困るので怪しい笑みを浮かべながらも黙る。

その様子にラグナはため息をつき、頬杖を突くと、

「……なんて言うか、お前見た目に反して結構変だよなー、性格とかさ」

「むう、それは女の子に対して失礼じゃない？　もしかしてラグナってデリカシーないから女性と付き合ったことなかったりして」

「……！　う、うっせえなコノヤロー。こちとら軍人だからいつ命落とすか分からねーからそういうのは求めないんだよ」

「動揺している上に言い訳乙」

「あ、あれ？　自然と握り拳ができるんだけどなにこれ？　何？

創世人が俺に裁けつて囁いているのかな？」

「うーん、やっぱラグナって少し子供っぽいよね」

「なにをう！？」

（「騒がしい連中だな……………」）

今までずっと黙っていたティシュトリヤはそう思い、この二人の騒ぎが他に迷惑を掛けないかどうか懸念しながら、静かに見守っていた。

そして目的地に着いた二人は降り、改札口を通ると荷物を持ったままそのまま徒歩で出発した。

竜那は車を使わないのかなと思いつつも彼に付いていく。

周りの様子は都市から街へと変わり、休日なのか自分の年齢と同じくらいの男女の姿も多く見られ、その中を歩くことひたすら五分、何やら大きな庭を持つ高級住宅街のような場所にたどり着く。

「な、何？ 何かお金持ちが住んでそーな場所に来ましたが」

「おーいこつちだ」

自分がかつて住んでいた槻汐家の十倍ほどのお値段が掛かってそうな家がずらずら並ぶ中、二人は歩き続け、そしてラグナはある一軒の洋風のお屋敷のような家の門の前で立ち止まった。

「あ、あのもしかしてこの家」

「ああ、俺の家だけど？」

「……………」

「どうした？」

「いや、何か意外すぎて、実はすごいお金持ちだったなんて」

彼のような人物だと少し大きめのマンションに住んでいると思っていたのだがどうやらこの目の前にあるお屋敷のような家が彼の住み家なのである。

しかし何て言うか、三階建ての立派な家でしかもその家を囲むように緑の芝生が生えており、おまけに純白のパラソルとテーブルイスのセットまで置いてある。

さながら大きな白い犬とそれに戯れるワンピース姿の金髪美少女がいそうな家であった。

すると二人の存在に気がついたのように、その家の玄関が開かれる。

中から姿を見せたのは、今朝出会った——マナだった。

「あ！ お兄ちゃん！ リュウちゃん！」

「うーすつ、帰ってきたぞマナ」

二人の姿を確認したマナは喜んだ表情で家から離れた門の方に駆け寄り、鍵を開けて中に入れるようにする。そして竜那の姿を改めて確認すると再会できたことが嬉しいのかやや興奮気味で、

「や、やっぱりお兄ちゃん、リュウちゃん連れてくることにしたん

だね！」

「そういうことだ。これからしばらくは家で預かることになるが、いいかマナ？」

「もちろんだよ！ あ、リュウちゃん早く早く」

どうやら最初から分かっていたらしくマナは竜那の腕をグイグイと引っ張って家の敷地内に入れた。

それから案内されるかのように玄関前まで案内されると竜那はそこで地面に一度荷物を置く。

するとラグナも同じようにして荷物を置き、そして玄関を背にして立っているマナの隣に並ぶようにする。

その姿を見て、竜那は何かに気がついたような表情になると、ラグナが告げるように言った。

「……さて、今日からお前は俺の家の住人になる」

「……うん、そうだね」

ここから自分は、知らない世界と知らない日常に入ることになる。これからは槻汐竜那、ではなくリュウナとしてこの世界で生きていくことになるのだ。

そして今、目の前にいるのは自分にとって大切な存在となり得るであろう二人の人物。

ああ、此処から第二の人生始まるのか、そう思い、しかし自分にもそれなりの覚悟は多少なりともあったので大きな期待と少しの不安を胸に、頭を下げて伝えるべき一言を言った。

「これから、いろいろ迷惑を掛ける気満々ですのでどうぞよろしく

「お願いします」

「どんなよろしくだよ!」

「よろしくね、リュウちゃん」

こうして家の前で、竜那はラグナ家に居候の身として受け入れられることになった。

09 話：魔術とオリソンテ（前書き）

すいません。今回の方がややこしい文章になります。

09 話：魔術とオリソステ

挨拶が済み、早速家の中を案内されることになった。

そしてどうやら土足のままでいいらしいが、日本の生活スタイルが骨の髄まで染みている竜那は何だか汚してしまうのではと気が進まなかったがそれを言っても始まらないのでこの世界の常識に自分を一応合わせておく。

「荷物はその階段の横に置いておきな。休憩した後でお前の部屋を案内するから」

ラグナがそう言って指を差したのは玄関からすぐ左にあった2階へ続く階段だったので、竜那は素直に聞き入れて四つの荷物を纏めて横に置いておく。

そして荷物を置き終えたところで三人は一階の廊下を歩き、突き当たりにある部屋へと向かった。

そこには一目でリビングと分かるほどの広さで絨毯やソファなどがあり、その隣がキッチンになっていた。内装は竜那が見てきたようなごくごくありふれた家庭的な雰囲気で、その様子から彼女はお金持ちの家から家庭的なでかい家へと感覚をシフトさせた。

「何とまあ贅沢な家なんだ……」

「うん、まあ今はお兄ちゃんと二人だけで住んでるから確かに広すぎるかもね」

竜那の言葉に対しマナは苦笑いで頬を指でなぞる。

するとそんな二人を尻目にラグナはドスンと音を立てながらソファーに飛び込むように座る。

「まあ気にすんなタツナ。今日は新しい環境になれるためにゆっくり休めばいいさ」

「と言った本人が一番くつろいでるね」

「いいじゃねえかー。俺だって疲れてんだよー」

そう言っでゴロリと横になり、クロールでもするかのように足はたばたと動かす。

その様子を見て竜那は、まあ彼の言うことには一理あると定義づけ、テーブルを挟んだ向かいのソファーに座り、ラグナと対峙するような形となる。そして同じようにバタ足を試みせる。

その様子にラグナは怪訝な表情になるが、すぐさまハツと何かに気がつくともマナに言う。

「あ、そういえばアカトルあるかマナ」

「それなら今朝頼まれたとおり帰りに買っておいたよー」

「ナイス！ よしじゃあ昼前に一本食うわ」

自身のお気に入りがあると知った彼は寝っ転がるのを止めるとソファーから降りる。

そしてフンフンと鼻歌を交えながら、頼み通りに買ってきてくれた妹の頭を撫でてやろうとすれ違いざまに手を頭に伸ばしたときだった――

唇に妙な体温が伝わった。

唇に伝わるほのかな体温。

ひとえにそれは、唇同士の甘い出会い。

それは突然訪れた春の陽気と桜吹雪のように胸の内を温め、

同時に雷撃のように胸を穿ち焦がれさせ、一生消えない烙印を胸に刻み、

ああ俺は一生消えない病にかかった、どうしてくれるんだよ、

徐々に熱を帯びてゆき、乱れる呼吸にさらに加速する心拍数が俺の理性を蝕んで、

くそっ、これは経口感染だ　どうしてくれるか、あの日からお前のことが頭から離れ（中略

――という恋愛模様などなく、代わりに白い物体が目の前に広がっていた。

「ムイ」

「むい？　……………　って、ああああああああ！！　あいたっ

！？」

ようやく重大な状況に気がついたラグナはその場から飛び退くようにしてたじろぎ、後ろに転んでソファアの角に頭をぶつける。

ラグナが後頭部を押さえ、痛さに悶え苦しんでいる間、マナは何が起きたか分からず自分の横に顔を向けると――

「あ、フーちゃん来てたのー？」

「ムウ」

マナは笑顔で自分の隣に存在しているものにヒシッと抱きつくようにする。

因みに竜那はラグナの叫び声に気がついてソファアゴロゴロを止めて起き上がっていたところであり、それからようやくマナの隣にいるモノに注目した。

「な、何ですかアレ？」

そこで見たのは、

ラグナの顔と同じ位置にある頭とつぶらな瞳に水晶玉を埋め込んだ額がある白い毛皮を持つ子鹿のような生き物がそこにおり、何よりマナが抱きついているのは――首の部分である。

そして首から下の身体はマナの腰辺りの高さに存在している。

つまり、首だけが異様に長く伸びているのだ。

「そついえばお水の時間だっけ？　すぐ持ってくるからねー」

そんな異様さ満載の生物に対してマナはまったく怯えずむしろ物凄く可愛がっている様子で兄のラグナの今の状況には気がついてい

ない様子である。

するとフーちゃんと呼ばれている白子鹿のような生き物はシウルシウルと首を元の長さに戻し、ただの白い子鹿程度に戻ってしまった。

そして飼い主であるマナの袖を甘噛みし、グイグイと引っ張ってお水頂戴と主張する。

「うわぁー何その可愛いの！ ペット？」

見たことのない生き物に興味を示した竜那はソファァーから降り、ラグナを無視して駆け寄る。

「うん！ フーちゃんって言うてとても大人しくて可愛い子なんだよ」

そう言うて触り心地の良さそうな頭を撫でながら猫撫で声で言うマナ。

「こ、この、この、コノヤロー！！」

そして今度はラグナが雄叫びを上げて復活し、ガバツとその場で立ち上がる。

「あ、お兄ちゃん大丈夫？ 頭打ったみたいけど？」

「ああー！！ くっそ！ またやられた！ マナ、いい加減そいつのその癖止めさせてくれないか？」

「えゝ、だって、これがフーちゃんの最大愛情表現なんだよ？ それに唇奪われるのってお兄ちゃんだけだし」

マナ曰く、普段は頬や手を舐めたりして愛情を伝えるという何と

も可愛いしぐさなのでトイレなどのしつけはできるがこれだけは絶対に止めさせないと言うことらしい。

だがラグナは両手をワキワキと動かして目の前にいるフーちゃんと呼ばれた白い子鹿のような生き物に対しドス黒い笑みで一步一步近づきながら宣言するかのように言う。

「はっはは！ フーちゃあん？ —— 貴様は自分の罪を数えたことがあんのか？」

「ムウ？」

「そうか、覚えてないのか……… だったら教えてやらあ！！ 俺の13回目のファーストキスを奪いやがって！！ 俺の青春を返せコラあああああ！！」

「だ、だめだよお兄ちゃん！ フーちゃんはお兄ちゃんが好きだからそうするんだよ！」

「止めんじゃねえ！ 俺はこいつにしつけを叩き込むんだよ！ 知ってるかマナ！？ こいつらデイルガは昔食用にされてた時期が——」

「いやああああ！ それしつけじゃなくて食べようとしてるだけじゃない！ だったら家の中で油断しないでよ！ あ、逃げてフーちゃああああああん！！」

どうやら彼は家にいるときくらいはつい緩みがちなのか戦闘で見せてくれた回避能力や感覚はそこにはなく、額に水晶玉のある首が伸びる子鹿のペットに高い確率で唇を奪われてきたようである。

なのでこのペットの愛情表現によって完全に戦闘態勢に戻ったラグナにマナがお腹に抱きついて必死に止めるという姿を、竜那は日常的に行われている光景なんだなー、と呑気に傍観していた。

「ムイムイ」

「ん？ あ、いつの間に……」

すると不意に横から愛嬌のある鳴き声が聞こえたのでそちらに顔を向けるとフーちゃんが既に横に来ており、フンフンと竜那の足を嗅いでいた。

どうやら慣れない人物がいることに対しての確認行為なのだろう。そしてフーちゃんは十分嗅ぎ終えるとまた首を伸ばし、竜那の頬に向かって――

ペロッ

「ひゃうっ」

生温かいモノが頬を舐め、竜那はつい声を出してしまう。

「あ、リュウちゃん！ フーちゃんに気に入られたみたいだね！」

「え？ そうなの？」

そう疑問系の声を出しながらも竜那はフーちゃんの頭を撫でる。触り心地はウサギに近かった。

「うん、フーちゃんは相手の気持ちとかを敏感に感じ取るから舐められたら懷かれた証拠だよー」

「だーもつくそっ、何で俺だけ唇なんだよこなくそー！」

一時の感情からようやく立ち直ったラグナは竜那の頬を舐めるという愛情表現をしたフーちゃんの行動に納得がいかず、唇を指で触って13回目の青春に心の中で別れを呟いた。

「でも13回目ってファーストって言わないよね？」

「いいんだよ俺がまともなキスだと認めない限り永遠にファースト

なんだよ。たくつ、これでこいつに12回も……」

「え？　じゃあ最初は？」

「あ、それは私だよー」

マナの何気ない微笑み顔で伝えられた衝撃の事実、その場の空気が凍り付いた気がした。

もちろんラグナはもう二口が告げない様子で、竜那は混乱したかのように両手をあっちこっちに振り回す。

「え、ええつと……？」

「あ、わたしが五歳の頃ね、昼寝をしているお兄ちゃんにこう、ちゅつ、てね。てへっ」

そう言っと思ひ出したのか頬を紅潮させるマナ。続いて視線をラグナに移すと、

「……いや、俺が自覚していないからカウントには含まれない……っておいタツナなんだその目は？　あと若干後ろに下がっているよな？」

「ええつと……」

うん、平静を保つんだあたし、うん……よし冷静になった。

心の中で竜那は身体がどん引きするのだけは何とか堪え、そして目の前の無害なニコニコなマナと袖をフーちゃんにハムハムされてるげんなりとした表情のラグナの両方を見て、

「まあ、してくれる相手がいてよかったじゃん。主に人間じゃないけど、いっそのことフーちゃんと結……」

「誰か！　俺を慰めてくれよ！　ねえティト！　何か言ってくれ！」

「油断しているお前が悪い」

「お前が一番の味方だと思っていたのに！ 俺もうお嬢に行けない！」

「ムウムウ」

「あ、フーちゃんお水だったね。今から持ってくるね」

まあ、とりあえずラグナの頭を撫でてやろう、

竜那はがっくりと膝を突いて沈んでいるラグナの頭をとりあえず撫で撫でしてあげた。

「ラグナは家ではあんな感じなの？」

「うん、毎度家から帰ってきたときは疲れていて魔力も結構消費しているときもあるからね。今回は結構使ったみたいだね」

「あー、納得」

何しろ自分を護るためや使徒を逃さないために色々魔法とかわしきものを使っていたのだから魔力を消費しているのは納得がいく。

二階の空いた部屋に案内された竜那はマナと会話をしながらそこに着くと、その広さに改めて驚いた。

「うわっ、あたしの部屋の1.5倍くらいあるね。しかもベット等の家具付きだし、おまけにパソコンもあるし、何て豪華な……」

「さっきお掃除したばかりだから大丈夫だと思うけど、どう？」

「物凄く十分すぎるよ。あー、じゃあそれ一つ運んで」

「はい、っておっとと、随分重いねこれ」

マナは竜那の私物がぎっしり入ったカバンの重さに驚きながらも

部屋の真ん中まで運び、竜那も残りの荷物をせつせと置く。因みにラグナはお昼までにまだ時間があるということなので少しでも回復しようとふて寝を兼ねての睡眠をとっている。それとフーちゃんには専用の小屋に戻ってもらっていた。

「んじゃあ早速封印を解こうかのー」

そう言っただけならしからぬ言動でその場で胡座をして座ると、嚴重なチェックと殺菌済みのカバンのファスナーを下げる。

すると中から彼女のお宝であるゲーム機、漫画本、ゲームパソコンソフト、ライトノベルなどがゾロゾロとカバンから溢れ出るようにして出てきた。というかそれしか出てこない。

「うわー、何かすごいものいっぱい出てきたねー」

「ふっふっふ、これぞ我が秘宝なのだよマナ。えーっと、んじゃあマナはそっちのカバンに着替えとかが入っているからそっちを出してくれる？ あたしはお宝の方に手を付けるから」

「うんー、分かったよー。あ、本棚はあとで他の部屋から持ってくれば大丈夫だよ」

マナは一般の女子が持ち合わせないような持ち物も特に気にせず素直に指定されたカバンから竜那専用の小さめの服を取り出し、それを木製のタンスの中にちゃんと分別して仕舞い込み始める。

一方竜那は本棚はあとで何とかすると言っただけなので今は自分のいた世界の思い出の品々を種類ごとに分けて後々面倒にならないように分けておくようにする。

——するとここで重大な欠点を発見した。

「あれ？ このテレビ、ケーブル繋がらない？」

部屋の中に置かれている机の横にあるガラス板のように透き通った高そうな液晶テレビにゲーム機のケーブルを繋ごうとするがまったく型が合わない。

そもそも此処は自分のとこと違う世界、こんな細かいところまで一緒のハズがないと改めて思い知らされた竜那は何だか気分が沈んでいくような感覚に襲われた。

「あー、それってリュウちゃんとのこのゲーム機？　ごめんね、型が合っていないみたいだね」

「ううん、まあそこまで期待……いやしてたけど……でもこの結末って……いやでも」

「ず、随分動揺しているみたいだね」

これであのゲームの続きができなくなりました、はいあたし乙。

竜那はもはや複雑な構造をした使えないデータ読み取り機と化した物体を恨めしげに見つめながらも、せっせと整理をしておく。

そして互いの片付けと部屋の模様替えが済むと向かいにある個室に二人で出かけ、そこにあった本棚を三つほど頂戴するとその中に先程分けておいた本類を全て並べ立て、無事竜那の荷物が入りきった。

「終わった」

「うん、少し疲れちゃったよー」

竜那と最後までちゃんと手伝ってくれたマナはその場で大の字になって倒れ、疲労を癒す。

部屋の中は既に竜那が元いた部屋と同じようになっており、本棚はシリーズごとに並べられており、机の上には二種類ほどのゲーム機と携帯型のゲーム機を二つ置いており、アニメのキャラクター全員集合写真のようなポスターも部屋の壁に貼られていたりしていた。その様子をマナは寝っ転がりながらもぐるりと見渡して感想を一言。

「そういえば随分変わった趣味なんだねー。何ていうか、色々」

「んー、あたしって普段はこういうこと聞かないけど、変？」

「わたしは良いと思うけど。あ、お兄ちゃんだったらズバツと変！っていうね」

「ふーん、まああたしはそう言うの気にしないからお構いなくー」

「あははっ、リユウちゃんって面白いよね」

今朝のこともあり、そして今回のお部屋の模様替えですっかりうち解けた二人は気がつかぬうちに何気なく話せるような仲になっていた。

それは竜那ののんびりとした性格でもあるし、マナの寛容な性格なのかもしれないが、少なくともそういう関係にはなっていた。

「あ、そういえば確かフレイアさんって人がマナにお菓子のお礼言っておいてって言われてたな」

「え？ フレイアさんに会ったの？ あ、お菓子気に入ってくれたんだ。嬉しいな」

「へー、マナってやつぱり、ていうよりもしかしてお料理できる方？」

「できる方かは分からないけど、一応この家の家事は全部わたしがやってるよー。お兄ちゃんそれだけは壊滅的に下手っぴだから」

だから一緒に暮らしてるんだよー、と言うことらしい。

ラグナって戦闘時とか戦場にいるときはかっこいいのに日常じゃダメダメなのか。

これからお世話になる家主の知らなかった部分を知り、竜那は少しだけ得（？）した気分になった。

「ふむ、それだけラグナのことが好きなんだねマナは」

「え、ええっ！？ リュウちゃんいきなり何っ！？」

「まあ、ファーストキスあげてるくらいだしね。それと昔『お兄ちゃんのお嫁さんになるの』』とか言っていたりしてた？」

「えええええっ！？ 何で分かるのー！？」

どうやら図星らしくあたふたと慌てる姿は可愛い。

なので竜那はそれに何かしらの萌を感じ取り、さらさらとしているショートヘアに手を伸ばすと優しく撫で撫でとしてあげる。

「ふっふっふ、まあ内緒にしておいてあげるよ（ニタリっ）」

「あ、あうー、な、内緒にしてよりユウちゃん」

「うーん可愛いなマナはもうっ、あ、そういえば教えて欲しいことが山ほどあるんだけどいい？」

「はうー、って、え？ あ、いいよ。リュウちゃんくノイレヴェン>だから知らないこといっぱいあるもんね」

相手が異世界から来たと承知しているマナは快く承諾してくれ、そして竜那は自分が知りたいことを質問に変え、そして頭の中で整理していき、それから質問を始めた。

マナはそれこそこの世界の当たり前のことからちゃんと答えてくれ、そして実に興味深い話がわんさかと姿を現してくれた。

竜那はそれらを聞き取り、生きていくのに必要な常識を理解し、ある程度は把握できた。

この世界は五つの大陸に分かれ、それぞれの代表的な国が大陸名と同じになっているのはラグナから聞いたのでそれは知っている。なので今回は前回よりももっと詳しい話が聞きたいとのことです。まず最初に驚いたのが、国の治安や政治等は軍が担っているが、何と『王』なる存在がこの国のどこかにいると言うことであつた。

「へー、王様いるんだ此処って」

「とは言つてもほとんど軍に任せっきりだけどね。でもごくたまに関わってきたときは誰も逆らえないくらい偉い人なんだよー」

その王というのは軍の高位人物達よりさらに上の存在で、一般人はおろか軍人でも元帥クラスでなければ会うことができないという雲の上の存在であり、直接的な支配は行わないがその発言は絶対だという。

ただし竜那が想像したような暴君主義ではなくあくまで国民を思う気持ちが大きいので悪いことは起きていないようである。

そしてその王という存在は、各大陸に一人ずつ存在するものらしい。

「ふむふむ、あ、ねえマナってそう言えば、魔法使える？」

「魔法？ うん使えるよ。あ、じゃあ見せながら魔法のことも説明しようね」

そう言つてマナは胸の前に、ゆっくりと、掌を上にした手を差し出す。

そして頭の中では、一瞬の閃光のイメージをすると、

バシユンツ

と掌の上に小さな音共に、放電現象が起こる。

「あつ、電気が生まれた！　すごいすごいっ！！」

前回ラグナの魔法は何度も目にしているが彼は基本ではなく上級のばっか使っていたため今いち魔法というものがハッキリと掴めずにいた竜那は、目の前の少女が見せてくれたそれらしい魔法を見て感嘆の声を上げる。

「それほどでもないよー。えっとね、私はこの『雷』属性を使うのが得意んだけど他にも『火』、『水』、『氷』、『風』、『地』、なんて言うのもあるんだよ。因みに私は雷と水しか使えないの。全ての属性を使える人なんて、おそらくこの世界にはいないだろうけどねー」

そしてマナによる一般的な魔法の常識についての説明が始める。
まずこの世に存在する魔法は前回のラグナの説明から大まかに分けて四つあったが、その中でも特に古くからある魔法の常識の方の説明をする。

その古くから伝わるものを分けると『魔術』と『創世^{オリソンテ}人』という風に分けることができる。因みにこの二つは全て万物に宿る力『マナ』、通称『魔力』を消費することで発動することができ、そして『魔術』の方は詠唱型と詠唱不要型というのが存在するという。

さらに魔術というのは使用するモノの魔力や経験、能力、そして詠唱ありか無しかなどで威力が三段階に分けられるという。
詳細は以下に記す。

レベル1：低級魔法。詠唱不要。

詠唱不要で頭の中でイメージを思い浮かべれば自然と掌の上に魔力が集約され、具現化して形を成す。ただし性質を形に表しただけなので擬似的な現象に過ぎず、『火』のように燃やしたりはできないので事実上『打撃』に近い。威力はせいぜい人にもよるが、最大で相手をぶん殴ったくらいの威力である。

レベル2：中級魔法。詠唱不要、詠唱型の場合あり。

この辺りから本格的な威力を兼ね備えた魔法であり、それぞれの属性は人によつては本物と同等の威力を持つようになる。なおこの程度の魔法が使えるようになるとその属性に見合った個人特有の能力が使えるようになり、レベル1より遙かにバリエーションが増える。

レベル3：上級、および戦闘魔法。詠唱型。

この辺りからは最早戦闘用の魔法と言っても過言ではなく、威力も『本物』以上となり果て、またこのレベルの人間は『魔術師』と呼ばれる軍に所属している場合が多く、国の貴重な戦力となっている。

これはあくまで魔力を用いた魔法なので別の派生型の魔法も存在する。

「おおつ、ってことはラグナは間違いなくレベル3なわけね」

「うっん、お兄ちゃんは『契神者』だからさらに上に行くよー」

「え、そうなの？」

「あ、そうだ。リュウちゃんは『創世人』^{オリソンテ}のこと知ってる？」

「んや、知らないけど」

「じゃあ丁度良いからそのことも話すね。『創世人』^{オリソンテ}って言うのはね——」

創世人とは、

ひとえに言えば人と昔から関わり続けてきた世界を見守ってきた神が精霊のような存在であり、人と同じ感情や精神面を持っていて男女の分別がある。創世人は通常、彼らが目利き、又は氣に入ったモノに睡眠中など、そのものが一人になったときに交感で呼びかけ、両者の承諾があつて初めて契約を結ぶことになる。

つまりは彼らは個人個人にえり好みがあり、その中でも必須条件が『魔力の量』だとされている。

その理由としてはる程度一般人より多くの魔力を持っていないければ創世人の『声』^{オリソンテ}を聞き取ることができないし、力も十分に発揮できないからである。ただし、契約を成功させれば全ての面で他の人間より大きな力を発揮でき、中でも『五大貴族』と契約をしている創世人は古くから代々国を護ってきた一族で強力な能力を所有しており、各大陸の力の均衡を保っている。

「五大貴族？」

「うん、この世界には一般人と貴族に分けることができてね、その貴族の中でも王と同じように各大陸に一つずつとても強い力を持っている貴族がいるの」

この世界には階級というモノも存在するらしく、人民皆平等の世

界で生きてきた竜那にとっては少し意外であった。しかし彼女の話によると一般人、つまり平民はどうやら自分のいた世界および日本と同じように考えて良いらしく、貴族はというと五大貴族の説明もあったが長年国に仕えてきた一族と考え、軍の中では高い地位を約束されている人たちと解釈することができた。

（するとあのフレイア三将って人も貴族なのかも。なるほど、ラグナが敬意を払うわけだ）

「ほうほう、何だか面白い世界ではないか……あ、ねえねえもしかして、あたしも魔法使えるようになったりする？」

「ん？ ああうん、努力して魔力を覚醒させればきつと使えるようになると思うけどね」

「おおおつ、まさかここに来てあたし魔法少女になれるなど思いもしなかったよ！ うおおつ、あたしの魔力よ、覚醒せよー！」

この世界に来る前は、魔法などというモノはゲームか漫画の中だけしか出ない空想物だと思っていたのがここに来てから使えるというのだから夢見る乙女（？）としては興奮しないわけにはいかなかった。

そしてテンションが上がったのか、竜那はその場でバツと立ち上がると、

ぐうううう

朝食を食べていないのでいつもより盛大に竜那のお腹が鳴った。

「……の前にお腹の虫が覚醒しちゃった」

「ぷつ、ホント面白いねリュウちゃんは。そうだね。そろそろお昼になるから食べよっか？ お兄ちゃんもそろそろ起きる時間だし」

「それ、反対の賛成ね」

「……うん、それって賛成って意味だよね？」

こうして二人は空いたお腹を満たすべく、その場を後にした。そして昼食を起きたラグナと共に食べ、そしてその後ラグナは自室に向かい『やることがある』と言って行ってしまったので竜那とマナは共に互いのことを話しながら今日一日を過ごしていった。

「それで、いつ動くつもりだ？」

「明日、ってところか。何、そう急かすこともねえぞ」

「だがお前がタツナを真に思ふのなら、……分かっておるであろう？」

「……俺がしてやれるのは、タツナに、あいつらに降りかかる危険を最大限に取り除くことだけだ」

そんな会話が、ラグナの自室で行われており、彼はため息を一つ吐いた。

「……まったく、だから上層部の連中は嫌いなんだよ。あんな子ですら、手駒としか見ないんだから」

「それがお前が選んだ選択肢だ。だからお前は、我々は彼女に最大限の支援をするしかない」

「了解。こりゃまた、俺に非番は永遠にこなさそうだな」

そう言って背もたれに凭れ掛かり、アカトルと呼ばれる棒状の白いお菓子を、一つ嚙った。

そんな彼が懸念している例の少女は、マナに妹キャラ理論を熱く語っていた。

10話：学園通学

翌日、ラグナは薄ぼんやりと眼を開けて起きた。

見知った天井を視界に映し込ませ、そしてすぐ側にある時計を覗き見るとまだ1時間ほど余裕があったので幸せの二度寝に突入する。ぬくぬくの残った布団は何よりも最高ですぐに眠気を呼び戻してくれる。

だが、その平穩の破壊者はすぐにやってきた。

「お兄ちゃん！」

ドアの取っ手が捻られ、ラグナの自室にマナが声を掛けながら入ってきた。

そしてあるうことがベットの一步手前で軽くジャンプするとラグナの上にダイブし、見事お腹に着地する。

ぬぐはア！？ とラグナは思いつき悲鳴を上げる。

一瞬、誰かの奇襲攻撃なのではとすぐさま迎撃態勢を取ろうとするが、お腹の上には柔らかい感触が存在しており、それがすぐに女の子の感触だと分かれると、ぐっと自分の顔を覗き込む右頬に×字の傷痕を残すあどけない顔がそこにあった。

「ご飯できてるから起きてよー」

「~~~~~ なあマナよ。お前、密かに兄の首狙ってねえか？」

「え？ でもリュウちゃんの世界では妹がお兄ちゃんを起こすときはこうするらしいよ？」

「毎朝内蔵系に深刻なダメージを与える妹がいてたまるか！！二度とすんなよ！」

「あ、あー、で、でも起きたみたいだから、あ、ご飯、ご飯ができてるから起きてよお兄ちゃん！ ティシュトリヤさんも何か言つてよ」

「そつだぞラグナ。二度寝は癖になると日常に支障が出る」

「音信不通接続不可だコノヤロー」

だがラグナもラグナでこの場を引くわけにはいかなかった。
美味しい朝食も魅力的だが今は布団の中の方がそれを勝っているのだ。

なので敢えて黙秘を堅持し、マナを両手で掴んでどかすと、そのまま諦めて食卓に戻っていつてくれるのを願う。

だが現実はそのままで甘くはないことを、彼は身をもって知ることとなる。

「もうお兄ちゃんったら。ねえフーちゃん？」

「ムウ~~~~」

ペロッ ハムハムハムハムハム

「ぎゃあああああああ——！？」

不意に耳を何か生暖かい粘膜で触られ、さらに何度も甘噛みをされたラグナは思わず大声で飛び起き布団をはね除ける。そして見ると、いつの間にか部屋の中に入ってきた白い子鹿のようなペットのフーちゃんがつぶらな瞳でこちらを見ており、そして再び首を伸ばそうとしたので手を振って追い払う。

そして追い払われ、諦めたフーちゃんの背中を見送ってから、

「くそっ、最強の目覚まし生物兵器がいるとか……………分かった、飯食いに行く」

二度寝ができないと判断したのか、ラグナはため息をついて言った。

「で、タツナの奴は？」

「タツナ？」

「あ、えーっと、」

そういえば彼女の名前は此処ではリユウナだっただけか。

つい彼女の本名を言ってしまった彼は少し気不味そうな表情をしたがすぐに、

「タツナってのはリユウナのアダ名だ。呼び方が二種類あるけど俺はそっちで呼んでる」

「あ、そうなんだー。あ、そうそうリユウちゃんはまだお寝ん寝だよ？」

「ならそいつにもシスタープレスを喰らわせてこい。あとフーちゃ

んも持つて行つて俺と同じ目に遭わせてこい」

「あ、朝から何だか不機嫌だねお兄ちゃん。でもフーちゃんは二階に行かないように躑けてあるよ？」

朝から怒濤の連続攻撃を喰らえば誰だつて不機嫌になるつてのコノヤロー。

心の中でラグナはそう思ったが、言つても仕方がないことだったので昨日の夜に変なことを吹き込んだ竜那が自分と同じ目に遭うように祈ることにした。

「リュウちゃん」

二階へやつてきたマナは声を掛け、そして竜那のいる部屋のドアを開けて中に入る。

そこは昨日、この部屋の主となつた少女と共に荷物の中身を一緒に並べた思い出のある光景が広がっており、そして窓際のシングルベットには彼女がスースーと小さな寢息を立てて眠っていた。

「あ、ふふ、可愛い寝顔」

そんな見た目も相まつて幼い顔立ちの少女の寝顔はマナの母性本能を擽るが、一応昨日の夜のお喋り（計三時間、うち妹熱論一時間）で彼女が既に17歳であることは聞いているので、改めてまだ16歳、今年17歳のマナは竜那のいた世界の人は『見た目が幼い』そついつ世界なんだなと認識した。（偏見である）

「ムニヤムニヤ……スースー……」

「あ、見取れてる場合じゃない。リュウちゃん朝だよご飯だよー」
「うう……………戦争は数だよ兄貴……………良い物を見付けてきたよー」

幼さを残した顔立ちを持つ身長143cmの少女の朝の寝言がコレである。

そのいきなり発言にマナはポカンとした表情で固まる。
さらに不可解な寝言はその後も続く。

「ふはははは、じょじょ俺は人間を止めるぞお、う……………」
第三部完

「お、終わっちゃだめだよリュウちゃん」

思わず立ち聞きをしていたマナは何かを終えようとしている竜那を阻止すべく思いつき揺さぶってみるとようやく閉じられた目が開かれ、眠り眼を擦りながら上体を起こしてくれた。

「だ、大丈夫リュウちゃん？ さっきから普通の人が言わないような寝言を呟いていたよ？」

「う……………あ、マナおはよう……………」

「と、とりあえず朝食ができてるから起きてきてね？」

「うん……………トイレ行つてからそっちいくよ」

「分かったよー。じゃ、用意してくるねー」

竜那がベットから降りながらそう言ったので、マナはこれ以上の起こしは必要ないと考えて先に一階へと向かった。その後についていくように竜那も目を擦りながらも階段を降り、途中でマナと別れてトイレへと向かう。

そしてドアを開ける頃には七割ほどの意識を取り戻した竜那はふとその光景を見て立ち止まる。

トイレはこの家が西洋式だからなのか、それともこの形の方が色々と便利なのかは知らないが一応西洋式トイレである。それに丁寧なウォッシュレット付きである。

因みに昨日寝る前に二回ほど使用したのだが、そこでふとあることが判明した。

（あ……そういえば当然だけどラグナも使ってるよね？）

よくよく考えれば同い年のマナがいるとはいえ、此処は男の家である。

しかも他人の男なので娘を愛す全国のお父さんならばきっと卓袱台をひっくり返し、愛娘を取り戻しにどこぞの馬の骨と拳を交わしに来るであろう。

つと、竜那は想像力を掻き立てて見るが、ようは目の前のトイレはラグナが使ったことがあると言うことは明白だということである。そして昨日は二回自分が使った。つまり、

（ああ、お父さん、お母さん。あたしは汚れてしまいました、と）

一瞬、やるせない喪失感が胸を過ぎったが大してそういうのは気にする性格ではないのでとっとと用を済ませるために中に入ってからドアを閉めた。

そんなこんなで着替えを済ませ、そして一階のリビングにてラグナは言った。

「——っというわけでもう一度中央機関に向かうわけだが」

「また行くんですかい」

「また行くんだよ」

朝食の遣り取りの中で、ラグナは竜那に昨日までいた基地にもう一度向かうと説明した。

何でも、竜那がこの世界で生きていくために必要なモノができたというらしく、それを取りに行く、という単純な内容である。

「ってことは、私はお留守番？」

「別に来てもいいが、フーちゃんが寂しがるぞ？」

「う、ううでも……一応今日は天気は良いし草と水をちゃんと補充すれば大丈夫だから平気だよー！洗濯物だって、あ、そういえばどれくらいで此処に帰れるの？」

「うーんまあ、夕方くらいだな。それなら平気だな。んじゃ、各自支度するように」

「はいー！」

簡単な一日の流れを発表し、三人は朝食の後、それぞれ自室に戻って支度を始めた。

「はい、着きました、と」

昨日乗った無音公共高速車両リニアモーターカーで基地に一番近い駅を降り、そこからラグナが手配してくれた軍所属の車に乗せてもらっていくこと10分、車を降りて見上げるような高さを誇る基地を仰いで竜那は言った。

そして改めてじっくりと観察すると、それは基地というよりどこかのハイテクを駆使して改造されたお城のようであり、基地の頂点は白い雲がちよくちよく浮かぶ蒼天を貫くようにしてそびえ立っていた。

「おーいタツナー。本当にそれ持って行くのか？」

同じく車から降りてきたラグナから声を掛けられ、竜那は肩越しに自分の背中を見ると、

「だって局長さんに持ってきてって頼まれたからねー」

そこにはバックが背負われており、中には何かがぎっしりと入っているのか、動かすたびにガサツと音を立てた。

「フレイアさんは今日はどうなのかなー？」

「三将は無理だろうな。あの人は多忙だから、そうそう時間はとれねえよ」

「うーそうなのかー」

「ま、此处にいても仕方ねえし。さてっ、タツナ、マナ、とっとと行くぞ」

そう言ってラグナが基地の入り口の方に向かって歩き始めたので、二人はその背中を追うようにすぐさま付いていった。

基地内に入ると軍服姿の年齢様々な男女がロビーを行き交っていた。

ある者は書類が入っていると思われるファイルケースを運んでい

たり、ある者は書類の束を片手でもって走って横切ったり、ある者はトボトボと疲れた顔をして歩いていった。

「おお、これぞまさしく忙しい仕事場だね」

「ま、此処はいつもこんな感じだ。そして向けられる不思議視線」

ラグナが何故こう言ったかと言えば、当然と言えば当然だが今の彼らは私服でもある。

しかもラグナは胸に一応二佐の階級章を付けているが後ろにはこの場には不自然な女の子二人である。

この仕事場に場違いな存在は当然として注目の的になる。

「おおつと！　そこにいるのは二佐殿か！？」

つと、此処で先程疲れた顔をしてトボトボと歩いていた人物が周りにから浮いた三人に気がつき、一気に疲れが吹っ飛んだような表情になると早足で駆け寄り、三人から数歩手前で足を止めた。

その人物はラグナよりも少し背が高く、長く伸ばした髪と整った顔立ち、そしてオリブ色の野戦服と胸には階級章を付けた美青年と言った方が分かり易いであろう。

「よおルーグ、お前机仕事か？」

「そうなんだよな、あ、タツナにマナちゃんも来たのか？」

「どうも」

「ルーグさん任務ご苦労様です」

そんな彼、ホーン3のコールサインを持つルーグ三尉は二人の少女の挨拶を受けると、何か恨めしそうな顔でラグナを肘で突いてみせる。

「おつつつ前はホント羨ましい立場ですねこんにやるめがつ、可愛い華を二人も連れてきてさ！」

「勘違いすんじゃないぞ、マナは妹で、タツナはガキだ」

「あ、ラグナ、だからあたしは17歳だ何遍言わせるのよっ！」

「そんな見た目で主張されても説得力ゼロだけだな」

「たふく、なあマナちゃん、今度一緒にさあ」

「え、今度一緒に？ 何をですかー？」

「ルーグ」

不意にルーグの発言にラグナが無機質に名前を呼ぶ。

別段怒っているような口調ではないが無表情が何かしらの威圧感を与えている。

いや、むしろ何かうつかり地雷の上に足を載せようとしている仲間を見るかのような視線であつた。

「……………はー、冗談だ。俺が”危ねえ”からなそれは」

「分かればいい」

「「？」」

何かホッと安堵の息をついた二人に二人の少女達は不思議顔で？マークを頭に浮かべる。

「まあ、とりあえず俺は【表】の仕事をやってるってこつた。な、シヨチピルリ？」

そう彼は視線をやや斜め上に向けて誰かに意見を求めるようにする。——すると、

「（けどあんたさー、机仕事が苦手だからただぶらついているだけじゃないのー？）」

「あ、お前そういうのは内緒にしろって言ったじゃねえか！」
「……どうりで、此处で会うワケか」

ルীগの方から不意に、大人の女性の声が響き、その声に対してルীগが慌てたように声を出す。

シヨチピリと呼ばれた声は半ば呆れたようにため息をついた。
この遣り取りからラグナは普通に真面目に机仕事をしていればそもそも出会うことはないと答えが出た。

しかもルীগが向かおうとした方向は演習所や女性寮といったものでそう言った仕事に必要な設備などは逆の方向である。となると大方その辺の女性軍人をナンパするつもりでいたのであろう。

「先日はご苦勞であつたなシヨチピリ。それと、互いに苦勞するな」

「（だよねー。あなたのとこも）」

「そうだな、相変わらず名前をちゃんとせず、しかも女性に対しての配慮がまったくなくなっているのだ。この前付き合いを申し込まれたのに逆に泣かせて帰らせてしまった」

「（それだったらこつちだってこの前の任務が終わってからその辺の女性軍人に声を掛けてお酒飲んでさ、で酔った勢いのままベットの中で運動会やってたわよ）」

「「シャッラップ——！！」」

まるで井戸端会議のように会話をする自分たちと契約を交わしている創世人達オリソンテの契約者の暴露大会に対して二人は即座に大声を上げて一部の人のしか聞こえない会話を必死で掻き消そうとする。

「え？ 何？ もしかしてあたしの知らないどこかで新キャラ出てない！？」

話の内容が今一理解できないマナの隣で声の聞こえない竜那は鋭い直感でそう言った。ゲーマーは侮れないのだ。

「こらルーグ！！ 貴様そんなところで何油を売っているんだ！？」

すると不意に怒号が一直線にこちらに飛び、全員が一斉に顔を向けると髪を短く刈り込んだ男が片手に紙の束を握りしめてドシドシと近づいてきた。

「うげっ、一尉……」

「貴様、作戦後の報告書と必要経理の明細書はどうしたア！？」

そう眼に血を走らせながら怒鳴りつけてきた人物に竜那は気がついて恐る恐る声を掛けた。

「あ、バッカスさん……？」

「バッカスさんおはようですー」

「ん？ あ、これはこれは…… タツナ殿。それに二佐とマナ殿もか」

竜那に声を掛けられ、ようやく気がついた様子で驚いた男はコールサインクロー2ことバッカス一尉でルーグを探すために走り回っていたのか、若干息を荒くしていた。

「あ、あれ？ 怪我をしてたんじゃ……？」

「ああ、だが一日あればあんなかすり傷程度の傷なぞすぐ治ってしまふ。それより、あるとき君を護衛しきれず、すまなかつた」

そう言ってバッカスは深く頭を下げようとしたので竜那は慌ててそれを止める。

「相変わらずの丈夫な身体をお持ちなこった一尉は。でも一昨日の任務中にはピチピチの女の子達の——」

ガンッ

途端、ルーグの言葉を遮るようにバツカスの鉄拳が振り下ろされる。

「てえええっ——！？ 何だよ一尉！」

「禁則事項だ」

「んだとこのエロ親父が！！」

ガシッ ミシミシミシッ！！

言葉を遮るように、今度はルーグの顔面に指が食い込む。

「ぎゃアあああああああ——！！？」

「ところで二佐。今日ここに来たのはタツナ殿と関連ありか？」

「ああ、ま、そう言ったところかねー」

悲鳴を上げているルーグの顔を驚掴みにしながらバツカスは知らんぷりでラグナにそう訊ねる。

ラグナもルーグの悲鳴をBGMにそう答え、その返事に対してバツカスは眼を僅かながら細めた。

その会話を聞いていた話の中心に居ると思われる張本人竜那は何だか重大そうな雰囲気醸し出している二人に何だか少しだけ不安を覚える。

「それじゃあ、俺はデスクワークに戻る。いくぞルーグ三尉」

「それより手を離せコラアッ！ こんなんじゃ女にモテなくなる！」

「安心しろ。このあとお前の相手は紙の束とモニター画面だ」

「安心できねえええええ！！ いやだア！ くそっ！ メーデー！」

「メーデー!!」

そう叫びながら机仕事という地味な作業地獄へズルズルと引きずられてったルীগと連れて行ったバツカスの背中を見送り、二人は軍人達が行き交う雑踏の中へと消えていった。

「たくつ、ルীগの奴もさっさと終わらせればある程度の自由時間が作れるのにな」

「バツカスさんって、お父さんみたいな人だね」

意外な発言だったのか、ラグナは少し吹き出しそうになる。

「あーまあ、俺たちの中じゃ一番年上だからな。責任感が一番強いし、俺にも遠慮無く鉄拳振るうしな」

「でも優しい人だよー？ 甘いもの好きだし」

「ほうほう」

「んじゃ、こっちはこっちで用を済ませるか。じゃ、マナ、此処でお前とは一旦解散だ。一応ソフィアの奴も来ているらしいから」

「はい。じゃ、リユウちゃん此処でね。バイバーイ」

マナは手を振って二人から離れると先程の二人がいなくなった方向へ駆けて行った。

「え？ ちょっとラグナいいの？」

「あ？ ああ、大丈夫大丈夫。昨日言っただろ？ 一応”関係者”だからってことをよ」

「……あたし、この基地の機密性を疑うよ」

「さて、ほんじゃまア、さっさと済ませに行くぞタツナ」

そう言ってラグナはエレベーターの方に向かっていった。

後で分かったことなのだが、エレベーターで下りる際ラグナはボタンに表示“されていない”階へ行くために自分のIDカードを目で分らないボタンの下にあるスキャナーに通してから来ているようである。そのことに少し疑問を持った竜那だが、エレベーターが開いて彼が行ってしまったので聞く暇もなく慌てて追いかけていった。

大会議室のような部屋に大きな机。電子端末と何かしらの機械のファイル。そして近未来的な大きな電子パネルが一際目を引くこの部屋で二人は座って待っていた。

そしてドアの取っ手が捻られ、誰かが入ってくる。

「じゃーん♪ 二佐の注文通りの品はこちらよー♪」

そう言つて二人の前に此処の局長であるというマリンが持つてきたケースを差し出す。

薄透明なケースなのでぼんやりとしているが、何か極小の黒い物体があるように見える。

「……………何ですかこれは？」

「これはね、リュウナちゃんがこの世界で生きていくのに必要な装備品だよ」

そう言つてケースを空けると、中には極めて小さな四角形をした黒い物体と、薄透明なケースの外側から分らなかったがコンタクトレンズそっくりな透明な物体が鎮座していた。

「あたしが、生きていくために？」

「そう、さて此处で問題。リュウナちゃん。この世界に来て何か違和感がなかったかな？」

「違和感？ うゝゝゝん……」

腕を組んでマリンに言われたことを反芻しながら考え込む竜那。その頭の中で、様々な想像力が展開されていく。

問一：この世界に来てから何か違和感がなかったか？

答案その一：ボクっ娘がいた——違うと思う。

答案その二：お兄ちゃん大好きっ娘がいた——これも違うと思う。

答案その三：テレビにゲーム機のケーブルが繋がらなかった——うん、これだね。

「ええつと？ テレビにゲーム機のケーブルが繋がらなかったことかな？」

「……すごいピンポイントに狙ったなこいつ」

「あはは、ナイス珍回答だねこりゃ。でも違うね。二佐、言ってあげなさい」

「ああ、」

そう返事をしてラグナが自信満々に答えた。

「俺の13回目の青春がなくなったことだ」

「まだ引きずってるのラグナ!？」

「またフーちゃんにやられちゃったの二佐? 相変わらずガードの
緩いことよね」

「……………冗談だ」

あまり冗談そうに見えない深刻な表情であつたが、ようやく真面目に答える気になったのか、自分の口元を指さして竜那の方に顔を向けた。

「? 何? 虫歯?」

「違う違う。お前、俺が何語で話してるか分かるか?」

「え? そりゃもちろん日本語……………あれ?」

ふと頭に過ぎる違和感。

言葉を途中で切らした竜那は何故そんなことを尋ねてきた理由を考え、何が言いたいのかがすぐに解つた。ここは異世界。文化、も
という言葉も違うはずなのになぜ自分達はこうして普通に会話を交えているのか。

「そう、これで分かつた? リユウナちゃんからはリユウナちゃん
の世界の言葉が。私たちは私たちの世界の言葉で互いに聞こえているのよ」

「た、確かに……………」

「だから此処に用意した装備品はあなたがこの世界で『会話』と『
読み』を可能にするのよ」

「え……………じゃあ、何でその機械無しであたし達は言葉が通じてるの
?」

彼女の言っていることが正しければこの二つの機械を身に付けていなければ会話が成立しないことになる。そのことについて問うとマリンはニマニマとし、ラグナの方に指を差すと、

「“それ”が彼と契約を交わしているティシュトリヤの能力の一つ、彼の側にいれば自動的に疎通ができるようになるのよ。ほんと便利な能力よね。さしずめ歩く翻訳機ってところかしら」

言われてみれば、確かにいつも彼が側にいたように思えた。

彼女の話によるとラグナは『水の疎通』なる魔法が使用可能で、相手の意思、自分の意思を伝えたり聞き取ったりすることが効果範囲以内ならできるといふ。だからありとあらゆる言語を理解できる彼だけは異世界に赴く際は翻訳機は要らない。しかし分厚い壁などに阻まれていたりするとその効果は薄くなる。

（あ、だから一昨日のあの金髪美少女の言っていることが分からなかったわけだ……）

「彼ね、隠し芸が多いのよ。ま、それが彼の十八番おはしばんってとこだけだね。因みに最初あなたと会ったときはあなたはあなたが来るって情報があったからあのときは私も翻訳機付けてたわ」

「へえー」

「その話は置いとけ。さて、今回ここに来たのは四六時中お前の側にいるわけにもいかなからってことで今回局長率いる開発局の研究員達に作ってもらったこの翻訳機と読解機を身に付けてもらっためだ」

「サイズとかはスキャンなどで分かっているからあとはリュウナちゃんの世界の言葉をインプットした超小型機械ナノマシンで二佐がいなくてもあなたは文字通り『この世界の人間』になることができるわ。このレンズの方もこの世界の文字と認識したモノならあなたの世界で言う

日本語に置き換えてみる事ができるわよ」

因みに両方とも超小型電池とパルス発生装置を使用しており、小さな外観とは裏腹の優れた持久力を備えていて充電すれば最長一ヶ月持ち堪える。しかも充電は簡単に作業はいたってシンプル。一次コイルはすでに装置内に蔵されている——つまりは体内に入っているのもので外部コイルはクッションタイプのパッドやベルトに組み込むことができる。なのでパッドの上に座るか、ベルトを装着すると15分後には充電完了である。

このような電池は竜那のいた世界でも実在する。

「な、何だかすごいお金が掛かってそうなの……」

「まあ、それ相応に高価だけどね。さて、早速装着しようか。ところで二佐は此処で待つてなさいね」

「へいへい。後日礼はさせてもらう」

「どうもねー。んじや行きましょ」

「い、痛くないよね？」

「大丈夫大丈夫。耳と眼に入れるだけだから」

「その時点で既に不安なんですけどっ！？ あ、ちよつ、あれ……」

「行つてらっしゃーい」

首根っこを掴まれてズルズルと引きずられていく竜那の姿を、ラグナは何だか楽しげに見送っていった。

「そう、一昨日のあの子が」

「うん、リュウちゃんて言うのー」

「どんな子なの？」

「少し変わった趣味を持つてるけど、とても面白い子だよー」

「マナちゃんが言うならそうなのね。ふふ、会いたいな」

「たぶん近いうちに会えると思うよー。お兄ちゃんが何とかするはずだからー」

「ってことはもう必要な手続きは揃ってるのね」

「一緒になれるといいね。えへへ」

そんな二人の会話が、基地の一角で行われていた。

そして二人の前の金網の向こうに、巨大な何かが唸りを上げ、歩いた”。

「うゝ耳の中とか……何か変な感じ」

「でも気になるほどでもないでしょ」

「そうだけど……でもいきなり手術台みたいところに寝かされて、白衣とマスクの人がわらわらが近づいたときにはオワタ思ったも

ん」

「まあとりあえずご苦労さん。お、そう言えば例の品はあるかしら？」

「言われたとおり持ってきたよー。ついでにこの世界のテレビには繋がらないゲーム機も一緒に」

「ほうほう、そりや興味深いものも持ってきてくれたのねー」

無事、翻訳機と読解機を装着した竜那はマリンと共に部屋に戻ってきていた。

竜那はカバンを持ち上げ、それをマリンに渡す。

「どれどれ……おおこれはなかなか。ねえ、もし良かったら私がこれ預かってこの世界で使えるようにしてあげよっか？」

「え、え、本当！？」

「うおーい、仕事しろ局長」

マリンからの提案に身を乗り出している竜那の隣でラグナがぼやく。

「だってー、ここんところ目新しい物品がないしー。それに仕事と言っても本格的に忙しくなるのは七日後だからそれまでに仕事しながら弄れる何かが欲しいのよー」

「<龍機士>^{ドラゴンヘッズ}の点検と新装備案でも練ればいいじゃねえか」

「残念でしたーもう済ませましたー」

「？　そういえばラグナ何やってるの？」

二人の会話の中、竜那はふとラグナの行動に注目した。

彼は先程から少し大きめの紙一枚に何かをせっせと書き込んでいた。普段ならそれは単にここの軍関係の報告書や作戦提案書だと思っていたが読解機を眼に装着した彼女にはその資料の見出しが読め

た。

【アクエリオン中央魔法学園 転入届】

「……転入、届？」

「あ、そういえば局長、こいつの身長とかは？」

「大丈夫大丈夫、もうデータは送ってるから採寸はあつという間よ」

「ばあさんの方に話も通ってるみてえだな、その感じだと」

「そうねー」

「相変わらずこういうときだけ軍って準備が早すぎるよなー」

「まあそれだけ期待が込められてるんでしょ？」

「ちよちよちよっ、何々何なの？ 何の話なの？」

一つの台詞に何という単語を連発する竜那にラグナが顔を向け、まだ途中の転入届を持ってヒラヒラさせる。

「何って、決まってるんだろ？ 言葉も分かる。文字も読める。あとお前に必要なのは『教育』だろうが」

「え、ちよっ！ あたし異世界から来たんだよ！？ 住所とかその他もろもろは！？」

「住所、その他もろもろは偽情報でいい」

「偽造書類！？ そんなあたしいきなり犯罪に巻き込まれてない！？ バレたらどうすんの！？」

「行きたくねえのか？ マナもそこに通ってるんだが」

「めっちゃ行ってみたいです……じゃなくて！ バレた場合は――

――！？」

「安心しろ、そのために『俺』がいる」
「え？」

彼の言葉の意味が分からず、返答を求めるかのように視線をマリ
ンに向けると、彼女は微笑んで言った。

「そう言うことよりユウナちゃん。これが彼の【表】の任務なの」

長く、綺麗な廊下に足音が反響していく。

そして『二年B組』と書かれたプレートのある教室の前まで歩き、
少し間を空けてからドアを開けた。

するとその教室の中にいたブレザーの制服を着た十代中頃の少年
少女達の視線が一気に集まる。

その視線を浴びる中、教壇の方まで歩き、全員によく見える位置
に立つ。

そして今自分の中で何だか逃げ出したくなるような緊張が生まれ、
平静を保っているが心臓を握りつぶされそうな感覚がそこにあった。
隣で自分がどういう経緯でこの学校に来たのかなどの簡単なプロフ
ィール紹介がされているが何となく耳に届かない。

緊張しているせいかな、まるで新しく自分の身体に合うように作ら

れたこの黒緑を主体にして作られたブレザーとスカートも鎧を着込んだみたいに重く感じる。

「ってことで、自己紹介を」

隣で聞き慣れた声を掛けられ、少女は少しビクツとしたが、持ち前の精神で何とか持ち堪えると、クラス内の生徒達にできるだけ良い印象を持ってもらうために愛想良く自己紹介した。

「どうもリュウナです。これからこのクラスでお世話になります。よろしく」

（っというわけで、夢の魔法学園に転入しましたとさ）

あの日から一日を挟んで今日。
二年B組 出席番号三十二番 リュウナこと槻汐竜那は学園に足を踏み入れたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6865/>

龍巫のクロニクル

2011年11月15日01時45分発行